趙州㊀東院の西、」と。是れ結交頭に向つて力を得るにあらず、大凡誠を存して向慕す、本聞見談柄を希はず、正に確然として身を淸うし意を潔うして內虛閑を守り、外聞見を廓いにして、密に慧及を運して情慾を剸割し、返照回光せんことを欲す。靈雲の桃花を見、香嚴の擊竹を聞き、以至是れ風動くにあらす、是れ幡動くにあらす、仁者の心動す。風鈴の鳴るに非す、我が心鳴ると云ふが如きのみ。

處謙首座に示す

先德機を垂れ敎を立つ、初より等閑なるにあらす、必す萬世をして法を仰ぐ標準たらしむ。是の故に摩竭、室を掩ひ少林冷坐、毗耶詞を杜ぐ、善現宴寂す。蓋し爲すこと有りて爲す、㊁北辰の位に據り、百川の潮宗虎の如くに視、龍の如くに驟り、風回り雲合ふが如し。有ることを知る者は、默して其の趣向を識る、道理を做さず、便ち直に領じて深く其の閫奧に入る可し、卽ち體裁步驟、自然溶合す。其の初めて立するに當りて適に會するが若くに似たり。己が形聲を成すに及んで則ち掩ふべからす、卓々として世を驚かし、漸々として日に新なり。德嶠、白木の棒を縱にし、濟北、奮雷の喝を振ひ、俱胝只だ一指頭を立て、秘魔篙の鐵杈子を擊げ、象骨三毬を棍し、禾山の四打鼓、國師の水椀、潙阜の牧牛に至るまで、俱に逸群絕類の作略を逞す。而して㊂西園潛を燒き、㊃金牛、飯を召び、天皇の餅、趙州の茶、細微を極めて淵奧に洞徹す、時機に負かす、宗に超え格に出でたり、眞の麒麟の頭角、師子の爪牙なり。異世に之を仰ぐとも跂て及ぶ可らす、一句を發し一機を施すに逮るまで、尤も意を以て象り名を以て模す可からす。有志の士は未だ發足せざるに、已に此の作を蘊む、蓋地に方を超え緣に遇ふ、豈に籠檻に局促して、㊄循々頻々の黨と爲さんや。所以に已らざる中に於て聊か所蘊を發して、古人の高風を追配す、自ら凡ならざるのみ。然も賞音に遇はゞ卽ち徒然ならじ、當に之をして竹帛に垂れしめば、亦忝しむる無かるべし。故に予心腹して爲めに之を表出す。

悟侍者に示す

雲門衆に示して云く、「和尙子、妄想すること莫れ、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗。」時に僧有り、問ふ、「學人、山は是れ山と見、水は是れ水と見る時如何。」雲門手を以て面前に劃一劃して云く、「佛殿什麼としてか箇の裏より去る。」と、舊時衆に在りて無事の禪を說く底に參見す、相傳へて云く、「山は是れ山、水は是れ水。」平實にして更に如許の事無く、玄妙の理性を撥去して空を鑿り心腸を聒撓することを免れ得たり。所以に雲門慈悲を以て一線路を開いて者の僧に指示す、便ち領覽し得て、出で來りて問ふ、雲門便ち後面の高禪を用て、伊を㊅茶糊鶻突す、遂に手を以て劃して云く、「佛殿何としてか裏より去る」と、此れ

㊀東院西。會元四に依れば、趙州因に路に出でて一婆に逢ふ、婆問ふ「和尙何の處にか住む、」師曰く、「趙州東院の西、婆無語、」と。

㊁北辰。論語に出ず。孔子曰く、「政を爲す、德を以てす、譬へば北辰の其所に居て、衆星之に拱するが如し、云々。」と。

㊂西園。傳燈八。西園蘭若曇藏禪師、馬祖に嗣ぐ。

㊃金牛。傳燈八。鎭州金牛和尙、馬祖に嗣ぐ。

㊄循々頻々。次序有る貌、頻々は比なり。

㊅茶糊鶻突。分曉明白ならずの意。

迺ち它を移換するなり。所以に大凡そ只だ聖語を說く是れ正禪なり。纔に京を指し西を劃せば、是れ儞が眼睛を換へん、但だ它を信ずること莫れ、但だ向つて道はん、「我れ儞を識得せり」と。苦なる哉苦なる哉、山僧を頓卻して、無事界裏に在くこと二年餘を得たり、然も胷中終に分曉ならず、後來蕪地に ㋐白雲に在りて桶底子脫して、方に猛しく這の情解を覷見するに、一切の人を死殺し、生ながら人家の男女を縛して無事界の裏に向つて、胷中一へに黑漆に似たり、只管無明の業識を長じ、名を貪り、利を取りて地獄の業を作し、自ら謂へり、我れ已に無事にし了ると、細に雲門の意を原ぬれば豈に只だ此くの如くならんや。將に知んぬ醍醐の上味、此に遇ふて翻つて毒藥と成る、若し是れ眞實に雲門の田地に至らば、安ぞ肯て此くの如く死殺せん。則ち其の提振の處、併せて佛祖の大用大機を將て顯示す、則ち手を以て劃して云く、「佛殿何としてか者裏より去る」と。千聖も應に須らく倒退すべし、便ち是れ大解脫知見を具する底も也た須らく氣を飲み聲を呑むべし。山僧抑も已むを得ず、聊か且く些を露す、只だ知音知るのみ。大凡そ參學は須らく實究すべし。是非を絕し得失を離れ、情塵を去け、知見を脫するに到りて、然して後以て此の流に入る可し。參せよ。

㋐白雲。五祖舒州白雲山に住せしとき、圜悟其の下に在りて大悟す。

馮希蒙に示す

三界の火宅を厭ひ、爽邁の風度を蘊み、緣業を潔淸して力外に從つて游ぶ。乃ち給孤、淨名、裴公、老龐の趣向、豈に英傑偉特にして群を驚し聖に敵する者に非ずや。然も此の段威音七佛已前由り、下す、高く叢林を步みて數萬の ㋒珠金を平沈し、幞頭を脫卻して一味に無間道の中に向つて行す、寧ろ笊籬を嚼いで、赤日の裏に街に臥して、曾て歎怍無かる可きのみならん。人に逢ふて逆拈倒用するに至るに及ぶまで、上頭の關捩を蹋むの作略に非ずと云ふこと莫し。如今既に此の志を操る、根性氣度幸に自ら凡ならず、唯だ退損を務めて精修長久にして變ぜず轉せずんば、乃ち克く全體受用せん。只だ佛殿前の草を刈り、聖僧の頂に騎り、木佛を燒き、一口に西江水を吸盡するが如くんば、本來を昧まざる人の皆圓機活脫して出沒隱顯す。唯だ上流の作家のみ其の起倒を識る、自餘の立亡坐往、俱に餘韻たり。眞に所謂三界の外の人なり、豈に火宅の能く羅籠する所ならん。但だ銀山を長く壁立ならしめ、草に入りて更に人を求むることを須ひざれ。

㋒平沈珠金。龐居士家業を以て盡く湘水に投ず、女子靈照日に笊籬を將て、市中に賣ぐ、云々。（頌古聯珠十四）

華嚴居士に示す

平常、心是れ道、纔に趣向すれば卽ち乖く、箇の裏に到りて正に腳實地を蹋んで、坦蕩々圓陁々、孤迥危峭にして亳髮の知見を立せず、底を倒して放下し澄々として照を絕し、壁立萬仞なるを要す。

何を喚んでか心と作し佛と作し玄と作し妙と作さん。一往に直に前んで見を起さず心を生せず、猛火聚の如く、近傍す可らず、天に倚る長劍に似たり、孰か敢て鋒に攖らん。養ひ得て純和㊀冲淡にして無心の境界に透徹せば、便ち生死の流を截り、無爲の舍に居す可し。端に癡兀拍盲の皁白を分つ罔きが如くなるも、猶ほ些子に較れり。所謂絕學閑々、眞の道人なり、了々として光を回し、深々として寂に契ふ。廼ち滲漏を絕す、自然に向上の人と謀らずして同じく言はずして喩す。若し聰明を作し、知見を立し、彼我を懷き、勝負を分たば、則ち轉た交涉なし。此れ唯だ猛利に快く割斷し、懸崖に手を撒して性命を棄捨し得て、便ち當下に休歇せんを尙ぶ、只だ大休の處是れは究竟合殺の處のみ。

㊀冲。深なり。

無住道人に示す

維摩經には無住の本に依りて一切法を立し、金剛經には應に所住無うして、而も其の心を生すべしと云ふ。古德の云く、「一切無心にして住著無ければ、世出世の法皆爾らざる莫し。」と、住すること有らしめば卽ち膠固す、豈に復た能く變通せんや。日月住する時は則ち晝夜なく、四時住する時は則ち歲功を失ふ、唯だ其れ無住なれば乃ち無窮に流ふる所以なり。是の故に無所住に住す、所以に凡を轉じて聖と成す。卽ち無作無爲無住の妙用、萬有の中に於て大解脫を得。既に此の理に達して此の道を見て、唯だ力め行じて倦まずんば乃ち眞の道人なり。

元長禪人に示す

佛語心を宗と爲す、達磨は此を傳ふる者なり。而るを馬師蛇の爲に足を畫く、慈悲草に落つ。乃ち云く、「諸人佛語心を識らんと欲するや、已に是れ漏逗し了れり。」更に言ふ、「只だ如今の語便ち是れ佛語、此の語自心より出づ、便ち是れ佛心なり。」と、若し正宗を舉揚して是くの如きの話會を作さば、如何ぞ作家八十四人を出し得んや。是の故に從上來正令を行ずる底、之を視て惡水を將て人に澆ぎ潑ぐが如し、何の模樣をか成さん。應に知るべし、這の老子太煞だ屈曲にして事已むを獲ざることを。然も今の學者尙ほ他底を看て破らず、只管語言に落ち、解會を執し、光影を認め窠窟を做す、好し性燥ならざるなり。可の中箇の生鐵鑄就す。手裏に頑石を握得する有りて、粉碎眼目定動して、擬議來らざるに一綽便ち透らば、更に何の佛語心、如之若彼とか說かん。たとひ千佛萬祖躬親ら動地放光すること、雲の如く雨の如く棒を行じ、喝を行ずること雷奔り電激すとも、箇の㊁熱不栄を消せず。等閑に凡收せず聖管せず、更に甚を喚んでか生死菩提涅槃煩惱とか作さん。如かず飢ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば打眠せんには。此れ乃ち稻々他家の種草に類す。所以に地藏の道く、「儞南方の佛法浩々地、爭でか我が田を種ゑて飯を博へて喫して、十成にして是なるには如かん。」と、此を以て事と爲して無事に徹到しぬれば、一綟の絲を斬り、一斬に一切を斬るが如し。世界を把斷して絲毫を漏さず、諸見生ぜず了に滲漏なし。以て歲月を長じて不動不退にして、之に靠らば自然に成辨せん。香林四十年、方に打成一片、潙山三十載一頭の水牯を牧ふ。既に此

㊁熱不栄不消。俗話、日本にて（かまはぬ）の意なり。

の志有らば、深く宜しく長久にして、乃ち能く不報の恩を報ずるに堪へたるべし。是れ眞の出家大解脫の衲子なり。

丹霞の佛智裕禪師に示す

祖師の宗風步驟闊遠にして、迥かに教乘を出づ。正印を㋐單提して靈山に拈瞬せしかば、飲光笑領す。龍猛圓相を示せば、提婆的に中り、少林に心を覓めて二祖超證し、盧老偈を說けば大滿衣鉢を付す、人皆以て密傳と爲す。其の端倪を鞠むるに、乃ち是れ納敗なり、豈に妙深極の旨に造らん。止だ是くの如きのみならんや、天の高く地の厚く、海の淵く虛空の廣きが如きことを要須するも、尙ほ未だ髣髴たらず、信に過量大解脫の人、天を回し地を轉じ海を吸ひて枯竭し、虛空を喝散し、大機を奮ひ大用を顯はす、無邊の香水浮幢刹の外に於て、魔外見網を斬り、佛祖の化權を摧き、不可示を揭示し、不可提の奧を拈提するも、未だ的に爲らず。則ち雪峯鼇山にて道を得、雲巖始終有ることを知らざるも、乃ち戲論なるのみ。應に須らく生鐵鑄就心肝なるべし。人を殺すに眼を眨せざる手段にして、乃ち略ぼ風規を露す可し。慧命無窮に流れ、差や人の意に可なるを貴ぶらくのみ。

建炎三年閏月十一日前雲居圜悟禪師克勤書す。

耿龍學に與ふる書㋑批

㋐丹。當に單に作るべし。
㋑批。この字除くべし。

妙喜來教を示す、矻々たるを此に見る、意況甚だ濃にして眞に悲願を忘れざるなり。而して宗正の眼を以て義路情解を照破し、肝膽を透見す、何ぞ明眼なること此くの如くなる、正宗久しく寂寥にして後昆窠臼を習ひ箕裘を守りて、轉た相鈍致す、世を擧げて其の非を覺ること莫し。㋒大家語に隨つて解を生ず、祖道息まんとするに幾きことあり、超卓穎悟の士有らずんば、何を以てか規成せんや。此れ皆正念にして乃ち眞の外護なり。㋓時節擾々たり、山居して衆を領ず、亦未だ保全す可らず、尙ほ未だ之の便に乘じて轉身の計と爲す可き有らざるのみ。果佛日一夏、參徒を遣して山後の古雲門の高頂を踏逐して、茆を誅りて隱遁せんと欲す、其の志甚だ尙ぶ可し。今㋔謙をして去らしむ、山叟爲に數語及び疏頭を書す、亦與に㋕長財を輟めて之を成したしとなり、取りて一觀す可し。渠れ奉㋖鋤せんと欲す、正に高裁に在り。

克勤啓上。

楊無咎居士に示す

佛祖世に出興す、大悲願力を以て無緣の慈を起して、唯だ利智上根の大器量を具して、大解脫を委任するに堪へたる、上上勝妙の玄機を引接して、人の爲すこと能はざる所を作さんことを務む。群を超え衆を絕して、以て彈指に無生を證す可し、以て立地に果海を越ゆ可し。眼東西を觀、意南北に在

㋒大家。諸人といふ意、大方といふに同じ。
㋓時節擾々。挨ずるに、此時金氏數々侵擾を爲せしなり。
㋔謙。大慧法嗣開善道謙禪師。
㋕長財。餘剩なり。
㋖鋤。助也。

り、快鷹俊鶻の戛々として雲に騰り、風に迷ひ日に曜き、玉兎を捎り金雞を拂ふが如し。英靈の獗豁、乃ち當頭末上の一著子を拈じて、電の閃き星の飛ぶに似たり。擬議を容れず、伊が全體籠羅を脱去し、直下に一毫の指點を費さず、遂に乃ち襟を披いて頂に透り底に透り領略せんことを待ちて、卽ち兩手に分付すべし。是の故に體裁步驟獰龍の水を得るが如く、猛虎の山に踞るに似たり。雲突々風颯々、人の肝膽を傾け人の心目を耀かす、方に之を本家の種草と謂つ可し。所以に維摩大士大いに魔王を集會して首楞嚴定を現ず、魔界に行けども菩薩の儔を汚さず、夫の文殊、普賢金色頭陀の類と皆倫を離れ萃を拔く、而して一旦花を擧げて密傳す、豈に常の事ならんや。以至達磨西來神光、瞥地、爾より多く沒量の大人特達精通にして、只だ動用瞬揚語默舒卷縱擒與奪に向つて底裏を顯發す。長時已思露れず、等閑兀々地百不知百不會底の人の若し。挨拶著するに及んで便ち群を驚し衆を動ずるを見る、然りと雖も其の至趣を鞠むるに、初より如許多の事なし、唯だ直下に明妙にして一切無心なるのみ。苟し能く學解執著を棄去して放つて閑々地ならしめば、聖諦も亦爲さず、自然に從上來の綱宗に契合して、便ち此の選佛場の中に入る可し。轉た未度を度し、未化を轉化せば、是れ再び人間世に來りて一物に依倚せず、無爲絕學眞正出格大道の人にあらざることを得んや。

詔使觀察楊公無咎、高識遠見博學多能なり、而して祖道に於て尤も深く造詣す。智鑒機警未だ擧せざるに先づ知る、未だ言はざるに先づ透る。

都下に在りし日、參陪することを獲たり。玆に帝命に泝つて宣撫司に使して再び(ト)錦官に會ふ、特に道照を辱うす。還るに臨んで葛藤を索む、因つて此の納敗を出すと云ふ。

成都の雷公悅居士に示す

如今本心を照了するに、圓融無際にして色聲の諸塵那ぞ對を作す可き、迥々として獨脫して虛靜明妙なり。底に徹りて提持せんことを要須す。浮淺ならしむること勿れ、直下に高うして上なく、廣うして極む可らず。淨躶々圓(チ)梁々にして無漏無爲なり。千聖之に依つて根本と作し、萬有之に由つて建立す、應に須らく(リ)斗頓して回光自照し、形段を絕して分明に圓證して、萬變千化すれども改むるなく移る無からしむべし。之を金剛王と謂ふ、之を透法身と謂ふ。倘間行住坐臥に透徹せずと云ふこと無し、物々頭々間隔有ること靡し。喚んで乾白露淨にして、單に自心を明むと作す。只麼に之を守る可らず、守住すれば便ち窠窟に落つ、卻つて須らく猛割猛斷して十分に棄捨すべし。轉た捨つれば轉た明なり、轉た遠ざくれば轉た近し。抵死に打疊して命を斷卻し去らしめば、始めて是れ氣息を絕する人にして、方に向上の行履を解すべし。若し向上の行履を論ぜば唯だ己自知すべし。知も亦立せず、釋迦・彌勒・文殊・普賢・德山・臨濟敢て正眼に覷著せず、豈に是れ奇特底の事にあらずや。

(ト)錦官。地名、蜀に在り。
(チ)梁々。晥々と一樣なり。
(リ)斗頓。斗、常に陡に作るべし、領纏の義なり。

一棒の上、一喝の下、一句一言若しくは細、若しくは麁、若しくは色、若しくは香、一時に穿透して方に無心の境界に稱ふ。養ひ得て嬰兒の如くに相似たり、純和㊀冲淡にして塵勞の中に在りと雖も、塵勞も染まず、淨妙の處に居ると雖も、淨妙も它を收め住せず、性に隨ひ緣に任せ、飢飡渴飲、善尙ほ念を起さず、惡豈に復た爲す可けんや。所以に道く、「緣に隨ひ舊業を消して更に新殃を造ること莫れ。」

又示す

道は無心を貴び、禪は名理を絕す、唯だ忘懷泯絕して乃ち趣向すべし。回光して內に燭せば脫體通透す、更に擬議を容れず、直下に桶底子を脫して此の大圓寂照勝妙解脫の門に入るべし。一了一切了只だ閑々地を守りて初より彼我勝劣を分たず、才かに亳芒の見刺有れば、卽ち痛く之を剗りて、放ちて八達七通にして自由自在ならしむ。長養綿密なれば千聖も亦覷れども見えず、自己尙ほ寃家に似たり。只だ遠離して㊁隈傍せざることを求め得、憺然として澄靜なれば虛にして靈に、寂にして照なり。猛勇に斷割して、底に徹りて、纖亳も胷次を撓むこと無し。王老師之を活計を作すと謂ひ、趙州は粥飯の二時、是れ雜用心なるを除くと云ふ。悠久に踐履して純熟せしめば、乃ち從上來無心の體道に合つて、密々の作用自ら工夫を見る、下梢結角頭に到りて自然に懸崖に手を撒するが如し、豈に快ならざらんや。

張持滿朝奉に示す

㊀冲淡。冲虛なり。
㊁隈。水の曲隈なり。

克勤峽を出でゝより㊂訥堂に止る、唯だ玆を念ふこと玆に在り、相從ふ者多く、倦むことを告げず、爲す所の利他は乃ち自利なり。根本明徹し、理地精至にして純一無雜ならんことを要須す。纔に是非有れば紛然として心を失す、若し正脈を踏まば諸天花を捧ぐるに路なく、魔外潛かに覷ふも見えず、深々たる海底に行き、高々たる峯頂に立ちて、始めて群を驚し衆を動せざることを得、之を平常心と謂ふ。本源天眞の自性なり、千萬人の中に居すと雖も一人無きが如くに相似たり。此れ豈に龜浮識想利智想慧の能く測る所ならんや。示諭綿密無間にして寂照同時なりと、歲月悠久にして一片に打成せば、根本愈々牢かるべし。密々たる作用誠に此れを出でたるは無し。應に當處全眞なるべし、則ち彼我遐邇觸處皆渠なり、刹々塵々皆自己㊃大圓鏡の中に在り、愈綿愈密にして、則ち與に能く轉換すべし。故に雲門の道く、「直に乾坤大地纖亳の過患なきことを得るも、猶ほ轉物と爲る、一色を見ざる、始めて是れ半提、直に此くの如くなることを得て、更に須らく全提の時節有ることを知りて始めて得べし。」と、所以に德山の棒、臨濟の喝、皆無生に徹證す、頂に透り底に透りて融通自在なり、大用現前の處に到りて方に能く出沒す。人の全身擔荷する外、退いて文殊、普賢大人の境界を守らんことを欲す。巖頭の道く、「他の得底の人只だ閑々地を守りて、二六時中無欲無依なれば自然に諸の三昧を超ゆ。」德山亦云く、「汝但だ心に於て無事なれ、心に於て無事なれば、則ち虛にして靈に、寂にして照

㊂訥堂。地名。
㊃大圓鏡。大圓鏡智萬德圓滿し、法界の諸法を顯はすこと大圓鏡の衆影を現ずるが如し。

なり、若し毫端許りも之の本末を言へば皆自ら欺くと爲す、此れ既に已に明、當に履踐すべし。但只だ歩を退けよ、愈退けば愈明に、愈會せざれば愈力量あり、異念纔に起り擬心纔に生ずれば、卽ち猛しく自ら割斷して相續せざらしめよ。則ち智照洞然として歩々踏實なり、豈に高低憎愛違順揀擇、其の間に有らんや。無明の習氣旋く起り旋く消し、悠久の間自ら力の能く人を擾る無し。古人牧牛を以て喩へと爲す、誠なるかな、所謂久長の人を要するのみ。直截の省要最も是れ先づ我見を忘じて虛靜恬和にして、任運騰々、騰々任運にして一切の法に於て皆取捨なからしむ。根々塵々に向つて時に應じて脫然として自處す。孤運獨照して照體獨立す、物我一如にして直下に底に徹す、照の立す可きなし。一綟絲を斬るに一斬一切斬、便ち自ら活計を作すことを會し去るが如し。佛見法見すら尙ほ起さしめず、則ち塵勞業識自ら氷消瓦解すべし。養ひ得て成實なれば癡の如く兀に似て峭措なり、祖佛位中收攝することを得ず、那ぞ肯て驢胎馬腹の裏に入らん。

趙州の道く、「我れ千百億箇を見るに、盡く是れ作佛を覓むる漢子なり、中に於て箇の無心底を覓むるに得難し。」又云く、「我れ南方に在りて三十年、粥飯の二時是れ雜用心の處なるを除く、香林四十年、方に一片を成す、溈泉四十年、尙ほ自ら走作す。南泉十八、上に活計を作すことを解す、信に知んぬ、從上古人の皆此くの如くならずと云ふこと無し、密々に履踐せば安ぞ得失長短取捨是非知解を計る可けんや。同學の中唯だ㋐龍門、㋑智海、昔常に熟

㋐龍門。佛眼遠なり。
㋑智海。佛鑑懃なり。

く與に究明す。但だ緣に逢ひ境に遇ふて、管帶せずと云ふこと莫し、何ぞ止だ此の生のみならん。已に未來際を窮めて、無量の聖身を證す、未だ是れ他の泊頭の處にあらず、但だ一味に歩を退けよ、切に限量を作すこと莫れ。

吳教授に示す

佛祖、禪道を以て教を設くること、唯だ心を明めて本に達せんことを務む、況んや人人具足し、各各圓成するをや。但だ迷妄を以て此の本心に背く、諸趣に流轉して枉げて輪廻を受く、而も其の根本初より增減なし。諸佛一大事因緣の爲を以て出づ、蓋し此が爲めなり。祖師單傳密印を以て來るも亦此を以てす。若し是れ宿昔大根利智を蘊んで、便ち能く腳跟に於て直下に承當して他より得るにあらず、了然として自ら悟れば、廓徹靈明にして廣大虛寂なり。無始より來かた、亦未だ曾て間斷せず、情淨無爲妙圓の眞心なり。諸塵の爲めに對を作さず、萬法と侶たらず、長に十日の並び照すが如し。見を離れ情を超ゆ、生死の浮幻を截卻して、金剛王の堅固不動なるが如し、乃ち之を卽心卽佛と謂ふ。更に外に求めず、唯だ自性を了ずれば、時に應じて佛祖と契合す。無疑の地に到りて把得住、作得主す、是れ徑截の大解脫にあらざる可けんや。

此の事を探究して死生を透らんことを要す、豈に是れ小緣ならんや。當に猛利に誠志し、信重にして頭燃を救ふが如くにして、始めて少分の相應有るべし。多く參問の士を見るに、世智聰明にして只だ

談柄を資け鬪りて聲譽を廣めんことを以て、高上の趣向と爲す、以て人に勝らんことを務めて但だ我見を增益す。油を以て火に投じ、其の炎益熾なるが如し、直に臘月三十日に到らば茫然として繆亂し、殊に纖毫の力を得ず、良に最初に已に正因無きに由つて、所以に末後に勞して功なし。是の故に古德人を勸めて涅槃堂裏の禪に參せしむ、誠に旨有るなり。生死の際之に處すること良に易からず、唯だ大達超證の士、利根勇猛を奮ふて一往に截斷して則ち難なし、然も此の段自己の根力に由ると雖も亦方便を假りて常時些子の境界の中に轉得行、打得徹して、解を存せず、見を立せず、稾然として全體現成す。踐履し將去つて養ひ得て純熟しつれば、緣謝の時に到りて自然に怖畏なし、只だ清虛瑩徹のみ有りて一法の情に當る無し。懸崖に手を撒して、棄捨し得て留戀無きが如し。一念萬年、萬年一念、生を竟むるに了に不可得なり、豈に死有らんや。是の故に古德、坐脫立亡行化倒脫、能く勇健を得ることは、皆是れ平昔淘汰して淨潔を得ればなり。香林四十年、一片と成ることを得たり、沸泉四十年、尙ほ走作あり。石霜人を勸めて休し去り歇し去り、古廟裏の香爐の如くにし去らしむ。永嘉の云く、「體すれば卽ち生なく、了すれば本速なし。」と、蓋し業々兢々として玆を念ふこと玆に在り、方に無碍自在を得たり。既に生を捨てゝ後、意生身を得て、自らの意趣に隨つて、後報悉く理を以て遣りて、業に由つて牽かれず、所謂生死を透脫す。報緣未だ人間世の上に謝せざるに、如許の參涉交牙有り、應に須らく之に處して綽々然として餘裕有りて始めて得べし。人生れて各緣分に隨ふ、必ずしも喧を厭ひ靜を求めざれ。但だ中虛に、外順ならしめば、鬧市沸湯の中に在りと雖も、亦恬然として安穩なり。才に纖毫の見刺有れば則ち打不過なり。

禪人に示す

末後の一句都通穿過す、有言無言、向上向下、權實照用、卷舒與奪、箇の勘破了を消せず。誰か識る、趙州這の巴鼻、須らく是れ吾が家の種草にして始めて得べし。

韓朝議に示す

乃佛乃祖此の大法を直指す、人々跟腳下に洞照すること千日の並び出づるが如し。但㋑外に趣いて奔逸すること久しうして、自ら是くの如くの大威德光明有りと云ふことを信ずること能はず、唯だ聰明を作し、知見を立することを務めて、業惑の中に向つて以て等㋺彝を出でたりと謂ふて、自得を衒耀す。人間世に向つて習ふ所、古今博く究め廣く覩て、底蘊を窮極すと謂ふ。殊に知らず、螢火の光豈に太陽に比せんや。所以に古の奇傑の士、穎脫の性、近きに就いて論せば、裴相國、楊大年の儔の如きは、誠を投じて放下して宗師に就いて決擇す。浮塵の知見を剗去し、大徹大悟して始めて能く超㋩軼して、老禪碩德と㋪抗行履踐して、合殺結角頭に臨むに到りて、自ら手を撒して克く大解脫を證することを解す、豈に小事ならんや。今既に明敏なること前輩に減らず、平時の學業才力世

㋑趣外。窮子父を捨て逃げ遁くが如し。
㋺彝。法也。
㋩軼。逸と同じ。
㋪抗。抵也、敵也。

路に邁往すること久しうして、宗門に此の段の緣有りと云ふことを知ると雖も、我が宗尙する所を出すと謂へり。殊に意を著けず、夙昔の大緣を以て㋐歐峯に相値ふて、年を經て會聚す。一たび擧揚するを聞いて、卽ち深信を起して迴光返照す。人間世を顧みるに夢の如く幻の如し。大化に隨つて變滅す、乃ち虛妄ならくのみ。唯だ此の千劫にも壞せず移易せざる、一切聖賢の根本、乃ち造物の淵源にして、自己を印定す。若し一たび發明して七通八達せば、何に往くとしてか自得せざらん。是に知んぬ、宿世に亦曾て薰炙すと云ふことを。緣に遇ふて彰るゝこと行事に見えたり、豈に自信に非ずや。然も能く自ら二六時中を檢點するに、佛法を學するも已に是れ雜用心なり。則ち佛法を去卻する、乃ち眞淨界中の㋑行李なり。但だ請ふ、此に依つて一切雜ならざれば卽ち純一洞然として愛憎なし、取捨を離れ、彼我を分たず、得失を作さざれば一切の法、坦然として皆我が家不思議の處、淨妙圓明受用の物ならくのみ。須らく此の心をして長時に現前して、沉昏に墮せず、聰慧を生せず、平等安閑寂靜の境界に入らしむ。那ぞ惡作業緣識情有りて此の本妙の光明を㋒干撓し得ん。只だ恐らくは境界の面前に臨んで、都盧て忘失せんことを。前に依つて紛亂せば則ち不堪なり。古人の修行亦只だ自らの證入する所を以て、時中に照了して塵勞を截斷して、活卓々地ならしめば、悠久にして三二十年に純熟せん。生死を超出する難しと爲さじ、力を著くること行處に在り、只だ空高にして之を談說せざるのみ。古へ

㋐歐峯。地名也。
㋑行李。履踐と同じ意なり。
㋒干撓。干は犯也、撓は亂也。

云く、「一丈を說き得んより一尺を行ひ得んには如かじ。」と、蓋し定慧の力、業緣を回轉して、正に懼々地ならんことを要す。勇猛果決して、千百生の中に當に受用すべし。其の餘の古人の機緣語句、必ずしも盡く之を會せんことを要せじ、但だ一著分明なれば則ち著々此くの如く、千變萬化豈に渠が力用を移變し得てんや。內心旣に虛なれば外緣亦寂す。著衣喫飯本自ら天眞。㋓凋琢を勞せず、若し或は勝見を立し、我能を負はゞ卽ち禍事なり、切に須らく照管して此の態を作すこと勿るべし。是に由つて無我・眞實・平等・如々・不動・不變・淨妙・淸涼・穩密の田地に入る可し。誌公の云く、「纖毫の修學の心を起さゞれば、無相光中常に自在なり。」と、

曾待制に示す

禪は意想に非ず、道は功動を絕す、若し意想を以て禪に參せば、木を鑽りて火を求め、地を堀りて天を覓むるが如し、只だ益々神を勞す。若し功動を以て道を學ばゞ土上に泥を加へ、眼裏に沙を撒するが如し、轉た㋔困頓せらる。儻し意識を歇卻し妄想を息卻せば、則ち㋕禪河、浪止んで定水、波澄まん。功用を去卻し、營爲を休卻すれば、則ち大道坦然として七通八達なり。是の故に僧、石頭に問ふ、「如何なるか是れ禪。」頭云く、「碌磚。」僧云く、「如何なるか是れ道。」云く、「木頭。」此れ豈に意想功動の能く辯ずる所ならんや。直下に頓に領して、流を截つて便ち透りて、則ち禪道歷然たるをば、陞非す。才に解を作さんと擬せば則ち千里萬里、是れ向來の

㋓凋琢。凋當に離に作るべし。
㋔困頓。頓壞なり。
㋕禪河。維摩經に曰く、「八解脫の浴池、定水湛然として滿つ。」と。

世智辯聰、頓然として放卻し、消遣して盡さしめんことを要す。自然に此の至質の地に於て、自證自悟して證悟の迹を留めず、翛然として玄虛通達せば、乃ち善なり。

馬大師嘗て楞伽經に、佛語心を以て宗と爲し、無門を法門と爲すと云ふことを擧して、乃ち云く、「諸人佛語心を識らんと要するや、只だ爾が如今の語便ち是れ心、心便ち是れ佛。故に云く、佛語心乃ち是れ宗なり、此の宗、門無し、乃ち是れ法門」と、古人大慈老婆にして泥を拖き水を涉る、若し一擧に便ち透れば猶ほ些子に較れり。或は義理を窮めせば卒に摸搡不著なり。

宗覺大師に示す

佛語心を宗と爲す、宗通ずれば、說も亦通ず、既に之を宗門と謂ふ、豈に❶支離として本を去り末を逐ひ、言語機境に隨つて窠窟を作す可けん。須らく徑截超證して、心性玄妙勝淨境界を透出せんことを要す。直に綿密穩審たる、向上の大解脫大休大歇の場に徹すれば、等閑に空豁豁地に似ると雖も、力用圓證して限量に拘はらず、千人萬人羅籠すれども住らず。所以に迦文老人、久しく斯の要を❹嘿して、三百餘會略ぼ明破せず、但だ機に隨つて救拔す、時節到來するを俟つて、乃ち靈山に面皮を露して拈出す、獨り金色の頭陀のみ有りて他の鈎鉤に上る、之を敎外別行と謂ふ。若し此の旨を諳せば、則ち威音已前漏逗了れり。點檢し將來すれば、類に隨つて身を化す、千般の伎倆萬種の機緣と雖も、皆是れ箇の一著子にあらずと云ふこと無し、此れ豈に單見淺聞、知解を存し❺機括に墮する者の測量する所ならんや。是の故に從上來棒を行じ、喝を行じ、毬を輥じ、叉を擊げ、茶を喫し、鼓を打し、鍬を挿み、牛を牧ひ、境智を彰し、坐に據り、門を掩ひ、回るを喚び、叱咄し、掌を與へ、踏を下す、皆此にあらざる莫し。唯だ本色の衲子自ら既に了悟透徹す、又復た大宗師の惡手段に遇ふて、淘汰煅煉して、師子の人を咬み、藥忌に隨はざる、直截軒豁の處に到りて、方に一擧に便ち落處を知る可し。獅子窟に入り窟を出でゝ、踞地返擲するが如し、何人か測量すべき哉。此の門泥を❻挹き水を涉り、草裏に輥じ葛藤を打し、眼❼麻眯❽三搭すれども回らざる者を論せゝ、唯だ是れ八面に敵を受け、未だ擧せざるに先づ知り、未だ言はざるに先づ契ふもの、自然に水乳相合し得坐披衣す。養ひ得て純熟すれば霜露に果熟を待つて出頭し來る。便ち與麼に用ひて始めて祖先の本❾因地に合す、一周の佛事を發行すべし。所以に道ふ、「恁麼の事を窮めんと要せば、須らく是れ恁麼の人なるべし、若し是れ恁麼の人ならば恁麼の事を愁へず。」と。

❶支離。身體收拾なき貌。
❹嘿。嘿久默斯要、四十餘年絕して談さゞる也。
❺機括。機は弩牙なり、括は弩なり、箭の絃を受くる處なり。
❻挹。酌也。
❼麻眯。濟世全書麻木門に曰く、「面目皆麻す、此氣虛也、眯は莊子に曰く、眯味塵目に入る也、云々。」と。
❽三搭。三たび呼んで只だ答應して頭を回さず、四たび呼んで已むを得ず、和身回轉の義。
❾因地。圓覺經文殊章に曰く、「一切如來の本起し玉へる因地は、皆清淨の覺相を圓照するに依つて、永く無明を斷じて、方に佛道を成じ玉へり。」と。

國譯佛果圜悟眞覺禪師心要卷下 終

佛果圜悟眞覺禪師心要卷上

嗣法子文編

示華藏明首座　住江寧府天寧

祖師直示、豈有如許蹊徑、只貴向上人聊聞舉著、剔起便行、明眼覷來、早是鈍置、古者道、舉一隅不以三隅反者吾不與也、箇箇須是擧一明三目機銖兩、轉轆轆地、疎通俊快、始稱提持、豈不見、良遂見麻谷、第一番見、谷便入方丈閉卻門、渠疑著、及至第二次、谷驟步去菜園裏、渠便瞥地、乃謂谷曰、和尙莫謾良遂、若不來見和尙、洎被十二本經論賺過一生、看渠恁地不妨省力、既歸謂徒曰、諸人知處、良遂摠知、良遂知處、諸人不知、信知、渠知處、有不通風、諸人卒未薦得、可謂、眞師子兒、要作他家種草、直須更出他一頭地始得、

達磨游梁入魏、落草尋人、向少林冷坐九年、深雪之中、覓得一箇、及至最後問得箇什麼、卻只禮三拜、依位而立、遂有得髓之言、至令守株待兎之流、競以無言禮拜依位爲得髓深致、殊不知、劍去久矣、爾方刻舟、豈曾夢見祖師、若是本色眞正道流、要須超情離見、別有生涯、終不向死水裏作活計、方承紹得他家基業、到箇裏直須知有從上來事、所謂善學柳下惠、終不師其迹、是故古人道、一句合頭語、萬劫繫驢橛、誠哉。

破有法王、出現世間、隨衆生欲、種種說法、將知、所說皆爲方便、只爲破執破疑、破解路我見、並

無許多惡覺惡見、佛亦不必出現、況說種種法耶。

古人得旨之後、向深山茆茨石室、折脚鐺子煑飯喫、十年二十年、大忘人世、永謝塵寰、今時不敢望如此、但只藉名晦迹、守本分、作箇骨律錐老衲、以自所契所證、隨己力量、受用消遣舊業、融通宿習、或有餘力、推以及人、結般若緣、鍊磨自己脚跟純熟、譬如閑荒草裏、撥剔一箇半箇、同知有共脫生死、轉益未來、以報佛祖深恩、抑不得已、霜露果熟推將出世、應緣順適開拓人天、終不操心於有求、何況依倚貴勢、作流俗阿師舉止、欺凡罔聖、苟利圖名、作無間業、縱無機緣、只恁度世亦無業果、眞出塵羅漢也。

僧問天皇、如何是戒定慧、皇云、我這裏無恁閑家具、又問德山、如何是佛、山云、佛是西天老比丘、又問石頭、如何是道、答云、木頭、如何是禪、云、碌塼、僧問雲門、如何是超佛越祖之譚、答云、餬餅、又問趙州、如何是祖師西來意、云、庭前栢樹子、又問清平、如何是有漏、答云、笊籬、又問無漏、答云、木杓、問三角、如何是三寶、答云、禾粟豆、是皆前世本分宗師、脚蹋實地、本分垂慈之語、若隨他語、卽成辜負、若不隨他語、又且如何領略、除非具金剛正眼、卽知落處耳。

此門警脫契證、卻是素來未曾經人壞持、拍盲百不知、一旦以利根種性、孟八郎便透直下承當、要用便用、要行卽行、無如許般心行、純熟頓放著所在便得休歇安樂、終日飽齁齁地、不妨眞正、最難整理、是半前落後、認得瞻視光影、聽聞不隨聲、守寂湛之性、便爲至寶、懷在胸中、終日昭昭靈靈、雜知雜解、自擔負我亦有見處、曾得宗師印證、惟只增長我見、便雖黃古今、印證佛祖、輕毀一切、問著卽作伎倆、黏作一堆、殊不知、末上便錯認定槃星子也、及至與渠作方便、解黏去縛、便謂移換人、捩轉人、作恁麼心行、似此有甚救處、除是驀地自解知非、卻將來須放得下、爲善知識遇著此等、須是大手脚與烹鍊、救得一箇半箇、得徹、不妨飜邪成正、卻是箇沒量大人、何故只爲病多諳藥性。

得底人、心機泯絕、照體已忘、渾無領覽、只守閑閑地、而諸天捧花、無路魔外潛覷、不見深深海底行、漏盡意解所作平常、似三家村裏無以異、直下放懷養到恁麼處、亦未肯住在、纔有纖毫便覺如泰山、似礙塞人、便卽擺撥、雖淳是理地、亦無可取、若取著卽是見刺、所以道、道無心合人、人無心合道、豈肯自衒我是得底人、原他深不欲人知、喚作絕學無爲與古爲儔、眞道人也。

德山一日齋晚、老子持鉢自方丈下來、雪峯云、鐘未鳴鼓未響、托鉢向什麼處去、山低頭遂回、巖頭聞云、大小德山未會末後句、在德山謂、汝不肯老僧邪、巖頭遂密啓其意、山次日、陞座、與尋常迥殊、巖頭拊掌謂大衆云、且喜老漢會末後句、雖然如是、只得三年、此箇公案叢林解會極多、然少有的確透得者、有以謂眞有此句、有以謂此句須密傳授、不免只是話會增長機路、去本分甚遠、所以道、醍醐上味爲世所珍、遇此等人、飜成毒藥。

他參活句、不參死句、活句下薦得永劫不忘、死句下薦得自救不了、若要與祖佛爲師、須明取活句、韶陽出一句、如利刀剪卻、臨際亦云、吹毛用了急還磨、此豈陰界中事、亦非世智辯聰所及、直是深徹淵源、打落從前依他作解、明昧逆順、以金剛、正印、印定、麼金剛王寶劍、用本分手段、所以道、殺人須是殺人刀、活人須是活人劍、既殺得人、須活得人、既活得人、須殺得人、若只孤單則偏墮也、垂手之際卻看方便、勿使傷鋒犯手、著著有出身之路、八面玲瓏、照破他、方與

下又亦須緊密始得稍寬緩卽落七落八也只自己等閑尙不留毫髮許設有亦斬作三段何況此宗門從上牙爪遇其中人縱拈出若投機則共用不投機則剗卻以是爲要無不了底事切在力行之

華藏明首座自錦官夾山鍾阜從余游十餘年其情理勝解悉已拈去入此門來照用機智解路靡不打摑惟向上一著室中百煅千煉比出佐民老以謂達去朝夕欲得筆語因條列數章以付之

寄張宣撫相公

疇昔受知於此道極深且久豈假言句可通然格外超宗在大達大觀所操持雖千變萬化不出掌握中世法佛法曾無以異唯日用照了鏡心像迹初不遺鑒廼大定也是故維摩取飯香積借座燈王搏妙喜世界如陶家輪納須彌於芥子中吸劫火於腹內由反覆掌蓋中旣虛而靈寂而照此外事物出沒轉旋不假他力所謂證不可思議咸卽方寸片田地爾剏建功立業蘊德操誠左右逢原秉金剛寶劍拈殺活杖子指揮之際皆此妙也望期之言表意外雖千萬里猶目擊耳

又

自古聖賢以過量傑出如植大根器獨證此大因緣以悲願力發揮直指萬有同體至淵至奧一段事不立階梯頓超獨得從空劫已前湛然不動印定群靈根腳亘古今絕思慮出聖凡越知見初不動搖淨倮倮活潑潑見在一切有情無情莫不圓具是故釋迦初生卽指天地大哮吼當頭拈出次以明星末後拈花只貴具此正眼底領略自爾四七二三密傳不知有者以謂有多少妙用神機只言隨波逐流初不究其根本若鞭其至趣不消一箭昔李駙馬見石門門謂曰此大丈夫事非將相所能爲李卽便領以頌自陳學道須是鐵漢著手心頭便拌直趣無上菩提一切是非莫管蓋上智利根天機已具唯務確實透徹當受用時握大機發大用先機而動絕物而轉嚴頭云卻物爲上逐物爲下若論戰也箇箇力在轉處若能於物上轉得疾則一切立在下風並歸自掌握擒縱卷舒悉可點化居常自處泰然安靜不掛纖末於方寸動而應機自乘璿璣回轉變通得大自在萬彙萬緣皆迎刃而解莫不如破竹勢從風而靡所以立處旣眞用時有力況總領英雄驅貔虎之士攘巨寇撫萬姓安社稷佐中興之業皆只仗此一著子撥轉上頭關鍵萬世不拔之功與古佛同見同聞同知同用四祖云非心不問佛德山云佛只是箇無事人永嘉云不離當處常湛然覓卽知君不可見無位眞人常從面門出入皆此蘊也

今樞密大丞相已領之於言外透出於聲前而山野剩語切切納敗缺猥蒙鈞慈見照以此遂忘老農老圃老馬之智而獻芹焉

示圓首座

得道之士立處旣孤危峭絕不與一法作對行時不動纖塵豈止入林不動草入水不動波蓋中已虛寂外絕照功翛然自得徹證無心雖萬機頓赴豈能撓其神干其慮哉平時只守閑閑地如癡似兀及至臨事物初不作伎倆凖擬剸割風旋電轉靡不當機豈非素有所守也是故

古德道如人學射久久方中悟則刹那履踐功夫須資長遠如鵝鳩兒出生下來赤骨䴥地養來餧去日久時深羽毛既就便解高飛遠舉所以悟明透徹政要調伏只如諸塵境界常流於中窒礙到得底人分上無不虛通全是自家大解脫門終日作爲未曾作爲了無欣厭亦無倦怠度盡一切而無能所況生厭墮耶苟性質偏枯尤當增益所不能放教圓通以謳和攝化開權俯仰應接使高低遠邇略無差悞行常不輕行學忍辱仙人遵先佛軌儀成就三十七品助道法堅固四攝行到大用現前喧寂一致如下水船不勞篙棹混融含攝圓證普賢行願乃出世世間大善知識也古德云三家村裏須自箇叢林蓋無叢林處雖有志之士亦喜自便到恁麼尤宜執守唯在强勉以不倦終之至於喧靜亦復爾喧處周旋應變於中虛寂靜處能不被靜縛則隨所至處皆我活業唯中虛外順有根本者能然。

大凡爲善知識當慈悲柔和善順接物以平等無諍自處彼以惡來及以惡聲名色加我非理相干訕謗毀辱但退步自照於己無歉一切勿與較量亦不動念嗔恨只與直下坐斷如初不聞不見久久魔孽自消爾若與之較則惡聲相反豈有了期又不表顯自己力量與常流何以異切力行之自然無思不服。

椎拂之下開發人天使透脫生死豈小因緣應恬和詞色當機接引勘對辨其由來驗其存坐攻其所偏墜奪其所執著直截指示令見佛性到大休大歇安樂之場所謂抽釘拔楔解黏去縛切不可將實法繫綴人令如是住如是執勿受別人移倒此毒藥也令渠喫著一生擔板賺悞豈有利益耶。

佛祖出興特唱此段大因緣謂之單傳心印不立文字語句接最上機只貴一聞千悟直下承當了修行不求名聞利養唯務透脫生死今既作其兒孫須存它種草看他古來大有道之士動是降龍伏虎神明授戒攻苦食淡大忘人世永謝塵寰三二十年折脚鐺兒煮飯喫逃迹埋名往往坐脫立亡於中一箇半箇諸聖推出建立宗風無不兼高行務報佛恩流通大法始出一言半句出於抑不得已明知是接引入理之門敲門瓦子其體裁力用不妨爲後昆模範當宣師法之轉相勉勵追復古風切忌希名苟利茲深祝也。

馬祖昔歸鄉以簸箕之譏畏難行道因再出峽緣會江西大隋昔歸鄉先於龍懷路口三載茶湯結衆緣遂隱於木庵道行於蜀香林昔歸鄉潛神隱照於水晶宮成四十年一片事撥正智門老祚尋出雪竇大雲門正宗或留再出皆以緣斷今既萬里西歸但存行脚本志亦不必拘去留也。

慈明昔辭汾陽祝云修造自有人且與佛法爲主自爾五據大剎不動一椽唯提振臨際正宗遂得楊岐黃龍翠巖三大士而子孫徧寰海果不辜所付授蓋古人擇可以荷擔之士不輕如此信嚴飾壯麗梵苑未足以奇佛法也。

佛道懸曠久受勤苦乃可得成祖師門下斷臂立雪腰石舂碓擔麥推車事園作飯開田疇施湯茶搬土拽磨皆抗志絕俗自强不息圖成功業者乃能之所謂未有一法從爛墮懈怠中生既以洞達淵源至難至險人所不能達者尚能而於涉世應酬屈節俯仰而謂不能此不爲非不能也當稍按下雲頭自警自策庶幾方便門寬曠不亦善乎。

示裕書記　住杭州靈隱佛智禪師

腳蹋實地到安穩處時中無虛棄底工夫綿綿不漏絲毫湛寂凝然佛祖莫知魔外無捉摸是自住無所住大解脫雖歷無窮劫亦只如如地況復諸緣耶安住是中方可建立與人拔楔抽釘亦只令渠無住著去此謂之大事因緣如來有密語迦葉不覆藏乃如來眞密語也當不覆藏即密即當密即不覆藏此豈可與繫情量立得失存棄臼作解會者擧也要須透脫到實證之地向出格超宗頂顆上領始得既已領略應當將護遇上根大器方可印授耶

秉拂據位稱宗師若無本分作家手段未免賺慢方來引他入草窠裏打骨董去也若具金剛正眼須灑灑落落唯以本分事接之直饒見與佛齊猶有佛地障在是故從上來行棒行喝一機一境一言一句意在鉤頭只貴獨脫切忌依草附木所謂驅耕夫之牛奪飢人之食若不如是盡是弄泥團漢

方來衲子有夙根作工夫驀地得入者不遇眞正宗師返引他作露布墮在機境中無繩自縛半前落後似是不是最難整理要須識其病脈辨其落著徵其所偏墜而發起之使捨執著住滯然後示以本分正宗使無疑惑了然得大解脫居大寶宅自然趂亦不去可以洪濟大法傳續祖燈堪報不報之恩也

黃龍老南禪師昔未見石霜會一肚皮禪翠巖憫之勸謁慈明只窮究玄沙語靈雲未徹處應時瓦解冰消遂受印可三十年只以此印拈諸方解路瘡病不假驢馳藥緊要處豈有許多佛法也

大宗師爲人雖不立窠臼路布久之學徒妄認亦成窠臼路布也益以無窠臼爲窠臼無路布作路布也應須及之令盡無令守株待兎認指爲月

鑒在機先風塵草動亦照其端倪況應酬擾擾哉非智次虛靜無一法當情安能圓應無差先機照物耶此皆那伽在定之効也

臨濟金剛王寶劍德山末後句藥嶠一句子秘魔杈俱胝指雪峯輥毬禾山打鼓趙州喫茶楊岐栗棘蓬金剛圈皆一致耳契證得直下省力一切佛祖言教無不通達唯在當人善自洪持耳

示隆知藏　住蘇州虎丘

有祖以來唯務單傳直指不喜帶水拖泥打露布列窠窟鈍置人蓋釋迦老子三百餘會對機設教立世垂範大段周遮是故最後省要接最上機雖自迦葉二十八世少示機關多顯理致至於付授之際靡不直面提持如倒刹竿盞水投針示圓相執赤幡把明鑑說如鐵橛子傳法偈逢磨六宗與外道立義天下太平翻轉我天爾狗皆神機迅捷非擬議思量所測洎到梁游魏尤復顯言教外別行單傳心印六代傳衣所指顯著逮曹谿大鑒詳示說通宗通歷涉既久具正眼大解脫宗匠變格通塗使久滯名相不墮理性言說放出活卓卓地脫灑自由妙機遂見行棒行喝以言遣言以機奪機以毒攻毒以用破用所以流傳七百餘年枝分派列各擅家風浩浩轟轟莫知紀極鞠其歸著無出直指人心心地既明無絲毫隔礙去勝負彼我是非知見解會透到大休大歇安穩之場豈有二致哉所謂百川異流同歸于海要須是箇向上根器

具高識遠見有紹隆佛祖志氣然後能深入閫奧徹底信得及直下把得住始可印證堪爲種草捨此切宜寶秘愼詞勿容易放行也。

五祖老人平生孤峻少許可人乾曝曝地壁立只靠此一著常自云如倚一座須彌山豈可落虛弄滑頭謾人把箇沒滋味鐵酸鹽劈頭拈與學者令咬嚼須到渠桶底子脫喪卻如許惡知惡見胷次不掛絲毫透得淨盡始可下手煅煉方禁得拳踢然後示以金剛王寶劍度其果能履踐負荷淨然無一事山是山水是水更應轉向那邊千聖籠羅不住處便契廼祖以來所證傳持正法眼藏及至應用爲物仍當驅耕夫之牛奪飢人之食證驗得十成無滲漏即是本分道流也。

摩竭陁國親行此令少林面壁全提正宗而時流錯認遂向泯默以爲無縫罅無模索壁立萬仞殊不知本分事恣情識摶量便爲高見此大病也從上來事本無如是巖頭云只露目前些子箇如擊石火閃電光若明不得不用疑著此是向上人行履處除非知有莫能知之。

趙州喫茶去祕魔擎杈雪峰輥毬禾山打鼓俱胝一指歸宗拽石玄沙未徹德山棒臨濟喝並是透頂透底直截剪斷葛藤大機大用千差萬別會歸一源可以與人解黏去縛若隨語作解即須與本分草料譬如十斛驢乳只以一滴師子乳滴之悉皆迸散要腳跟下傳持相繼綿遠直須不徇人情勿使容易乃端的也。

末後一句始到牢關誠哉是言透脫死生提持正印全是此箇時節惟是蹋著向上關棙子者便諳悉耶。

法王沖長老

從上宗乘高超直證師資契會斷不等閑所以二祖立雪斷臂黃梅負舂自餘服勤三十二十載豈容易印可哉蓋觀機逗教百煅千煉纔有偏執疑情盡爲決破使徹底放下得平穩履踐轉換到撲不破之地如皮可漏子相似禁當得然後放出接物利生此非小小因緣纔一不周即模子不正脫得出來七凹八凸取笑作者是故古德唯務周正八面玲瓏內於己行持潔清如冰玉外則圓通謳和覽群情善回互如陂澤立參之際一一以本分事敲點待其領略即放手段與琢磨譬如一器水傳一器切忌滲漏其間驅耕奪飢神鬼莫測只憑杖一大解脫更不生異類相中頭角妄貼無爲眞五戒十善出塵阿羅漢也達磨有言行解相應名之曰祖

行腳超方本爲生死事大接物利生爲大善知識止發明大事因緣此相須相資之理自古以然唯堪任荷負大法器乃能於壁立萬仞宗師鑪鞴鉗鎚中煅煉成就始末眞正除是不出一出必驚群動衆定也蓋緣承當處既不莽鹵付授時亦不率易如讓師在曹溪八年馬祖之與觀音德嶠之與龍潭仰山之於大圓臨濟之於斷際皆不下一二十載是故一言一句一機一境金聲玉振後世莫能窺覦惟超證到乎大同之地自然必其落處憶昔馬祖爲西堂云子曾看教麼藏云教豈異耶祖云不然子已後爲人若東道西說藏云某病須自養豈敢爲人祖云子末年必大興於世已而果然細詳古人豈不是大徹大悟向上一段大因緣絕言像離分別硬糾糾處唯己自知獨樂安閑休歇去處然馬師尙激勵如此正欲圓通轉變不守一隅泥著一處須該括古今踐履融攝混圓無際貴利物之時八面受敵撥得草窟裏一箇半箇焦尾堪

作種草豈非方便作報佛祖恩德事業耶要須打辦精神垂手方便一著著須有出身之機免瞎人眼迷果謬因卻不利益此最爲知識要徑也。

黃龍老南大禪師嘗有語端居丈室以本分事接方來人乃長老之職也其餘細事付之知事無不辨者誠哉然用人之際必須愼擇委任令不敗事始得大潙眞如云住山無巧只貴善用人思之思之。

諺語云伎倆不如帳樣只如百丈大智創立規繩千古撲它底不破今時但謹遵守自己率先不違他雅範則衆人無有不從去也。

最後折倒裙子透脫死生須知有千聖羅籠不住截斷命根底一著始得古德大有道能擒縱善殺活得大解脫知識無不用之非知之難見於行事當機瞥脫斷得行方始久遠得力也。

楊岐祖師倡起金剛圈栗棘蓬用辨龍蛇擒虎兕若本色是他家裏人等閑拈出便坐斷裙子舌頭也。

示法濟禪師　住泗洲普照勝長老

釋迦文多子塔前分半座已密授此印爾後拈花第二重公案至於付金襴雞足山中候彌勒是多少節文也達磨迢迢自西竺游梁歷魏冷坐少林深雪之中有箇斷臂老子解覷破不免漏泄分付伊謂之單傳密記子細推之一場敗闕自此便喧傳西來旨意世間隨流將錯就錯滿地流行分五家七宗遞立門戶提唱就實窮之端的成得什麼邊事是故從上達人不喫這般茶飯且如何卻是諦當將知六合外著得眼早自別也況無邊香水海浮幢王刹表下視底乃少知落著實處所以道此大丈夫事撲迭掀豁步驟作略唯同風契證始善弘荷終不撥沙揀土遂與釋迦金色碧眼神光共一坐具地等閑垂手殺人活人初無稟曰只貴緊峭萬苦千辛至嶮至毒下得斷命手脗然後不虛印授也白雲師公云神仙秘訣父子不傳。

示果書記　住杭州徑山

臨濟正宗自馬師黃檗闡大機發大用脫籠羅出窠臼虎驟龍馳星飛電激卷舒擒縱皆據本分綿綿的的到風穴興化唱愈高機愈峻西河弄師子霜華奪金剛王非深入閫奧親授印記莫知端倪徒自名逸只益戲論大抵負冲天氣宇格外提持不戰屈人兵殺人不眨眼尚未髣髴其趣向況移星換斗轉天輪廻地軸耶是故示三玄三要四料簡四賓主金剛王寶劒蹈地師子一喝不作一喝用探竿影草一喝分賓主照用一時行許多絡索多少學家摶量注解殊不知我王庫中無如是刀及弄將出來看底只是眨眼須是他上流契證驗認正按旁提還本分種草豈假梯媒只如寶壽開堂三聖推出一僧壽便打聖云儞與麼爲人非但瞎卻這僧瞎卻鎭州一城人眼去在壽擲下拄杖便歸方丈興化見同參來便喝僧亦喝化又喝僧復喝化云儞看這瞎漢直打出法堂侍僧問這僧有何相觸悞化云是他也有權有實我將手向伊面前橫兩遭卻不會似此瞎漢不打更待何時看他本色宗風迥然超絕不貴作略只羨他眼正要扶荷正宗提持宗眼須是透頂透底徹骨徹髓不涉廉纖迥然獨脫然後的的相承可以起此大法幢然此大法炬也繼馬祖百丈首山楊岐不爲叨竊耳。

示報寧靜長老

靈山單傳少室密付要卓卓絕類離倫驗風塵草動眼光睒睒透青去隔山已識起倒吞聲削迹不留毫末而能鼓逆水波運截流機上門上戶咬人火急如俊鷹快鶻迷影捎空背摩青霄眨眼便過點著便來挨著便去不妨峭淨所以流此正宗標準異世也箇箇須是殺人不眨眼然後入作只如黃檗老漢生知此段纔行腳天台見羅漢凌波絕瀑流即欲打殺及抵百丈聞舉馬師一喝三日耳聾乃退身吐舌知是大機之用豈單見淺聞所擬議哉其後接臨濟祖師全體用此不惜眉毛成就克家之子覆蔭天下人有志之士應他諳熟練使越格超宗然後所以奪飢人食驅耕夫牛紹繼先規不迷向背細處直是涓滴照透寬廣時千聖亦尋他不著始是向上種草祖峰老師常云釋迦彌勒猶是他奴至竟他是阿誰那容向此亂下鍼錐除非知有則較些子也大凡奮丈夫氣槩要超軼上流合下手便教羅籠不得呼喚不回利物應機莫非灑灑落落不向草窠裏輯鬼窟裏弄情魂將玄妙理性揚眉瞬目舉手動腳下合頭語以實法繫綴人家男女一旨引衆盲成何方便既已據位稱師固不可容易只自己分上滴水滴凍孤迥危峭如師子兒遨遊意氣驚群出沒縱擒卒難測度蕭然踞地返擲百獸奔馳喪膽豈非殊勝奇特耶還是與麼人三千里外已審端倪了也是故嚴頭道如水上按葫蘆子相似等閑蕩蕩地拘牽惹絆不得觸著捺著則蓋天蓋地長養履踐得到此地始可與靈山少室分一線路黃檗臨濟巖頭雪峰互爲賓主風行草偃亦不虛出頭播揚三十二年他家自有同流共證明通人相將護也誰言卞璧無人識我道驪珠到處晶

示開聖隆長老

開聖堂頭隆老政和中相從於湘西道林膠漆相投箭鋒相直由是深器之既而復相聚於鐘阜大鑪鞴中禁得鉗鎚了此段因緣日近日親向從上來乃佛乃祖越格超宗萬千人羅籠不住處毛頭針竅間廓徹虛通包容百千萬億無邊香水刹海拄杖點發列聖命脈吹毛及上截斷路布據曲親木床與人拔楔抽釘解黏去縛得大自在仍來夷門分座共相扶立久之況箇一著臨濟正法眼藏綿綿到慈明楊岐須風吹不入水灑不著底劍利漢負殺人不眨眼氣槩高提正印罵祖呵佛猶是餘事直令盡大地人通頂透底絕死生窠窟灑灑落落到無爲無事大達之場乃爲種草

示普賢文長老

佛祖以心傳心蓋彼彼穎悟透脫如兩鏡相照非言象所拘高超格量箭鋒相拄初無異緣乃受道妙嗣祖繼燈絕意路出思惟脫情識到蕩蕩然寬通自在處逗到擇人付囑亦要氣異羽毛頭角體裁全具然後不墜家聲得從上爪牙方相應副所以數百年紹續愈久愈光顯所謂源流深長也今則頗失故步多擅家風存窠窟作路布自既不徹轉以爲人則如老鼠入牛角漸漸尖小安得宏綱不委于地哉

老漢昔初見老師吐呈所得皆眼裏耳裏機鋒語句上悉是佛法心性玄妙只被此老子舉乾曝曝兩句云有句無句如藤倚樹初則擺撼用伎倆次則立論說道理後乃無所不至拈出悉皆約下遂不覺泣下然終莫能入得再四懇提耳乃垂示云儞但盡儞見解作計較待一時蕩盡自然省也隨後云我早爲儞說了也去去向衣單下體究了無縫罅因入室信口胡道乃責

云、儞胡道作麼、卽心服、眞明眼人透見我胷中事、然竟未入得、尋下山、越二載回、始於頻呼小玉、元無事處、桶底子脫、纔始覷見前時所示眞藥石也、自是迷昧透不得、將知眞實諦當處、如良遂道、諸人知處、良遂總知、良遂知處、諸人不知、誠哉是言也。

雪峰問德山、從上宗乘中事、學人還有分也無、德山以杖擊之云、儞道什麼、峰云、我在德山棒下似脫卻千重萬重貼肉汗衫、臨濟被黃檗三擊之到大愚、問有過無過、愚云、黃檗與麼老婆、儞更來覓過在、濟猛省、不覺云、元來黃檗佛法無多子、此二老皆叢林傑出者、並於棒下發明、後來大振此宗、爲世梯航、學者宜回思之、豈是龐淺邪、而近世有謂、以杖接人皆墮機境、直須究了心性、談極玄妙、向時中綿綿密密、有針有線、方可入細、只如一大藏教五教三宗、析微發隱、剖露至眞實際、徹佛地理性、豈不爲細、何假祖師西來、將知、法流既久多生異見、不得眞傳、乃將醍醐而作毒藥、豈德山雪峰黃檗臨濟之咎哉、諺曰、索短不到深泉。

魯祖見僧只面壁、南泉云、我有時向道、直須向父母未生已前究取、尙不得一箇半箇、他恁麼驢年去、二老並蹋齊眉、不是不知有、因甚卻恁麼地說話、還究到魯祖節文處麼、若究到則見、南泉如水入水、若不諳此、乃分疎魯祖、僻執南泉、圓轉隨他語脈路布、卒模索不著在。

石霜彎弓發箭、祕魔擊杈驗人、俱胝只豎一指、無業唯言莫妄想、禾山打鼓、雪峰輥毬、趙州喫茶、玄沙蹉過、佛法豈有如許耶、若一一作方便下合頭語、便論劫千生也未夢見在、若眞實蹋著曹溪正路、則坐觀成敗、覷見這一隊漏逗也。

子文監寺留此軸、今數年矣、近退院稍閑、因爲出此所有蓋天蓋地絕出聖賢一著子、公久參、自如良遂知之矣、建炎三年閏八月十一日雲居東堂書。

示鼎州德山靜長老

長老道林相從廼、宿昔有大緣、撥轉上頭關一語便契、圓照無遺、從上來莫不皆以是大機大用、龍象蹴蹋非驢所堪、若不具此手段、云何與人解黏去縛抽釘拔楔、此本分事也、但只一向操持驅耕奪飢廼活句也、一切語言、機要、事理、明暗、語默、擒縱、殺活、皆在下文不消一揑、唯黃檗臨濟睦州雲門、瀉仰雪峰玄沙、尤得妙也、山僧室中不曾蹋著此關、斷定不放過、付授之際尤在牢實、切忌依稀便骨董也、寧可無人承當、有則須是箇中人始得。

示潭州智度覺長老

至道簡易而淵奧、初不立階梯、壁立萬仞、謂之本分草料、是故摩竭掩室行正令、毗耶杜詞揭本宗、尙有作家漢未放過、何況涉妙窮玄、說心論性、被貼肉汗衫子黏著、脫拆不下則轉見郞當、爾少室曹溪、風範迥殊、臨濟德山作略、剔脫龍馳虎驟、地轉天旋、不妨慶快人、了不拖泥水、從上來大達大悟纔信徹極致處、卽如快鷹俊鶻迷風曜日、背摩青霄、直下透脫、使二六時中、無纖毫障隔、八達七通卷舒擒縱、聖位尙不居、豈肯處凡流、曾次蕩然該今括古、拈一莖草作丈六金身、拈丈六金身作一莖草、初無勝劣取舍、惟在當機活卓卓地、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、俱不奪、出格超宗十成蕭灑、豈是只貴籠罩人、人蓋覆移換走作、要當撲實頭顯示無依倚、無爲無事大解脫各各本分事、所以古人風塵草動便先照了纔出毫芒、卽與剗斷尙不得一半、豈可彼此草裏輥相牽、相拽機關語句上論量揀擇、作窠臼埋沒

人家男女、軒知是開眼尿床、他明眼人終不做箇般路布、大丈夫意氣驚群、須鬪正紹臨際本宗、一喝一棒一機一境、當陽剿絕、豈不見道、吹毛用了急還磨。

示蜀中鷲峰長老

多子塔前曾分半座、慈嶺西畔隻履獨攜、臨濟以瞎驢命惠然、夾嶠因青山委洛浦、雖源分派別、要一脈出自曹溪、擇大器利根使掃蹤滅跡、是故從上來龍馳虎驟、換斗移星閃電中別殺訛、石火裏分皁白、不論青底惟務俊流、懸肘後符、廓頂門眼、立起綱宗、單提正令、源不深則流不長、功不積則用不妙、是以西河弄師子、要超宗越格、而楊岐吞栗棘蓬、取奔流度及、既入箇選佛場、闖向上關楔子、應須一滴水一滴凍、硬著鐵脊梁、荷擔此大任、已躬下諦實爲人處無偏、纔落世緣便涉漏逗、祖峰老師橫點頭、白雲祖翁渾圖吞、棗常爲警策、如臨深履薄、便可以向百尺竿頭進千百步、懸崖上跳萬億遭、廼眞皮可漏方驗、撲不破、蓋大雄的的種草也、愼之。

示顯上人　住蘇州崑山惠嚴

見處通透用處明白、當旋機電卷結角羅紋、槃錯縱橫、自能回轉無凝滯、亦不立見、亦不存機、滔滔地風行草偃、蓋根腳悟入時、徹淵源、修證得無回互、會尙不可得、豈況不會、二六時中只恁無繫無絆、初不存能所我入、何有於佛法哉、此無心無爲無事境界、豈世間聰明、利智、辯慧、多聞、無根本人能測量耶、達磨西來豈將得此法來、他惟直指各各當人本有之性、令出徹明淨不爲如許惡知惡覺妄想計較所染汚、參須實參、得眞正道師不引入草窠裏、直截契證脫卻、貼肉汗衫子、令智次虛豁無一毫凡情聖量、亦不向外馳求、湛然眞實、千聖莫能排遣、得一片淨倮倮田地、透出空劫那邊、威音王猶是兒孫、何況更從他覓、有祖以來作家漢莫不如是、且如六祖新州一鬻薪人、目不識字、逗至於大滿相見、一面披襟著著透脫、雖則聖賢混迹、要以方便顯示、此段不隔賢愚、皆己本有、今既厠跡禪流、日逐冥心體究、知此大緣不從人得、只在猛利擔荷增進、日損日益、如精金百煉千煆、出塵之要利生之本、尤須七穿八穴、到無疑安穩、得大機大用之處、此工夫正在密作用中、只日於萬緣交參紅塵擾攘、順違得失擬然羅列、於中出沒不被他所轉、能轉於他、活潑潑地水灑不著、乃是自己力量、至於靜嘿虛凝、亦非兩種、乃至奇言妙句、險機絕境、亦只一槩平之、了無得失、皆爲我用、似此磨琢久之、生死之際脫然、視世間閑名破利、如風過游塵夢幻空花耳、翛然度世、豈非出塵大阿羅漢耶。

忠國師問本淨禪師、汝見一切奇言妙句時如何、淨云、無一念心愛、國師云、是汝屋裏事、參學到此、乃是淨潔乾曝曝地、不受人瞞者、只山僧恁麼道也、合與本分草料。

示諫長老　住蜀中無爲山

趙州云、我在南方三十年、除粥飯二時是雜用心處、將知古德爲此箇事、不將作等閑、直是鄭重、所以操修覷捕、到徹底分明、於一機一境一句一言、悉不落虛、是故世法佛法、打成一片、今時要湊泊著實、須是猛利奮發、倒腸換肚、莫取惡知惡見、莫雜毒食、一味純正眞淨妙明、直下蹋著本地風光、到安穩大解脫之地、坐斷報化佛頭、凜凜孤危、風吹不入、水灑不著、正體現成、日用有力量、聞聲見色不生、取舍著著有出身之路、豈不見僧問九峰、見說和尙親見延壽、是

否、峰云、山前麥熟也未、識得渠親切近處、便見裕僧巴鼻、所謂殺人刀活人劍、但請長時自著眼看、到出格時自然知落處也。

示元禪客　住成都府廣孝

趙州道、佛之一字吾不喜聞、且道、他爲甚如此、莫是佛爲一切智人、渠不喜聞耶、軒知不是這箇道理、既不如此何以不喜聞之、若是明眼人、聊聞便知落處、請問落在什麼處、試吐露看、魯祖見僧來便面壁、是爲人不爲人、節文在什麼處、若要與他投機、作何趣向即得。百丈大智、每上堂說法竟、復召大衆、衆回首、丈云、是什麼、藥山自云、百丈下堂句且道用接何人如何領覽。

示杲禪人　住杭州徑山

杲裕子根性猛利、負笈海上、徧訪宗匠、受知於舊、相無盡公、深器重之、負俊邁之氣、不肯碌碌小了、標誠相從、一言投機、頓脫向來羈鞅、雖未倒底領略、要是昂藏、不受人抑勒、快漢、原其所自、蓋由傳公殿撰發渠本因、遂冒嚴凝、趨之咸平、來告行、且乞法語、予因示之、裕子當痛以死生爲事務、消知見解礙、徹證佛祖所傳付大因緣、勿好名聞、退步就實、埃行解道德充實、愈潛遁而愈不可匿、諸聖天龍將推出人爾、況以歲月淹練琢磨、待如鐘在扣、如谷應聲、如精金出萬煨鑪冶、萬世不易、萬年一念向上巴鼻在掌握中、草偃風行、豈不綽綽然有餘裕哉、仍持此紙似傳翁、相與作證、履踐貴長久不變耶。

示蘊初監寺　住蘇州明因

只道與爾說一句子、早是著惡水潑人、何況更瞬目揚眉、敲床豎拂、是什麼、下喝行棒、軒知是平地上骨堆、更有不識好惡底、問佛問法、問禪問道、請相爲乞相接、求向上向下佛法智見語句道理、是乃泥裏洗土、土裏洗泥、幾時得脫灑去、有般底聞與麽道、便作計較云、我會也、佛法本來無事、人人無不具足、終日喫飯著衣、何曾欠少來、便向無事平常界裏打住、殊不知豈有恁麽事來、故知、須是本分其中人方諳、從上宗乘本分、若實有悟入處、識起倒、知進退、別休咎、離滲漏、日近日親、轉更豹變、不守窟宅、跳出圈圍、不疑天下老漢舌頭、一似生鐵鑄就正好、著力修行供養、然後可以然無盡燈、行無間道、舍身舍命、撈攏群生、令他各出樊籠、去執縛、佛病祖病俱瘥、解脫深坑已出、作箇無爲無事快活道人去、然自既得度、須不廢行願、思度一切、忍苦捍勞、向薩婆若海爲舟爲航、始有少分相應、愼勿做骨羸錐露柱燈籠、打淨潔毬子、自了得濟甚事、是故古德須勉人行箇一條路、堪報不報之恩、如今諸方多有靈利裕子、要直透得徹、有底探頭太過要易、會纔知些趣向、便欲出頭、又是一等蹉過、有推而不出、亦未圓通知時節因緣、而不失機會、乃通方之士也。

示一書記　住四明雪竇

英靈裕子、蘊卓犖奇姿、慷慨嗟冠、視身世浮名、如游塵浮雲、谷響、以宿昔大根器、知有此段、超生出死絕聖越凡、乃三世如來所證金剛正體、歷代祖師單傳妙心、跂步蹴蹋、作香象金翅、要馳驟飛騰於億千萬類之上、截流摩霄、豈肯爲鴻鵠燕雀局促於高低勝負、較目前電光石火間、被轉利害耶、是故古之大達、不記細故、不圖淺近、發志便欲高超佛祖、荷擔一切所不能承

當重任、普津濟四生九類、拔苦與安、破障道愚昧、折無明顚狂毒箭、拈出法眼見刺、使本地風光澄霽、空劫已前面目明顯、悉心竭力不憚寒暑、刻意尙行、向三條椽下、死卻心猿、殺卻意馬、直使如枯木朽株相似、驀地穿透、豈從他得、發覆藏然暗室明燈、擬鮥航於津要、證大解脫、不起一念、頓成正覺、且通箇入理之門、然後升普光明場、踞無漏、清淨殊勝、偉特、法空之座、口海瀾翻、奮無礙四辯才、立一機垂一句、現一勝相、普使凡聖有情無情俱仰威光、受庇麻、尙未是絕功動處、更轉那頭千聖羅籠不住萬靈景仰無門、諸天無路捧花、魔外那能旁覷、放卻知見、卻卻玄妙、颺卻作用、惟飢餐渴飲而已、初不知有心、無心得念失念、何況更戀著從前學解、玄妙、理性、分劑名相、桎梏知見、佛見、法見、動地掀天世智辯聰、自纏自縛、入海筭沙、有何所靠耶、等是大丈夫、應務敵勝、驚群滿、自己本志願、乃爲本分大心大見大解脫、無爲無事眞道人也。

跋一書記法語

予政和末抵鄭邪會一師、若故舊喜其志道不群、因作前偈、及應詔大梁、遂得游從、日以此段咨扣益勤、數百衆中乃肯擊力、復示以後語、建炎元祀、將之東南、因爲重書、而復系之以跋、爲他日再會之識、且以相分、雖道人本分相知、千萬里外、不隔毫末、而古者多於此時節行正令、趙州云、有佛處不得住、無佛處急走過、石室云、莫一向去、已後卻來我邊、洞山萬里無寸草、大慈帶取老僧去、歸宗時寒途中善爲、曹山去亦不變異、悟本飛猿嶺峻、好看皆直截不覆藏、唯處處、椰樑橫擔不顧人、直入千峰萬峰去。

示宗覺禪人

宗門接利根上智、提持出生死、絕知見、離言說、越聖凡、道妙豈淺識小見、理道機境解路上作活計者所能擬議、要須如龍似虎殺人、不眨眼漢、用警脫快利力量、聊聞舉著、剔起便行、外棄世間縛著、內捨聖凡情量、直得孤迥迥峭巍巍不依倚絲毫、當陽薦透全身擔荷、佛來也玄惑不動、況祖師宗匠語句機峰、一刀截斷更不顧藉、自餘諸雜甚譬如閑、方可攀上流、少分相應也、不見永嘉纔跨曹溪、便師子吼、丹霞聞馬師示、選佛場、當下決破、逗到二師之前、逆流投契、亮坐主四十二本經論言下冰消、德山吹紙燭便燒、疏鈔、臨濟六十棒後、乃翻擲並皆透脫、不知曾入室幾回、請益幾次、近時學道之士不道他不用工夫、多只是記憶公案、論量古今、持擇言句、打葛藤、學路布、幾時得休歇、如斯只贏得一場骨董、推源窮本蓋上梢、不遇作家、自己不負大丈夫志氣、曾不退步就己、打辨精神、放下從前已後勝妙知見、直截獨脫領取本分大事因緣、是故半前落後不分不曉、若只恁麼縱一生勤苦、亦未夢見在、是故昔人云、菩提離言說、從來無得人、德山道、我宗無語句、亦無一法與人、趙州道、佛之一字吾不喜聞、看他早是撥土塗糊人了也、若更於棒頭求玄喝下覓妙、瞠眉努眼、舉手動足、展轉落野狐窠窟去也、此宗惟貴悟明到、銀山鐵壁萬仞、孤峭擊石火閃電光、擬不擬、便墮坑、落穽、所以從上護惜箇一著子、同到同證、無儞攝摸處、既能辨心能舍緣累、修行依知識、若更不耐心向千難萬難不可湊泊處、放下身心體究教徹底、誠爲可惜、只如千生百劫到今、還有間斷也無、既無間斷、疑箇甚生死去來、軒知屬緣、於本分事了無交涉、五祖老師常說、我在此五十年、見卻千千萬萬禪和、到

禪床角頭、只是覓佛做說佛法、並不曾見箇本分衲子、誠哉、看卻今時、只說佛法底也難得、何況更求本分人、時節澆季去聖愈遠、大唐國裏胡種看看滅也、或得一個半個有操持、不敢望似已前龍象、但只知履踐趣向、頭正尾正早是火中出蓮、切宜撥退諸緣便能識破古來大達大悟底蘊、隨處休歇行密行諸天無路捧花、魔外覓行蹤不見、是眞出家了徹自己、如有福報因緣、出來垂一隻手、亦不爲分外、但辦肯心、必不相賺、只老僧恁麼也是普州人送賊、

示光禪人

欲得親切第一不用求、求而得之已落解會、況此大寶藏、亘古亘今、歷歷虛明從無始劫來爲自己根本、擧動施爲全承他力、唯是休歇到一念不生處、則便透脫、不障情塵、不居意想、迥然超絕則徧界不藏、物物頭頭渾成大用、一一皆從自己胷襟流出、古人謂之運出家財、一得永得受用豈有窮極耶、但患體究處、根腳不牢不能徹證、直須猛截諸緣、令無纖毫依倚、放身捨命直下承當無第二箇縱、使千聖出來亦不移易、隨時任運喫飯著衣、長養聖胎、不存知解、可不是省要徑截殊勝法門耶。

示民禪人

先聖一麻一麥、古德攻苦食淡、潔志於此、廢寢忘餐、體究專確、要求實證、豈計所謂四事豐饒者哉、及至道不及古、便有法輪未轉食輪先轉之議、由是叢林呼長老爲粥飯頭、得非與古一倍相返耶、然隨緣變異門且行第二段、北山延接方來道人、惟仰南畝、今秋適會大稔、請覺民禪客覩收刈、臨行乞言、因示以前段因緣、貴崇本及末、乃爲兼利並照、圜悟通達之人本分事也、勉行之乃善、

大凡學道探玄、須以大信根、深信此事不在言語文字一切萬境之上、確實惟於自己根腳放下、從前作知作解、狂妄之心、直令絲毫不掛念、向本淨無垢寂滅圓妙本性之中、徹底承當能所雙忘、言思路絕廓然、明見本來面目、使一得永得堅固不動、然後換步移身、出言吐氣、並不落陰魔境界、則一切佛法端坐現前、遂契行坐皆禪、脫去生死根本、永離一切蓋纏、成箇灑灑無事道人、何須向紙上尋他死語。

百草頭上有祖師、夾山指出令人薦、寬平田中有大義、百丈展手要人知、若能顆粒圓成、卽是單傳心印、更或彌望但然、使證第一聖諦、且出草一句作麼生道、滿船明月載將歸。

示才禪人

俱胝見僧及答問、惟竪一指、蓋通上徹下契證無疑、瘥病不假驢馳藥也、後人不諳來脈、隨例竪箇指頭、漫不分皂白、大似將醍醐作毒藥、良可憐愍、若是眞的見透底、始知鄭重、終不作等閑、所謂千鈞之弩、不爲鼷鼠發機、是故須具頂顆上眼、方可入作、後來玄沙拈曰、俱胝承當處莽鹵、只認得一機一境、有般拍盲底隨語作解、便抑屈俱胝、以謂實然、殊不知焦塼打著連底凍、到這裏直須子細、切忌顢頇、只俱胝臨化去自言、我得天龍一指頭禪、一生用不盡、豈徒然哉、

曹溪大鑑、微時、乃新州鬻樵人也、碌碌數十年、一旦聞客誦經、發其本願、棄母出鄉、遠謁黃梅、纔見數語間、投機隱迹碓坊八箇月、暨與秀師呈偈、始露鋒鋩、黃梅尋擧衣盂授之、是時群衆

趂逐、競欲奪取、而蒙山先及於庾嶺舉之、不勝方悟、非可以力爭、稽首乞發藥、大鑒示、以不思善惡處本來面目、卽便知歸、以時未至、復遁於四會獵人中、久之然後出番禺、吐風幡心動之語、印宗伸師禮、爲之落髮登具、卽開大法要、董二千衆、聲徹九重、命貴近降紫泥、確然不應、度龍象數十人、皆大宗師、何其疑哉、雖聖賢應世存亡進退舉照無遺、然步驟趣向從微至著、致之不斷世緣、而示妙規、百世之下無與爲等、到今徧寰海、皆其子孫、每仰洪範、輒欲擬其毫末、亦不可得、欲望後進有力量者、勉之、聊述梗槩耳。

現定見聞覺知是法、法離見聞覺知、若著見聞覺知、卽是見聞覺知非達法也、大凡達法之士超出見聞覺知、受用見聞覺知、不住見聞覺知、直下透脫渾是本法、此法非有非無非語非默、而能現有現無、現語現默、長時亘然不變不異、是故雲門云、不可說時便有、不說時便無去也、思量時便有、不思量時便無去也、直須妙達此法、令得大用、長時語默縱橫悉令般若現前、何必更論在善知識身邊爲親、在田野間作爲是疎、一往直前自然觸處逢渠也。

乃佛乃祖、仰重此一端的事、布在群機之中、高低貴賤未嘗向背、百種千頭作爲天眞、歷落圓陁陁地、若特地作佛法玄妙見、則虧儘能不起見、只麼淨倮倮卻全彰、所以道、入林不動草、入水不動波、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗、見拄杖子、只喚作拄杖子、謂之覩體、若向箇裏覩得透、從朝至暮、從暮至朝、無絲毫透漏、全爲我用、一一非分外、渾是本分事、腳跟下未得諦當、亦不移易絲毫許、豈非端的現成機要耶。

直截省要、只消箇現成公案、浩浩作爲自晝及夜、縱橫十字、喧靜語默、全體運用、一時覷破、從頭與批判將去、不妨快哉。

此事若在言語裏、則合一句語、便殺定更不移改也、云何千句萬句終無窮竭、將知不在言語裏、要假語句以顯發此事、靈利漢、當須直體此意、起證透語句底、使活鱍鱍地便能將一句作百千句用、將百千句作一句用也、更疑甚麼卽心卽佛、非心非佛、不是心、不是佛、亦不是物、以至心不是佛、智不是道、東山水上行、日午打三更、後園驢喫草、北斗裏藏身、一串穿卻、嚴陽尊者問趙州、一物不將來時如何、州云、放下著、進云、某甲一物不將來、未審教放下箇什麼、州云、看汝放不下、言下大悟、後來黃龍頌、一物不將來、兩肩擔不起、明眼人難謾、言下忽知非、退步墮深坑、心中無限喜、如貧得寶、毒惡既忘懷、沒交涉、蛇虎爲知己、異類等解寥寥、千百年清風猶未已、放下著若以常情論之、他道、一物不將來、云何卻向道放下著、將知法眼照於細微、爲他拈出大病、令他知羞慚去、他尙不覺、更復進問、再與點過直得、瓦解冰消、方始倒底一時脫去、遂至伏猛虎、馴毒蛇、豈非內感外應耶。

龐居士渾家向火、居士驀云、難難十石油麻、樹上攤、龐婆云、易易百草頭上祖師意、靈照云、也不難也不易、飢來喫飯、困來睡、尋常舉向人、多是愛靈照道得省力、嫌龐翁龐婆說難說易、只是作隨語解、殊不本其宗猷、所以言迹之興、異途之所由生也、若能忘言體意、方見此三人各出一手、共提箇沒底藍兒、撈蝦撫蜆、著著有殺人之機、處處有出身之路。

示璨上人

達磨西來、不立文字語句、唯直指人心、若論直指、只人人本有、無明殼子裏全體應現、與從上

諸聖不移易絲毫許、所謂天眞自性、本淨明妙、含吐十虛、獨脫根塵、一片田地、惟離念絕情、迥超常格、大根大智、以本分力量、直下就自根腳下承當、如萬仞懸崖撒手、放身更無顧藉、教知見解礙倒底脫去、似大死人已絕氣息、到本地上、大休大歇、口鼻眼耳、初不相知、識見情想皆不相到、然後向死火寒灰上、頭頭上明、枯木朽株間、物物斯照、乃契合孤迥迥峭巍巍、更不須覓心覓佛、築著磕著、元非外得、古來悟達百種千端、只這便是、是心不必更求心、是佛何勞更覓佛、儻於言句上作路布境、物上生解會、則墮在骨董袋中、卒撈摸不著、此忘懷絕照眞諦境界也。

荒田不揀、信手拈來、明明百草頭、明明祖師意、何況青青翠竹、鬱鬱黃花、墻壁瓦礫、以無情說法、水鳥樹林演苦空無我、是由依一實際、發無緣慈、於寂滅大寶光、顯無作勝妙力、長慶云、撞著道伴、交肩過一生、參學事畢。

南堵云、我拈片木葉入城、便是移一坐仰山去也、故香嚴擊竹、靈雲見桃花、資福剎竿頭、道吾神杖子、大仰揷鍬、地藏種田、無非發揚箇金剛正體、使當人不動步、參見大解脫眞善知識、行不言化、得無礙辯、則森羅萬象百草頭頭長時徧參、無不普攝圓融法界、坐斷報化佛頭、坐臥行藏、超證徧行三昧、何必覺城東際、樓閣門前、熊耳曹源、陞堂入室、然後爲親近傳證耶。

惠超咨和尙、如何是佛法、眼云、汝是惠超、超乃省悟、所謂出乎爾者反乎爾者也。

唐朝古德英禪師、微時事田、運槌擊塊、次見一大土塊、戲以槌猛擊之、應時粉碎、驀地大悟、自此散誕爲不測人、頗彰神異、有老宿拈云、山河大地、被這僧一擊、百雜碎、獻佛不假香多、誠哉是言。

示璨上人

依無住本立一切法、無住之本本乎無住、若能徹證則萬法一如、求其分毫住相不可得、只今現定作爲全是無住、根本既明如人有目、日光明照見種種色、豈非般若關楔乎。

永嘉云、不離當處常湛然、親切無過此語、覓則知君不可見、但於當處湛然二邊坐斷、使平穩、切忌作知解求覓、纔求卽如捕影也。

不與萬法爲侶是什麼人、回光自照看、待汝一口吸盡西江水、卽向汝道、八角磨盤空裏走、參得透目前萬法平沈、無始妄想蕩盡。

德山隔江招扇、便有人承當、烏窠吹布毛、尋有人省悟、得非此段大因緣、時至根苗自生耶、抑機感相投有地耶、抑當人密運、無間借師門發揮也、何峭絕如此之難、而超證如此之易、古人以輕芥投針爲況、良不虛矣。

信得心及、見得性徹、於日用中、無絲毫透漏、全世法卽佛法、全佛法卽世法、平等一如、豈有說時便有、不說時便無、思量時便有、不思量時便無、如此卽正在妄想情解間、何曾徹證、直得心心念念照了無遺、世法佛法初不間斷、則自然純熟、左右逢原矣、有問隨問便對、無問亦湛然常寂、豈非著實透脫生死要綱也、末後一句都通穿過、有言無言、向上向下、權實照用、卷舒奪、不消箇勘破了也、誰識趙州這巴鼻、須是吾家種草始得。

示寧副寺

古人爲此大因緣、若師弟子相見、未嘗不以是擊揚、至於食寢閑嘖、靡不攝念於此、是故一言一句、廼杖廼喝、瞬揚擧動、悉可投機、蓋誠心專一、無許多惡知惡見汚染、直截承當似不難、今之兄弟根性差鈍而復駁雜、雖參尋知識薰炙日久、尙懷猶豫、不能一往徹證、病在不純一長久、儻能不捨晝夜、廢寢忘餐、矻矻在道、不患不如古人矣。

示詳禪人

立志辦道之士、於二六時中自照、自了念茲在茲、知有自己腳跟下一段大因緣、處聖不增、居凡不減、獨脫根塵、迥超物表、凡所作爲、不立方所、湛寂凝然、惟萬變千化、初不動搖、應緣而彰、遇事便發、靡不圓成、惟要虛靜一切超然、主本既明、無幽不燭、萬年一念、一念萬年、透頂透底、全機大用、譬如壯士屈伸臂頃、不借他力、則生死幻翳永消、金剛正體獨露、一得永得、無有間斷、古今言敎、機緣、公案、問答、作用並全明此、若脫灑履踐、得日久歲深、自然左右逢原、打成一片、豈不見、法燈道、入荒田、不揀信手拈來草、觸目未嘗無臨機、何不道、無根兮得活、離地兮不倒、日用尙不知、更向何處討、切宜消息之。

示慧禪人

水潦、參馬祖、問佛法的的大意、馬祖與一蹋、遂大悟、乃曰、百千法門無量妙義、只向一毫頭上識得根源、豈不快哉、卽呵呵大笑、以至平生示衆、長云、自從一喫馬師蹋、直至如今、笑未休、又復呵呵大笑、蓋是存誠堅確、正覓入頭處未得、驀然遭蹋、便徹底承當、擔荷透脫無疑、尋吐出胸中所證、亦不復以別事、如今參學若果諦實、宗師以一語一言一機一境、投之撥著便轉、豈有雜事、但患根浮識淺、飄然似風過樹頭、千回萬度提持、亦未能便契、何況更被作情解者、指爲無如是悟入之事、馬師水潦亦只如是一期建立、如此則直到驢年也、未夢見在、是故學道唯尙諦信、慧禪人操履甚專、聊出此以示方便耳。

若論此事、如擊石火、似閃電光、明得、明不得、未免喪身失命、只如明不得、喪身失命則固是、明得因什麼也喪身失命、多少人到此疑著、殊不知、及得盡、方到命根斷處、換卻心肝五臟、與向上齊等、所以道、直下似懸崖撒手、然後乃生鐵鑄就、喚作透出荊棘林、不疑天下老漢舌頭、信有無事、無如是悟入之事、馬師水潦亦只如是一期建立、如此則直到驢年也、未夢見在、是故學道

示若虛庵主修道者　尼

學道之士、初有信向、厭世煩溷、長恐不能得箇入路、既逢師指、或因自己直下發明、從本已來、元自具足妙圓眞心、觸境遇緣自知落著、便乃守住、患不能出、得遂作窠臼、向機境上立照、立用、下咄、下拍、努眼揚眉、一場特地、更遇本色宗匠、盡與拈卻如許知解、直下契證本來無爲無事無心境界、然後識羞慚、知休歇、一向冥然、諸聖尙覓他起處不得、況其餘耶、所以巖頭道、他得底人、只守閑閑地、二六時中無欲無依、可不是安樂法門。

昔灌溪往末山、山問、近離甚處、溪云、路口、山云何不蓋卻、溪無語、次日致問、如何是末山境、山云、不露頂、如何是山中人、云非男女等相、溪云、何不變去、山云、不是神、不是鬼、變箇什麼、如此豈不是腳蹋實地、到壁立萬仞處、所以道、末後一句始到牢關、把斷要津、不通凡聖、古人既爾、今人豈少欠耶、幸有金剛王寶劍、當須遇著知音、可以拈出。

示良蘆頭禪人

金色頭陁鷄足峰論劫打坐、達磨少林面壁九年、曹溪四會縣看獵、大潙深山卓庵十載、大梅一住絕人迹、無業閑大藏、古聖翹足七晝夜、贊底沙、常啼經月、霑心肝、長慶坐破七箇蒲團、是皆爲此一段大因緣、其志可尙、終古作後昆標準、使使致身在長連床上、亦不過冥心體究、但令心念澄靜、紛紛擾擾處正好作工夫、當作工夫時、透頂透底無絲毫遺漏、全體現成、更不自他處起、惟此一大機阿轆轆地轉、更說甚世諦佛法、一樣平持日久歲深、自然腳跟下實確確地、只是箇良上座、直下契證、如水入水如金博金、平等一如湛然眞純、是解作活計、但一念不生、放敎玲瓏、纔有是非彼我得失、勿隨他去、乃是終日竟夜、親參自家眞善知識、何憂此事不辨、切須自看。

示許奉議　庭圭

此箇事在利根上智之人、一聞千悟不爲難、要須腳跟牢實諦當徹信、把得定作得主、於一切逢順境界差別因緣、打成一片、如太虛空無纖毫障隔、湛湛虛明無有轉變、雖百劫千生、始終如一方得平穩、多見聰俊明敏、根浮腳淺、便向言句上認得轉變、卽以世間無可過尙、遂增長見刺、逞能逞解、趂語言快利、將爲佛法只如此、及至境界緣生、透脫不行、因成進退、良可痛惜也、故古人直是千魔萬難、悉皆嘗遍、雖七處割截、亦不動念、一往操心猶如鐵石、以至透脫生死渾不費力、豈不是大丈夫超情慷慨所存也。

在家菩薩修出家行、如火中出蓮、蓋名位權實意氣卒難調伏、況火宅煩擾煎熬、百端千緒、除非自己直下本眞妙圓、到大寂定休歇之場、尤能放下、廓爾平常、徹證無心、觀一切法如夢如幻、空豁豁地、隨時應節、消遣將去、卽與維摩詰、傅大士、裴相國、楊內翰諸在家勝士、同其正因、隨自己力量、轉化未悟、同入無爲無事法性海中、則出來南閻浮提、打一遭、不爲折本矣

佛法無多子、如俱胝竪一指、打地只打地、鳥窠吹布毛、無業莫妄想、中邑哆哆和和、古堤無佛性、骨剉一生只道箇骨剉、只爲信得及、所以一生受用不盡、若疑著便有異見差別、有向上有向下、豈能坐得斷、所以貴久長、乃難得人也。

既趣向得入根腳洞明、當令脫灑特立孤危、壁立萬仞、佛病祖病去、玄妙理性遣、等閑蕩蕩地百不知百不會、一如三家村裏人、初無殊異、養來養去、日久歲深、朴實頭大安穩、方得安樂、終不肯露出自己、作聰明顯作略、衒耀知見、趂口頭禪、所以道、十語九中不如一默也、又道、我見千百人、只是覓作佛底、於中求一箇無心道人、難得此事、最要行持、而於行持、不著相不居德、是名無相眞修、香象渡河、截流而過、如此行持滴水滴凍、尙不留於胷中、何況特地起心、作諸罪惡、既已如是保護、亦如是轉勸未悟、便於此箇上調直純信、無爲無事豈不快哉。

示諸知浴

此箇大法、三世諸佛同證、歷代祖師共傳、一印印定、直指人心、見性成佛、不立文字語句、謂之敎外別行、單傳心印、若涉言詮路布、立階立梯、論量格外格內、則失卻本宗、辜負先聖、要須最初入作、便遇本分人、直截根源、退步就己、以鐵石心、將從前妄想見解、世智辯聰、彼我得失、倒底一時放卻、直下如枯木死灰、情盡見除、到淨倮倮赤灑灑處、豁然契證、與從上諸聖、不移易

一絲毫許、諦信得及、明見得徹、此始爲入理之門、更須教一念萬年、萬年一念、二六時中純一無雜、纔有纖塵起滅、則落二十五有、無出離之期、抵死謾生咬教斷、然後田地穩密、聖凡位中收攝不得、始是如鳥出籠、自休自了處、得坐披衣、眞金百煉、舉動施爲、等閑蕩蕩地、根塵生死、境智玄妙、如湯沃雪、遂自知時、更無分外底、名爲無心道人、以此修證轉、開未悟、令如是履踐、豈不爲要道哉。

古人爲此一段因緣、豈止忘餐廢寢、至捨頭目髓腦、斷臂負舂、動是三二十年、只如巖頭雪峰、欽山、雖同歷涉叢林、各執一務効勤、九度洞山三到投子、凡所至處、未嘗放過、一宵一霎、必遞相擧較、互相切瑳、遂契新豐、豁存領旨、德嶠、覩其跂步體裁、可謂法門龍象、後學之人可以仰其陳躅、無使虛棄光陰、有忝昔賢耳。

昔天台韶國師、少負俊才、游叢林、所至投機、已領師席、最後抵金陵清凉大法眼禪師會下、已倦咨參、唯勉進隨侍之者、摳衣籌室、一日隨衆僧參、有問、如何是曹源一滴水、答云、是曹源一滴水、師聞之、前之證解、渙若冰釋、方爲得大安穩、是知、學解因人所領、十言一句、一機一境、只益多聞、到究竟至實之處、須是桶底子脫始得、此事斷定不在言句中、若執著記憶、以爲己見、如畫餅、豈可充飢、然大達之士、超證諦實、及至投機、於語句間、迴出塗轍、機境筌蹄、籠羅他不住、只如石頭問藥山、爾在此作什麼、對云、一物不爲、頭云、如此則閑坐也、對云、閑坐則爲也、石頭又問、子道不爲不爲、箇什麼、對云、千聖亦不識、石頭乃以頌贊云、從來共住不知名、任運相將只麼行、自古上賢猶不識、造次凡流豈可明、似此豈不是徹證底人語話、機量言句何曾拘束得他、若理地不明、智次有物、問著如氈上拽猫兒、是故祖師道、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂。

叢林兄弟、參問最初、的有正因、於善知識邊、自陳生死事大己事未明、推此所言、豈是汎汎爲名爲位、爲我能我勝、若始終一貫常持此心、不憂己事不明、及更親近稍久、自己分上未有毫末相應處、便論量如之若何彼見解長短、增長我見覓箇出頭處、他時一辨香、不敢辜負和尙、殊不知、失卻元初正因、卻墮在魔界去、古人道、設有眷屬莊嚴、不求自至、既是一等蹋破草鞋、宜應了卻初心、期脫透生死、最爲至要時、不待人、各宜勉力。

示印禪人

道由悟達、立志爲先、自博地具縛凡夫、便欲跂步超證直入聖域、豈小因緣哉、固宜操鐵石心、截生死流、承當本來正性、不見纖塵中外有法、使智次蕩然了無罣礙、施爲作用悉從根本中出、根本既牢實、能轉一切物、是謂金剛正體、一得永得、豈假外求、是故古德云、此宗難得其妙、切須子細用心、可中頓悟正因、便是出塵階塹、古德隔江招扇吹布毛、便有發機處、至於驀口掌劈脊棒、亦解桶底子脫、蓋緣專一久之、一旦瞥地、豈外得之、皆由自證自悟耶。

大梅諮馬師、受箇卽心卽佛、便深入閫奧、自去住山後聞非心非佛之語、便云、這老漢鼓弄人家男女、有甚了期、爾但非心非佛、我只卽心卽佛也、豈不是有逆水之波、覷破馬師漏逗耶。

藥山示衆云、我有一句子、待犢牛生兒、卽向爾道、當時若不放過、但向伊道、和坐子敗缺。

示信侍者

學道之要在深根固蔕於二六時中照了自己根腳當大起念百不干懷時圓融無際脫體虛凝一切所爲曾無疑間謂之現成本分事及至纔起一毫頭見解欲承當作主宰便落在陰界裏被見聞覺知得失是非籠罩半醉半醒打疊不辦的實而論但於鬧鬨鬨中管帶得行如無一事相似透頂透底直下圓成了無形相不費工用不妨作爲語默起倒終不是別人稍覺纖毫滯礙悉是妄想直教灑灑落落如太虛空如明鏡當臺如杲日麗天一動一靜一去一來不從外得放教自由自在不被法縛不求法脫盡始盡終打成一片何處離佛法外別有世法離世法外別有佛法也是故祖師直指人心金剛般若貴人離相譬如壯士屈伸臂頃不借他力如此省要好長時自退步體究令有箇落著諦實證悟之地即是念念徧參無邊無量大善知識也切切諦信勉力作工夫乃善之善也。

示祖印沙彌

永嘉道不離當處常湛然覓即知君不可見只於當處湛然二邊坐斷使平穩切忌作知解求覓纔求即如捕影也。

馬祖云即心即佛又云非心非佛又云不是心不是佛不是物東寺云心不是佛智不是道劍去久矣爾方刻舟若各隨語去豈有定論若忘言契證雖更宣演百千億句亦不過一實且什麼是實處如大梅云儞但非心非佛我則即心即佛也豈不實耶要徹底信得及須是親證親見自然不受人謾也。

示民知庫

民禪錦官大慈傳法昭律師之法孫纔披削即習家業學四分毗尼既而搭布巾欲離法自淨乃肩錫南游訪西來宗旨抵夾山因相從住道林久之老僧領蔣山參扣愈堅確其於領略能自擺撥知解要全機直透每應緣酬唱一往直截頗有蘊藉爲可喜也然以此根器更効勤息志到極深處無深極妙處無妙大休歇大安穩不動纖塵只守閑閑地聖凡莫能測萬德不將來然後可以分付鉢袋子也。

巖頭云卻物爲上逐物爲下萬境萬緣以至古今言教臨機應變若自己根腳虛靜圓明寂照凡來干我能以金剛王寶劍當鋒斬斷則凜然神威坐斷一切不待卻而自退豈不綽綽然有餘裕哉儻立本不明稍涉遲疑則被牽引酌然分疎不下豈免隨他所轉既隨他去卒無自由分至道簡易唯卻與逐善體道者宜深思之。

古人爲此一段事直得捨全身立雪負春賣心肝然兩臂投猛火聚七處割截飼虎救鴿捨頭施目百種千端蓋不艱苦則不深到有志之士固宜以古爲儔晞顏慕蘭也。

圓湛虛凝道體也展縮殺活妙用也善游及能操守如珠走盤如盤走珠無頃刻落虛亦不分世法佛法直下打成一片所謂觸處逢渠出沒縱橫初無外物淨倮倮阿轆轆以本分事印定頭頭上明物物上了何處更有得失是非好惡長短來但恐自己正眼未得洞明是致落在二邊則沒交涉也豈不見永嘉道上士一決一切了中下多聞多不信。

佛祖言教筌罤耳藉之以爲入理之門既廓然明悟承當得則正體上一切圓具觀佛祖言教、

皆影響邊事、終不向頂額上戴卻、近世參學、多不本宗猷、唯持擇言句、論親疎辨得失、浮漚上作實解、更誇善淘汰得多少公案、解問諸方五家宗派語、一向沒溺情識、迷卻正體、良可憐愍、有眞正宗師、不惜眉毛、勸令離卻如上惡知惡見、卻返謂之心行、移換擺撼煅煉、展轉入荊棘林中、所謂打底不遇作家、到老只成骨董、省要處不消一箭、皮下有血知落處、苟或躊躇、則失卻鼻頭也。

七佛已前便與麼、直須硬糾糾緊著頭皮、分明歷落薦取這一片田地、穩密、長時乃自會、退步、終不道我有見處、我有妙解、何故箇中若立一絲毫能所見刺、則重過山嶽、從上來決不相許、是故釋迦文於然燈佛、以無法得授記、盧老於黃梅、以本來無物親付衣鉢、至於生死之際、纔自擔荷、則如靈龜曳尾、應須淨穢二邊都不依怙、有心無心有見無見、似紅爐著一點雪、二六時中、透頂透底、灑灑落落、遊此千聖不同、途處直下令純熟、自然成就、得箇絕學無爲、千人萬人羅籠不住底眞實人也。

趙州和尙見僧喚云、近前來、僧近前、州云、去多少省力、若薦得乃是十成、若作如之若何、則知見生也。

古人有具大慈悲、見人當面不自承當、方便撥正通箇入路、如古堤見僧來便云、退後退後、汝無佛性、後來只有箇仰山、能知渠端的、如今拈問學者、十箇有五雙茫然、爲向伊句下死了、所以無瞥地分、若據活處如何吐露、切忌隨他語句好。

靈雲作頌悟桃花、玄沙言渠未徹、老婆臺山指路、趙州歸來說勘破、叢林中作種種論量、只贏得鬧、殊不知、古人如敲門瓦子相似、只貴得入門、既入得門了、安可執卻瓦子、作奇特事、謂諦當直截顯露、落在甚處、還委悉麼、毫釐有差、天地懸隔。

入荒田不揀、信手拈來草、其奈亦能殺人、亦能活人、苟或著得眼、正下得手親、則一莖草可使作丈六金身、況其他變化乎、根本既明、於日用中鋤田墾土、春種秋收、無非與夾山老子親唱酬、地藏阿師展演、同一梵行、踐履純熟、高據毗盧傳此正法、豈不妙哉。

送自聞居士出京

何處蹋著來、若是移舟諳水勢、擧棹別波瀾、何消抵死叮嚀、自可一揮便了、所以風馳電閃、擬議則千里萬里去也、只接俊流、不管懵底、是故垂鉤四海、只釣獰龍、格外玄機、爲尋知識、既達此宗、觀一切世出世間、曾不移易、一一透頂透底、便解放身捨命、於萬別千差境界、恬然不動、縱遇風力恒坦坦、假饒毒藥、也閑閑、儘不踐履長養、安能揭日月、大通大明、自在出沒、此地從來無向背、直須撥轉上頭關。

示湧道者　尼

古人爲此大法捐軀捨命、歷無邊無量辛懃、及至洞明奧旨、鄭重如至寶、保護如眼睛、造次動轉不令輕觸、纔起一毫勝解知見、卽若雲翳青天、塵昏鏡面、故趙州道、我在南方三十年、除粥飯二時是雜用心處、曹山指人、保任此事、如經蠱毒之鄉、水也不得沾、他一滴、始得以忘心絕照、踐履到如如實際、無事於心、於心無事、平澹無爲、超然獨運、自既腳蹋實地、方可爲人解去黏縛、度盡一切人、實無人可度、直須用取最後句、物物頭頭有出身之地也。

示寶上人

古人念此大事、雖處深山幽谷村落間、未嘗斯須違背、遇境逢緣、若色若聲、動作施爲、無不回轉令就自己分上、與從上來透徹之士所履踐、無二無別、所以根本牢强、不隨境界風轉、靜然安閑、不落聖凡情量、直下大休大歇、得坐披衣、今汝旣還鄉井、能如昔人覩捕、使無間然、與鐘山方丈搥拂之下、以至三條椽下七尺單前、何以異哉、若稍違背、及有間斷、打入沒交涉處、臨岐切記、斯言異時前程、不可逆料矣。

示樞禪人

玄學之士、見性悟理、踐佛階梯、是家常茶飯、須知佛祖頂顙上、有換骨妙致、方可越格超宗、作向上人舉措、使德山臨濟、無施作用處、平時只守閑閑地、初不立伎倆、似三家村裏人、頑然癡兀直得、諸天捧花無路、魔外潛覷不見、漠然不露毫芒圭角、如居萬億寶貨、深藏牢鎖、土而灰頭與傭保雜作、口亦不言、心亦不念、一世人莫測、而神意泰然、豈非有道無爲無作眞無事人耶。

解語非干舌、能言不在詞、明知、古人舌頭語言、不是依仗處、則古人半句一言、其意唯要人直下契證、本來大事因緣、所以修多羅教、如標月指、祖師言句是敲門瓦子、知是般事、便休、行履處綿密、受用處寬通、日久歲深不移易、拈弄收放得熟、小小境界悉能照破割斷、不留朕迹、及至死生之際、結角羅紋、不相參雜、湛然不動、翛然出離、此臘月三十日涅槃堂裏禪。

示寶禪老

威音已前無師自悟、一往超證千聖同途、放得行把得住作得主、渾圓成現、不須煅煉、而自純熟、及至威音已後、雖自有超卓處、直下承當、到無疑之地、要須依師決擇、印可使成法器、不爾必有魔孽壞破正因、是故有祖以來、資授師傳最貴師法、何況此箇事非世智辯聰所了、非聞見覺知所拘、苟不操勇猛大丈夫志氣、能擇眞正善友知識、截生死流、破無明殼、孜孜參扣久之、專一時節緣稔、驀地桶底子脫、廓然省悟、然後投誠決擇證據、自然如下水船、不勞篙棹、乃爲針芥相投、旣得旨之後、綿綿相續、管帶令無間斷、長養聖胎、縱逢境界惡緣、能以正知見定力融攝之、使成一片、則生死大變、不足動自己智次、養得歲深、成箇無爲無事大解脫人、豈不是能事已辨、行腳事畢耶。

示瑛上人

此事在當人快利、旣承當擔荷、知有自己根腳、尤宜卓卓特立獨行、須絕情離、照使廓然空寂、無一法可得、截斷諸緣、令灑灑落落、到大安穩之地、綿密無滲漏、所謂壁立萬仞、峭巍巍地、然後卻回來、涉世應物、初無我相、豈有聲色順違魔佛境界耶、最難是等閑不作意處、驀地被牽轉、便漏逗也、應須相續管帶、使勿走作、久久之打成一片、乃爲歇場、更須會取向上行履、始得、古德云、得坐披衣向後自看。

示泉上人

參問、要見性悟理、直下忘情絕照、胷襟蕩然如癡似兀、不較得失、不爭勝劣、凡有順違、悉皆截斷、令不相續、悠久自然到無爲無事處、纔有毫髮要無事、早是事生也、一波纔動、衆波隨、豈有

了期、忙時死生到來、腳忙手亂、只爲不脫灑、但以此爲確實、自然鬧市裏亦靜如水、豈憂己事不辨耶。

纔有是非、紛然失心、只這一句驚動多少人、作計較、若當頭坐斷、透出威音王那邊、若隨此語轉、特地紛然、應自回光返照始得。

如來禪、祖師禪、豈有兩種、未免竦含各分、皁白、特地乖張、事理機鋒一時坐斷、是打淨潔毬子、還知著實諦當處麼、放下看取。

示思禪人

一切萬法、皆與自己無違無背、直下透脫成一片、從無始以來只恁麼、但恐、當人自相違背、强生取捨、無事生事、所以不快活、若能外絕攀緣、內忘己見、卽物是我、卽我是物、物我一如洞然無際、則二六時中四威儀內、一一皆壁立萬仞、何處有如許勞攘來、每見久參凝神澄照、既多時、雖然有箇入處、驀地便認一機一境、硬把住不受撥剔、此正大病也、要須銷融放下、自得大休歇處始得。

示傑上人

行腳參請、既依附知識、於大叢林、陪清高雅衆久矣、一旦以親緣、須著略歸、動是數百里遠行、要須以自力量、不忘履踐、直教行處不生塵、況此段事、不道在知識身邊、時便有居鄉井便無也、所謂趣時不在、如同死人、正當在時亦不起模畫樣、雖則平常、而滴水滴凍、卓然絕識成箇無爲無事無心事業、表裏洞然無際、不與萬法爲侶、不與千聖同途、深根固蔕、只守閑閑地、養來養去、不憂不徹、但盡凡情作自己工夫、勿管外緣、勿逐名利、起我見競勝負、是故古德道、任運、猶如癡兀人、他家自有通人愛、傑禪人倏來告別、求警策、因書此語授之。

示成修造

蔣山門下無禪可說、無道可傳、雖聚半千衲子、唯以箇金剛圈栗棘蓬、跳者著力跳、吞者用意吞、莫怪沒滋味太險峻、或若驀地體得、如晝錦還鄉、千人萬人只仰羨得、要且覓他所從來、不得所謂人人本分事也、纔生心動念、承當擔荷、早是不本分了也、直得萬機休罷、千聖不攜、奈猶有依倚在、快須擺撥透脫那邊、去始得、所以道、但有纖毫、卽是塵擧、意便遭魔所撓。

成就一切、總只由他、破壞一切、亦只由他、奇特殊勝緣、恆沙功德藏、無量妙莊嚴、超世希有事、皆所成就、慳貪悭妬、情識執著、有爲有漏、垢染雜亂、解路名相知見妄情、所破壞也、唯它能轉一切物、一切物不能轉它、雖無形段面目、而包括十虛、含凡育聖、若作相取取之、卽墮見刺、卒摸搡不著。

諸佛開示、祖師直指、唯此妙心、徑捷承當、不起一念、透頂透底、無不現成、於現成際、不勞心力、任運逍遙了、無取捨、乃眞密印也、佩此密印、如暗藏燈、游戲世間、不懷欣怖、盡是我大解脫場、永劫窮年、曾無間斷、所以道、丈六金身、作一莖草、用一莖草、作丈六金身、用豈有他哉。

雪峰道、是什麼、雲門道、須彌山、洞山道、麻三斤、趙州道、喫茶去、巖頭噓、投子嘿、臨濟喝、德山棒、擊杖、擧指打、鼓拽、磨、一一顯向上宗風、頭頭示本分草料、大達之士一覩便透、一覩知落處、堪紹宗風、體底數、沙、當面蹉卻、是故須得俊流、乃作種草。

示逾上人

有志之士欲決定信入此箇大事要須將從前知慧聰明所解所知倒底放下令如癡兀胷中空勞勞百不知百不解千休萬歇萬歇千休驀然從本地風光上倜儻透脫前後際斷徹證自得契金剛正體如斬一綟絲頓然齊了雖劫火洞然初無變異信得及把得住作得主一爲一切爲一了一切了餉開移身換步萬種作爲渾歸一體更說甚世法佛法頭頭物物觸處現成便與佛祖無殊亦與群靈無異蓋根腳既明無幽不燭信手拈信步行信口言元非它亦不從別處轉謂之大施門開百千妙用縱橫十字透頂透底明證佛性長時無間一得永得踐履純熟豈不是省要得力處但恁麼信入斷定不悞人。

僧問雪峰學人乍入叢林乞師指箇入處雪峰云乍可碎身若微塵終不瞎箇師僧眼且古人恁麼意在甚處若善參詳不妨回避不得須有箇入路若只隨言逐義則蹉過不少我早是不惜眉毛了也。

僧問石頭如何是道頭云木頭又問如何是禪頭云碌塼奇怪古人忒煞直截略不回互所謂親切太近有智見足計較底如隔銀山鐵壁不然則認口頭言語便當宗乘則轉更周遮是故眞實道人只務純朴不生知見直下承當只恁麼注解已是土上加泥數百重不如還我石頭本分草料來。

三祖云要急相應唯言不二若據山僧只箇不二早是二了也參。

趙州勘破婆子叢林議論千萬多作見解殊不知他古人自在乾淨處立看爾向泥坑子裏頭出頭沒。

馬師云待爾一口吸盡西江水即向爾道信此老蹋殺天下人只等閑出一語便令作無限知見若有解截這老漢葛藤便請罷參。

示淨禪人

淨道人因入室遂請益所疑云此一段事爲何宗師多示人這邊那邊尋語之據本分截斷豈有如許然垂手方便貴圖箇入路乃强分之意實無二種耳不見僧問曹山古人提持那邊人數學人如何趣向山云退步就已萬不失一其僧有省所謂識取鉤頭意莫認定盤星只要及盡今時便承當得向上事且今時作麼生及得盡只在當人快著精彩擺撥緣塵直令胷中脫灑不立纖毫透頂透底洞然虛寂切忌作勝量解會直待與本來相應自然自悟自證得大安穩之地也此豈紙上所能話會耶請自著眼看。

示堅道者

佛祖妙道徑截唯直指人心務見性成佛爾但此心源本來虛靜明妙初無纖毫隔礙而以妄想翳障於無隔礙自生染障背本逐末枉受輪廻若具大根器更不外求於自腳跟脫然獨證惡覺浮翳既消本來正見圓妙謂之卽心卽佛從此一得永得如桶底子脫豁然契合無一法當情覩體純靜受用無疑則一了一切了及至聞說非心非佛幷親臨違順好惡境界則一印印定何有彼我異同種種混雜知見耶是故古德於一機一境一語一默投誠入理千門萬戶了無差殊譬百千異流同歸大海自然居之既安用之透徹作箇無爲無事絕學道人去也二

六時中不生別心、不起異見、隨時飲啖衣著、萬境萬緣、無不虛凝、雖千萬年不移易一毫髮許、處此大定、豈非不可思議大解脫耶、唯要長時無間斷、不墮內外中間有無染淨、直下休歇去、見佛衆生等無差殊、乃是十成安樂之地也、今既已有趣向、只在長養令純熟、煆來煆去、如百煉精金、方成大法器也。

示尙禪人

幸自圓成、何須特地、直饒以慈悲之故、信手拈來也未免强生枝節、卻返不如未露鋒鋩已前、只如今恁麼涉水拖泥不少、只得就裏分疎、還委悉麼、一粒之中藏世界、普天匝地應時收。

示瑛上人

道本無言、因言顯道、若眞體道之人、通之於心、明之於本、直下脫卻千重萬重貼肉汗衫、豁然契悟本來眞淨、明妙冲虛、寂淡如如、不動眞實正體、到一念不生前後際斷處、蹋著本地風光、更無許多惡覺知見、彼我是非、生死垢心、拔白露淨信得及、與他從上來人無二無別、等閑不作爲、不確執虛通自在圓融無際、隨時應節、喫飯著衣契證平常、謂之無爲無事眞正道人、蓋緣根本既明、六根純靜、智理雙冥、境神俱會、無深可深、無妙可妙、至於行履自會融通、喚作得坐披衣向後自看、終不肯只向言句中話路、古人公案間埋沒、鬼窟裏黑山下、作活計、唯以悟入深證爲要、自然到至簡至易平常無事處、然亦終不肯死殺坐卻、墮在無事界裏、是故從上作家、古德行棒行喝、立宗旨明與奪、設照用三要三玄五位偏正、峻機電卷、言前格外旁提正接、只貴當人活卓卓地、千人萬人羅籠不住、知有向上宗乘、終不指注定殺掘坑埋人、若有如此者、定是弄泥團、非慷慨透脫、眞正具眼衲子、所以不喫人殘羹餿飯、被繫驢橛子綴住、不唯埋沒宗風、抑亦自己透脫生死不得、況復展轉將路布窠窟、解路傳授、與後學、遂成一盲引衆盲、相將入火坑、豈是小禍、復令正宗只見淡薄、祖佛綱紀委地、豈不痛哉、所以學道、先須擇正知正見師門、然後放下複子、不論歲月、用做事綿綿相續、不怕苦硬難入、參取管、須徹去、不見睦州道、未得箇入頭、須得箇入頭處、若得箇入頭處、不得辜負老僧、既操誠日久、大經鉗鎚、洪鑪煆煉、日近日親、田地穩密、只更辨悠久管帶、使如證如悟、始終無間、世法佛法打成一片、物物頭頭有出身處、不墮塵機、不爲物轉、鬧市裏十字街頭、活浩之中、正好著力也。

五祖老師平昔爲人最捷徑、每示徒多舉古德有漏筏籬、無漏木杓、大乘井索、小乘錢貫、覿面相呈時、如何分付典座、如何是玄旨壁上掛錢財、謂學人、儞若使與麼會得徹底去、便可罷參、所謂唯此一事實、直得赤心片片不隔一絲髮許、若眞究得到此田地、始堪提持綱宗、傳正法眼也。

示昇禪人

參問之要在專一、不强作爲、只守本分、須根腳有透脫處、明見本來面目、蹋著本地風光、初不改移尋常行履、而表裏一如、任運施爲、不立奇特、與汎常人無以異、喚作絕學無爲閑靜道人、而自處之際、不露心迹、直得諸天捧花無路、魔外潛窺不見、始是朴實頭著實處也、養來養去、日久歲深、世法佛法打成一片、混融無際、力用現成、透脫死生、豈爲難事、但患證入處不諦當、胷中有物則留礙也、要急相應、當須旋有旋消、如紅鑪著雪相似、自然廓然安靜、得大解脫也、

但自退審、親附知識、不爲不久、所以履踐處、還有端的落著也未、若有落著、更疑箇甚麼、直下不起一念、脫體承當、一處纔眞、千處萬處豈更別也、祖師只要人見性、諸佛只令人悟心、心性既眞、純一無雜、則四大五蘊、六根六塵、一切萬有、無不皆是自己放身捨命處、等閑蕩蕩地、如日普照、如虛空無邊量、豈以有限身心、返自拘局、令不快活耶。

古人十年二十年、只要參透、一透之後、便解作活計、如今豈是欠闕、但不起要情、不生執著、隨力遇緣、靡不通徹、唯貴專一純靜、雖幹事緣、亦非外物、攝歸自己、卽爲妙用、八萬塵勞卽時化作八萬波羅密、更不須別參知識、於日用中度無量數衆生、成就無量數佛事、歷涉無量數法門、皆從自己胷中流出、豈有他哉、所謂百尺竿頭須進步、大千沙界現全身。

示民上人

學道深宜退步體究、但以死生爲念、世諦無常、是身非堅久、一息不來、便是異世他生、或若論入異類、轉更千生萬劫、無出徹處、幸而今富有春秋、正好著力念念趣向、心心不移、向根腳覩捕到一念不生前後際斷處、驀然透徹、如桶底子脫、有歡喜處、極奧窮深、躍著本地風光、明見本來面目、不疑天下老和尙舌頭、坐得斷把得住、以無心無爲無事養之、二六時中更無虛過底工夫、心心不觸物、步步無處所、便是箇了事衲僧也、不圖名不苟利、壁立萬仞、滴水滴凍辨自己透脫生死事、不管諸餘、不動聲色、不驚群衆、脩然獨脫、眞出塵羅漢也、切宜信而履踐。

昔蒙山惠明道人、自黃梅趂逐盧老、到大庾嶺、及之、遂吝稟、不爲衣鉢來、只爲法來、盧乃令坐於盤石、冥心、因語之云、汝但善惡都莫思量、正當恁麼時、一物不思、還我明上座本來面目來、明依言斂念、尋有省發、乃復問盧、爲只這箇、爲當更別有密意、盧云、我若向儞道、卽不密也、只如上說、汝若會、卽密在汝邊矣、蒙山乃了了無疑、將知、密意卽是密印、若體得老僧所示、心地豁然、密印豈在別人邊、密說顯證、皆只於刹那頃、纔生心動念、卽沒交涉也。

示心道者

有祖以來、直指此一段大因緣、政爲透脫生死、須是上根利智、超言詮出情域、不以世緣彼我高低强弱衰榮爲意、徑於自己根腳下、了了悟取本來清淨寂照虛凝、輝騰今古、迥絕知見、底本分事、便翛然獨立、萬象不能藏覆、千聖無以擬倫、等閑蕩蕩地、一物不思、一物不爲、自然無欲無依、超諸三昧、更說甚建立門戶差別作爲、直下坐斷壁立千仞、凡亦不拘、聖亦不管、方是了事衲僧、身心如枯木朽株、寒灰死火、乃眞休歇也、所以從上來只貴忘懷獨得、旣得之後不立我見、不自貢高、任運縱橫如癡似兀、始稱無爲無事道人、行履設使三五十年、亦不變、亦不異、至於千生萬劫、亦只如如、所謂長久最難得人也、若一往恁麼、信得及透得徹、不憂不能度世、跳煩惱生死坑、唯在當人諸根猛利、超毗盧越祖、代亦不爲難、此眞大解脫門也。

達磨祖師初來、少林九年面壁冷坐、深雪之中、得箇可祖、洎勘證所得、只禮三拜、依位而立、此豈涉許多言詮耶、要須直下領取、透頂透底、纖芥無違、現成撲不破、萬機莫能到、然後於無住本中、流出一切、融通無滯、百千作爲、皆我妙用、處處與人抽釘拔楔、令各安穩去、豈不省要哉。

玄沙一日、見人捧屍過、指而示衆、四個死漢、捧一箇活漢、若隨情見、卻是玄沙自相顚倒、若以向上正眼離見超情、乃知玄沙爲人、極是親切、是故透脫須出他陰界、不見古德道、白雲淡淨

水注滄溟、萬法本閑而人自鬧、果是眞實諦當、聊聞舉著、便知落處、可以透脫生死、不在陰界中、窒礙、如鳥出籠、自由自在、自餘一切機用言句、只一截便休、更不落第二見也。

示照道人　尼

釋門奇特徑截、超證速與般若相應、無出禪宗、此乃如來最上乘淸淨禪也、自靈山拈花、金色頭陁微笑、迦文付授涅槃妙心正法眼藏、敎外別行、單傳心印、歷代四七、至達磨西來、直指人心、見性成佛、無論凡聖久近、但根器相投、一念透脫、更不假三僧祇劫、便證本來圓成淨妙調御、是故游泳此宗、資大法器、從初立志跂步、便要超卓、所謂立地成佛、遲時斂念便證無生、不立前後際、不從他得、惟是自己分上猛利操修、如斬一綟絲、一斬一切斬、性靈暫脫、前念是凡、後念是聖、擬不擬凡聖一如、含吐十虛、更無方所求、嘉道爭似、無爲實相門、一超直入如來地。法華會上、龍女獻一珠、卽成正覺、豈非轉念便證妙果耶、蓋此法天地不能覆載、虛空不可包容、蘊在一切含靈根腳、爲一切依倚、長時淨倮倮、無處不周、但爲情識所拘、聞見所隔、妄認緣影爲心、四大爲身、不能證得此正體、所以諸聖以非願力指出、示人令一切群生有根器者、回光返照、單拈獨證去、只如龍女所獻之寶、卽今在甚處、若纔擧著、便和座子承當得、終不向語言中作解會、心機意想裏作窠窟、便與靈山無垢世界無二無別也、從上來唯貴最初一念最初一句、念未生聲未發、直下截斷、千聖靈機萬靈印契、一時劃破、可不是脫灑自由得大自在要妙處耶、龐居士問馬大師、不與萬法爲侶、是什麼人、馬師云、待汝一口吸盡西江水、卽向汝道、此箇公案、多有涉唇吻商量、作機境解會、殊不稟宗猷也、要須是箇生鐵鑄就底方能運流超證、乃解翻卻二老鐵船、始到壁立萬仞處、方知無許多事。

示倫上人

一切有心天地懸隔、酌然如今透關不得、只爲心多執重、若脫然摒當、到無心之地、一切妄染情習俱盡、知見解礙都銷、更有甚事、是故南泉云、平常心是道、然纔起念待要平常、早乖差了也、此最爲微細難湊處、沒量大人到箇裏踟躕、何況學地、直須抵死謾生咬嚼、教斷、直似大死底人絕氣息、然後甦醒始知、廓同大虛、方到腳蹋實地、深證此事、明得徹信得及、等閑蕩蕩地、百不知百不會、纔至築著便轉轆轆、更無拘制、亦無方所、要用便用、要行卽行、更有甚得失是非、通上徹下一時收攝、此無心境界、豈是容易履踐湊泊、要須是箇人始得、若未如此、當須放下身心、教冥然地無一毫許依倚、覷來覷去、日久歲深、自然蓋天蓋地觸處現成、未有天生釋迦自然彌勒阿那箇、在娘肚裏便會、直應快著精彩時不待人、驀然一咬咬斷也、不柰儞何、大丈夫須到自得自由自在處始得。

示正上人

參請固欲利根乘機便領、初無凝滯、亦須深信純熟取効長久、向衣單下作工夫、所謂休去歇去、唇上醭生去、如古廟香爐去、蓋此乃透脫生死、超凡情越彼岸、尤宜大忘人間雜務、辨利聰明未出世間、只增虛妄、祖師西來唱此一段、要人直下徹證了卻無始無明住地、令淨盡無遺、明證本地風光、明見本來面目、雖千聖萬聖出來、不移易絲毫許、謂之直指人心見性成佛、豈可只隨言逐句、作機境事路布、圖廣知見待欲勝人而取名利哉、固非此理、旣是有志之士、一

等蹋破草鞋、須究箇徹頭處、只如僧問雲門、如何是諸佛出身處、對云、東山水上行、他豈不是徹了恁麼道、一葉落合知秋、更待言句上生言句、知解上作知解、爭得徹去、若體得雲門此意、古今言句一時穿過、但辨肯心與麼靠將去、甕裏豈曾走鼈、是故古德云、靈利漢聊聞舉著、剔起便行。

示性然居士

道山性與道合、喜恬靜、不尙藻飾、宿蘊深信、尤慕玄學、每宴寂通宵、徹夕冥默內照、瑩徹如冰壺玉鑑、表裏洞然、而蔬食長齋、究向上宗乘、徧參知識、一以誠至、探窮有年歲矣、始則循見歷語句合頭窠窟、八穴七穿、游歷築底、其志愈確、驀地脫去、直徹佛祖心性淵源、深入理妙、踐履說宗二通、融攝涅槃生死、到身心一如、勝淨之地、機智增明、頓轉自樂、久之、猶不自已、圖就諸方達道上上大機、碎佛見法見、大用明了、上頭關棙、展拓烹煅鑪鞴、擺撥玄妙、擇擗廉纖、提持殺活綱宗、超脫聖賢關域、正到辯邪正識休咎、知進退、別機宜、誠實之地、恰欲整安閑之事、游虛寂之境、徑直湊無爲無事、羅籠不住、呼喚不回、超毗盧越釋迦、莊嚴清淨、自在大解脫之域、適以世緣暫時挽綴渠、處之亦翛然、有志之士、以無量阿僧祇爲頃刻、當亦綽然、遂本源爾乘涼相過、遇紙筆作此。

示慧空知客

諸佛出世祖師西來、鞠其旨歸、斷無他事、唯以同體大悲無緣等慈、揭示此段大因緣、圖利根上智越格超宗、直下領略、所謂教外別行、單傳心印、是故於十萬衆前拈花、只有迦葉特證、不覺微笑、由是釋尊付授、而達磨游梁、歷魏尋人、在少林面壁久之、獨得二祖深信、立雪斷臂、一言之下安心、遂傳衣鉢、此豈小事哉、蓋從上來皆聖賢應世、主勝根强、龍象蹴蹋、源旣淵深、流不短淺、自四七二三之後、間世英靈相繼、傑出、如思讓馬師石頭、寰中獨步、德山燕疏鈔、臨濟燒禪板、藥嚇天皇百丈黃檗、及五家宗主、各立門風、如布縵天網、垂萬里鉤、莫不透頂透底、有過千萬人、作略出沒卷舒、擒縱照用權實、豈只守一途一轍一知一見、存窠臼、立知解、死水裏浸殺、以實法繫綴人、所以徧寰海、列刹相望、數百年綱宗不墜、的的相承、源源相繼、非單見淺聞、皮膚幽陋所能負擔、要是蘊卓識奇姿、跂步越佛祖器量、蓋天蓋地初出窠來、迥然殊絕、先了卻自己根腳、靠本色咬豬狗手段、大達宗師、向順違境界、透脫辨粉骨碎身志見、圖大不圖細、圖遠不圖近、於千艱萬苦至難至險、如銀山鐵壁處、放身捨命、撒手那邊、承當此大事因緣、絕情離見、歇卻狂機業識、闢大解脫門、了卻自己生死大事、酬初發之志、視六根・四大・五蘊・十二處・十八界・七大性、如虛空狂花亂起亂滅、唯全稟承不思議、乃祖乃佛所證廓徹靈明、廣大虛寂金剛正體、深根寧極、餉間擧一毛一塵一機一句、靡不從根本中發、雖謂之大機大用、早是胡亂名摸了也、更向甚處著心著性著玄著妙著理著事、到箇裏如紅爐上一點雪、聞禪與道、削迹吞聲、猶未是極致、況其餘光影色聲、山河大地、露柱燈籠、眼見耳聞、擔枷抱鎖、豈不見、德山入門便棒、臨濟入門便喝、睦州現成公案、子細看來、渠已是入泥入水、老婆心切、所以道、若一向擧揚宗教、法堂上須草深一丈、自餘方便門、軒知是不得已抑而爲之、是皆從上來大善知識、垂慈運悲、作異世標榜、使有志之士、窮到撲不破處、八面玲瓏、匪唯自利、亦以利人、傳

無盡燈、續佛惠命、自唐歷五季、以至國初、負重望、據祖位、龍馳虎驟、奔南走北、與人拔楔抽釘、解黏去縛者何限、近世不道無人、求全材獨脫、奮本分鉗鎚、啓作家鑪韛、誠不可多得、蓋緣師因循淺陋、資又無深根固蔕、只圖易曉、便如膠漆、使祖宗無上道妙、高遠大機、或幾乎絕矣、尙賴後昆有拔類離倫底、與古爲儔、不顧是非得喪、彼我取捨、以鐵石心辨不可卷不可移之志、攻苦食淡、不怕艱難、向前體究、可以繼芳躅、續往世高風、爲人間明燭、作昏衢日月、此私心常所渴望者也、今既憤悱、圖起發、切在盡始盡終、擇海上具殺人不眨眼手段、宗師、圖取徹去、則豈唯酬自己超方本心、抑亦於佛法大海、出一隻手、剔此門絕人我、離愛憎、只貴正知正見、安在乎論誰家之子哉、等是曹溪門下、何有彼宗此派於其間也、

示張直殿

契證佛祖道妙、最宜上智利根、忘懷體究、不墮機境、直下拔萃超群、虛心領略、直得圓明廣照、透地通天、徹生死根源、出葛藤路布、胷中灑落、一念不生、前後際斷、一句當陽脫去、解會諦實、取證了無疑惑、如昔則老問青林、如何是佛、對云、丙丁童子來求火、渠便入語言作道理、便謂、丙丁是火、更來求火、如我是佛、更去問佛、及至法眼究窮撥正、他卽大不信、及翻然投誠、法眼亦只如前云云、渠大悟、蓋當風證驗、始解回光、更不作惡知惡解、當下如暗得燈、如貧獲寶、此豈小事哉、誠實諦信、千萬億劫、長得受用、是故道本無言、因言顯道、若得此道、斷不在言句上、後番纔有言句、知得底裏、便七縱八橫、顚來倒去、腳蹋實地、廼不隨語生解、遂能自在、出沒予奪、莫不窮源極本、從上大達之士、無不經此場地、琢磨煆煉、方堪行持、但熟處放教生、生處弄

命、熟悠久得大機大用、見一切萬變千化、皆卽識得破、信得及、把得住、作得主、還甚放光動地、千百萬億佛來也、不消箇了字、嚴頭云、卻物爲上、逐物爲下、若論戰也、箇箇力在轉處、唯向上轉、不落下風、便是急著眼處也、擬議不來、便換卻眼睛也、正宜快斷割取、久之純熟、與摩詰龐老無以異、

示胡尙書悟性勸善文

人人腳跟下本有此段大光明、虛徹靈通、謂之本地風光、生佛未具、圓融無際、在自己方寸中、爲四大五蘊之主、初無汚染、本性凝寂、但爲妄想倏起、翳障之、束於六根六塵、爲根塵相對、黏膩執著、取一切境界、生一切妄念、汩沒生死塵勞、不得解脫、是故諸佛祖師、悟此眞源、洞達根本、憫諸沉淪、起大悲心、出興于世、正爲此耳、達磨西來、教外別行、亦爲此耳、只貴大根利智回光返照、於一念不生處、明悟此心、況此心能生一切世出世間法、長時印定、方寸孤迥迥、活鱍鱍、纔生心動念、卽昧卻此本明也、如今要直截易透、但放教身心空勞勞地、虛而靈、寂而照、內忘己見、外絕纖塵、內外洞然、唯一眞實、眼耳鼻舌身意色聲香味觸法、皆依他建立、他能透脫超越得、如許萬緣、而如許萬緣、初無定相、唯仗此光轉變、苟信得此一片田地、及則一了一切了、一明一切明、便能隨所作爲、皆是透頂透底、大解脫金剛正體也、要須先悟了此心、然後修一切善、豈不見、白樂天問鳥窠、如何是道、窠云、諸惡莫作、衆善奉行、白云、三歲孩兒也道得、窠云、三歲孩兒雖道得、八十老翁行不得、故應探過正要修行、如目足相資、若能不作諸惡、精修衆善、只持五戒十善之人、亦可以不淪墜、何況先悟、妙明眞心、堅固正體、然後隨力修行、作諸

善行、令一切人、不迷因果、知地獄天堂之因、皆自本心作成、當平持此心、無我人無愛憎、無取舍無得失、漸漸長養、三十二十年、逢順逆境界、得不退轉、到生死之際、自然翛然、無諸怖畏、所謂理須頓悟、事要漸修、多見學佛之儔、唯以世智辨聰、於佛祖言教中、逞掠奇妙語句、以資譚柄、逞能逞解、此非正見也、應當棄舍、冥心靜坐、忘緣體究、逗到徹底玲瓏、於自家無價無盡寶藏中、運出、何有不眞實者哉、卻須先悟了本來、明見卽心卽佛正體、離諸妄緣、脩然澄淨、然後奉行一切衆善、起大悲饒益、有情隨所作爲、皆是平等無我無著妙智、顯發通徹本體、善行、豈不妙哉、所以道、但辨肯心、必不相賺、以悟爲則、莫嫌遲晚、珍重。

示張宣機學士

從上大達之士、單提密傳、此最上獨脫一著子、極爲省要、唯務利根上智、機應相投、直下領略、幾時有如許般次向上向下、理性玄妙、正偏主賓、語言作用、纔生解會、卽被羈勒、更無自由分、是故本分作家、終不上人釣鉤、落人圈圍、唯自洞明照了、曾次不留毫髮、超然孤高、不與萬法爲侶、不與千聖同鄙、脫白露淨、湛然虛凝、至於涉緣應機、如飛劍輪、如聚猛火、安可近傍、語默有無、動靜彼我、一併截斷、是故道、末後一句、始到牢關、把斷要津、不通凡聖、不得已謂之一句、謂之正位、謂之頂門、謂之金剛王、纔得此意、歷落通透、情塵意想、見解勝智、自然銷融、時中寬廣、獲大自在、以此修身行己、以此定國安邦、澤及生民、位望轉隆、心術愈正、而能不居其功、不有其德、萬世一時、萬年一念、十方猶目擊造化、握掌中、只是箇轉物回天易地、納須彌於芥、中擲大千於方外、豈難爲哉、旣已深諦、更資淘煉、使轉有力量、而不勞神、泰然大定、豈止窮此生盡未來際、罔不資此、遇同道同證、不舉而知、不言而契、捨此置而勿論可也、傳曰、如來有密語、迦葉不覆藏、獨迦葉能不覆藏、廼所以爲密爾、

示同龕居士傳申之

學士大夫相見、多論理性、差近根本、卽廣知見、該涉玄妙、通天人之際、會同三敎爲通儒、以之著述、欲垂名異世、頗顧踐履、立節退聽、修賢業有至膚淺、要涉獵以資談柄、尙口好勝、用伏同列、增長我見、皆非正因、雖賢於拍盲不知信向、任自己單見淺聞、而生毀訾、昧果迷因、墮入流俗者、然比之眞實、虛心潔己、刻苦退步、忘懷契證、腳蹋實地、透根塵絕伎倆、與古爲儔、如維摩大士、給孤長者之流、克證道果、超世出世、只如唐朝裴相國、陸亘大夫、陳操尙書、王敬常侍、于襄陽、李習之、鄭愚韋宙、莫不悉心體究、盡平生得受用、我宗尤洞明出沒窮深極奧、楊大年內翰、李駙馬都尉、便可與龐居士並驅、蓋具大力量、在仕路不捨宰官、游方之外、提佛祖巴鼻、鉗鎚世人、操同事攝、向鷺鷥行中、出作方面、與大宗師爲內外護、豈非夙昔承靈山記莂、發百劫千生、煉磨願行、而闡如是機緣耶、近世佛法雖澆漓、而衣冠貴胄、深信者極夥、殊有古風、要是前三流中相半、儻有志乎此段、須攀上上大機、勿作中下體度、則超凡出塵、得大解脫、爲不難、唯是專一久長、逢境界惡緣、直截撥斷、所謂假使鐵輪頂上旋、定慧圓明終不失。

李渤拾遺出守九江、與拭眼歸宗相値、一面投契、一日驀問、敎中道芥子納須彌、豈有是理耶、歸宗云、人傳公爲李萬卷、是不、對曰、然、宗云、觀公身不滿三尺、萬卷書甚處著、李卽領旨、此豈可與著相執情、守見者論量哉、要是因指見月、忘筌罤得魚兎者、根器乃可、以不守方便窠窟

爾直一舉便知落處、然後穎脫、到七通八達之地、顯大受用矣。

韓文公問大顚、愈公務事繁、佛法省要處、請師一言、顚只據坐、公罔然、是時三平侍立、卽撫禪床一下云、侍郎和尙道、先以定動、後以智拔、文公大喜曰、禪師佛法峭峻、愈卻於侍者處有箇入處、利根種性一撥便轉、看他師資、互作方便、向不可名不可言處發揮、非韓公俊快、安能領略、所謂揮斤者敏手、亦須受斤者有不動之質、然後二俱入妙、不然則成一場漏逗、爾觀此、那假日日入室、朝朝咨參、是故昔人隔江招扇、渠便橫趨而領、今恁麼形紙墨、廼知而故犯也。

示黃聲叔

相逢不拈出、擧意便知、有子細點檢已是涉水拖泥、況其餘周遮、則通人分上、宜乎峭絕、豈容紛拏、蓋此箇獨許灑灑落落、雖電卷星馳、未免蹉過、只恁麼擧覺、過犯彌天如未相逢、未擧意時、直下領略、存乎其人、不可更敎形文彩作知解去也、珍重珍重。

示曾待制

僧問趙州、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、天下參問、以爲模範、作異解者極多、唯直透不依倚、不作知見、便能痛領、縱有毫髮見刺、則黑漫漫地、豈不見法眼擧、問覺鐵觜、趙州有箇庭前柏樹子話、是不、覺云、和尙莫謗先師、先師無此語、但恁麼體究、便是古人直截處也。

嚴陽尊者問趙州、一物不將來時如何、州云、放下著、者云、一物不將來、未審放下箇什麼、州云、看、儞放不下、嚴陽遂大悟、後來南禪師有頌云、一物不將來、兩肩擔不起、言下忽知非、心中無限喜、毒惡既忘懷、蛇虎爲知己、寥寥千百年、淸風猶未已、但試自頻擧、一物不將來時如何、州云、放下著、驀然、便省也不難、僧問雲門、不起一念、還有過也無、門云、須彌山、此又直截省要也、無事虛心靜慮、且下鈍工夫、只管擧看、久之當自有入處。

示呂學士

初祖達磨、到梁見武帝、合下只用箇頂額上一著子、而武帝不薦、使人到今扼腕、後來多少人、汨泥汨水、去它腳迹、尋卜度作百千異解、要且不曾夢見、只是機緣上生機緣、見解上起見解、所以道、劍去遠矣、爾方刻舟、當時能截斷箇胡漢、則不到帶累人處、所謂知恩方解報恩、且作麼生截得它斷。

寄蜀守蘇仲虎

大法本平常、在利根精敏寬通不作聰明、了之爲易、入、每患、知見太多、遂汨此源、轉窮轉遠、莫能透徹、若一切平心、心亦了不可得、泯然自盡、則本性圓明混成、不假造作、截流深證、無過與不及處、乃造天眞機要、所謂著手心頭便判是也、日用之間、常令成現、豈不泰定哉、古人悟心、悟此心也、發機、發此機也、自可萬世不移、只守閑閑地、超然獨得、更無對待、若有對待、則成兩立、便有彼我得失、莫能腳蹋實地、更進一步、一法不立、然後怙妥明見本來人、去卻胷中物、喪卻目前機、脫體安穩、永離退轉、得無所畏方便、可以拯濟群靈、政須長久、相續無間乃善、

佛果圜悟眞覺禪師心要卷上終

佛果圜悟眞覺禪師心要卷下

示黃太尉鈐轄

此道幽邃、極於天地未形、生佛未分、湛然凝寂爲萬化之本、初非有無、不落塵緣、煒煒燁燁莫測涯際、無眞可眞、無妙可妙、超然居意象之表、無物可以比倫、是故至人、獨證穎脫、泯然淨盡、徹此淵源、以方便力直下單提、接最上機、不立階級、所以謂之宗乘教外別行、以一印印定、遂撥轉關捩、不容擬議、至於拈花微笑、投針擧拂、植杖抵几、瞬目揚眉、悉出窠窟、理道語言路布、如擊石火、似閃電光、瞥然迅急、萬變千化、曾無依倚、透頂透底、截斷籠羅、只許後流、不論懵底、正要具殺人不眨眼氣槩、一了一切了、一明一切明、然後特達絕死出生、超凡入聖、蘊遠見高識、居常不露鋒鋩、等閑突出、則驚群動衆、蓋深根固蔕、覷破威音王已前空劫那畔、與卽今日用無異無別、旣能行持有力、堪任重致、遠得大自在、促三祇爲一念、衍七日作一劫、猶是小小作用、況擲大千於方外、納須彌於芥中、乃家常茶飯爾、昔裴相國得旨於黃檗、楊大年受印於廣慧、維摩手搏妙喜界、龐老一口吸西江、豈難事哉、唯直領此大因緣而已、旣有此道之基本、時中能不聽人處分、略操勇猛、向應酬指呼之際著眼、運快機利智、轉一切萬有、回自己掌握、舒卷縱擒、則與上來大達抱道蘊德、踐履純熟之士、豈有異耶、但使源源相續無間斷、便是長生路上快活人也、祖師云、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂、纔於轉變處得幽深之旨、向流動時徹見本性、超出二邊、不居中道、安可更存違順憂喜愛憎、令聖凝自受用哉、以心傳心、以性印性、如水入水、似金博金、樂易平常無爲無事、遇境逢緣、不消一箭、德山行棒、臨濟用喝、雲門睦州風旋電轉、何遠之有、唯不徇情轉、蓋色騎聲、超今越古、向百草頭頭、快行劍刃上事、所以道、撥開向上一竅、千聖齊立下風、鳥窠吹布毛、俱胝一指頭、趙州三喫茶、禾山四打鼓、雲門須彌山、洞山麻三斤、鎔瓶盤釵釧爲一金、攪酥酪醍醐爲一味、不出至微至奧無上道妙矣、嚴陽尊者問趙州、一物不將來時如何、州云、放下著、復徵、旣一物不將來、教某放下箇什麼、州云、看爾放不下、渠卽大悟、豈不是靈利解言下返照、直截透徹、忘懷絕念、大解脫根源、躡著本地風光、契合本來面目、以此一句證卻、則千句萬句、根塵俱謝、默契心宗、便非他物、後來便伏毒蛇、降猛虎、顯不可思議靈驗、豈不爲殊特哉。

送雷公達教授

靈山釋迦文、百萬億賢聖會集、龍象如林、皆超群越衆大器大根、可以迎風投契、隔嶽隔海領畧、豈止聞一知十、擧毛塵、徹見至微至隱底蘊、宜乎、未明、先見不遺毫髮、及至拈花、獨金色頭陁微笑、黃面老廼開懷展手、了不覆藏、便道、吾有正法眼涅槃心、分付之、令善護持、厥後果的傳二十八世、雅當開證初祖、到今流通、眞規不墜、是時文殊・普賢・彌勒・金剛藏・觀世音、悉拱默聽之、何也、嘗鞠其至趣、蓋當授受之際、豈不愼許可、而然哉、雖以眼照、以聖繼聖、羽翰步驟、體裁莫不絕去蹊徑、唯單提獨用向上一著子、寔千聖不傳之妙、萬靈景仰之宗、出格越情、絕凡脫聖、渾天焯地、渾古騰今、是故歷二千年、渾如目擊、只阿難詢由來、謂、金襴之外、別示何法、

迦葉遽呼、待渠應諾、卽云、倒卻門前刹竿、著此與向來拈花微笑、何所異同、則綿綿聯聯初無二致、傳燈錄寶林傳所載、靡不如水入水、似金博金、所以達磨唱云、直指人心、敎外別行、故不忝爾、溈山云、此宗難得其妙、切須子細用心、可中頓悟、正因便是出塵堦漸、著破布百衲、頭攔鬐、腳跟蹌、稠人中看之、不直半分文、慕地打徹、翻卻無量生業識種子、向百不知百不會處、信口道、信手拈、不知有底、如鴨聽雷、只貶得眼、後來槌頭便領千群萬衆、若固有之、往往大有道宗師、比比皆是、至如居貴勢作卿相、如裴相國、陳操尙書、白樂天、王常侍、本朝楊大年、文公、李都尉、駙馬、驚群敵聖、信徹見透、受用無盡、率皆稟奇謀異見、不蹈襲世間、而圖出世間津梁、如此、山僧所稟寡昧、偶憤發欲攀躋先哲所造詣、殊無過人作略、但操守久之、以微有信、因不善晦、出而爲人、蹉跎四十餘載、每遇傑出英才、必傾倒羅列、隨所向任機緣、專一唯在箇中、撥轉一句一言、透頂透底、明千聖頂上得大自在解脫力用而已、果能有濟度盡六地群靈、擧而置之安樂無爲無事穩密之地、則與迦文金色下、至六代祖、唐宋大達將相、豈有異耶、源深流長、根牢蔕固、不妄許與、廼爲眞實諦當、英靈豪俊、解脫大士也。

巨濟了然朝奉

根腳下各具此段、惟宿植深厚之士、於世諦緣輕、有力量能自擺撥、長時退步、孤運獨照、潔淸三業、端坐參究妙省明脫、向自己分上、離見絕情、壁立萬仞、放舍無始劫來、深習惡覺、摧碎我山、枯竭愛見、直下承當、千聖莫能移易、萬象不可覆藏、輝天焯地、乃佛乃祖直指妙嚴淸淨本有金剛正體、向百匝千重、不能辨別處著得眼、八縱七橫了無分割處、下得及機出物先、言超意表、灑灑落落、湛湛澄澄、轉變自由、力用活脫、於從上來克證上流、同得同用無異無別、等閑地只守靜默、初不露鋒鋩、似箇癡兀人、隨緣放曠、飢餐渴飲、與常時無以異、所謂不驚群動衆、密密顯用、發大機、久之、到純熟安閑穩實之地、更有甚閑東破西、煩惱生死可拘束得、是故古之有道宿德、令人既脫根塵、當弘密印、三十二年做冷寂寂地工夫、纔有纖毫知見解路、隨卽掃摒、亦不留掃摒之迹、撒手那邊、全身放下、硬糾糾地、得大快活、唯恐知有如是作略、知則禍事也、始是眞實踐履也、不見、王老師、趙州、洞山、投子、皆贊重無心境界、實欲後學也與麼去、若呈機關語言辯慧知解、正是染汚心田、卒未能可以入流、靈山拈花、少林面壁、多少人穿鑿不依本分、殊不知、將口頭聲色、捫摸作用、大似刺腦入膠盆、若是俊流、他應不爾、已能探討、必意其遠者大者、到結交頭驗諦實、所以得底人、雪鼻涕、亦無工夫、且道、他向甚處行履、將知、敎外單傳、不是造次承當、望空摶邈、一一透頂透底、蓋天蓋地、如師子兒游戲自在、軒豁時直是軒豁、綿密處直是綿密、雖只是一段腳跟、到究竟須自著精采、乃爲實頭受用。

示張仲友宣敎

要探賾此箇大因緣、惟利根上智、終較省力、然須用作一段緊要事、常時靜卻己見、使胷中脫然回光、覩捕內外虛寂湛然、凝照到一念不生處、徹透淵源、豁然自得、體若虛空、莫窮邊量、亘古亘今、萬象籠羅不住、凡聖拘礙不得、淨倮倮赤灑灑、謂之本來面目本地風光、一得求得、盡未來際、更有甚生死可爲滯礙、至於小小得失是非榮枯寂亂、直下截斷、把得住作得主、長養將去、一心不生、萬法無咎、只是切忌、起見作承當、便落彼我、必生愛憎、不能脫灑也、此箇無心

境界、無念眞宗、要猛利人方能著實、祖師西來只是直指人心、令人見性成佛、既明信入此心、信得及、萬緣放下常令智次空勞勞地、此長養聖胎、入眞正修行也。

若確實未有箇諦當處時中逢境遇緣、卽紛紛擾擾易得隨一切物轉、長墮在生死纏縛中、應須快著精彩、但念無常以生死爲大事、向逐日日用之中、行時行時看取、坐時坐時看取、著衣時著衣時看取、喫飯時喫飯時看取、直下腳跟有箇發明處、深信此大事因緣從空劫那邊、以至父母未生前、合下圓明朗照、只如卽今日用之中、又何曾虧欠、一處透得、千處百處無遺、所謂處處眞處處眞、塵塵盡是本來人、眞實說時聲不現、正體堂堂沒卻身、則一塵纔擧、大地全收、遍法界都盧是箇自己、更向何處著眼耳鼻舌身意、軒知、無二無別、如水入水、如金博金、眞如如實際大解脫也。

昔于朗相公裴休相國、本朝楊億、內翰李遵、明大尉、皆稟利根種智長、與方外老宿辨心參究、悉有契證、不失爲賢達、蓋根性非於一世薰炙也、于公見紫玉、問佛、紫玉呼、渠應諾、玉云、只這是裴公、問黃檗高僧、檗云、更莫別求、楊大年參透廣慧老、有頌云、八角磨盤空裏走、金毛師子喚作狗、擬欲翻身北斗藏、應須合掌南辰後、李都尉見石門大悟、有頌、學道須是鐵漢、著手心頭便拌、直趣無上菩提、一切是非莫管、四公所謂豈有異耶、但發明心地、直透本根、既爾諦實、隨所作用、無別道理也。

五祖老師常問、過去心不可得、見在心不可得、未來心不可得、三心既不可得、畢竟心在什麼處、山僧常時示參衆龐居士問馬大師、不與萬法爲侶底、是什麼人、馬師云、待汝一口吸盡西江水、卽向汝道、若體究得畢竟心落處、卽領略得一口吸盡西江水、纔生異見、起一念疑心、卽沒交涉也、要須放下諸緣雜知雜解、令淨盡、到無計較處、驀爾得入、卽打開自己庫藏、運出自己家財也。

示德文居士

樸實頭腳跟著、地修行淨意、是大便宜、所謂說得一丈、不如行取一尺、然見性悟理、情念俱損、智次廓然、離一切相融徹虛通、然後透頂透底、物我一如、生與死齊、佛與衆生等、至於動靜語默、觸處逢原、擧一毫一塵、靡不該收、然後日用之中如踞地師子、誰敢當前、乃一相一行得徧行三昧、根機旣脫一出無心、纔有纖微、悉皆截斷、方是向上人行履、所以古老貴參玄之士、先悟妙心、行無修之修、證無證之證、不用向外馳求、只自回光便了、不見古人投機隔江招扇、倒卻刹竿、竪指吹毛、見桃花聞擊竹、皆是契證處、佛法豈有許多、來正要絕伎倆、當陽便承當、卽是安樂修證之地也。

示興祖居士

脫虛妄纏縛、破生死窠窟、第一要根器猛利、軒豁、次辨長久不退之心、俾力量洪深、境界魔緣撓括不動、而以佛祖大法印定本心、此心乃眞淨明妙、卓然獨存、虛空世界有成壞、此段初無改移、直下專一操存探究、令透頂透底、物我一如、徹下通上、只箇金剛正體、了了無毫髮遺漏、瑩徹玲瓏、萬年一念、初縱末全抵死、擺撥日近日親、絲來線去、養得純熟、向二六時一切境中、著著有出塵之意、出身之路、持清淨戒、而無執戒之念、浩浩修行、而不存功用、一往不留蹤跡、

自然與古來得道之士同儔是故耆宿論悟入修證得坐披衣向後自看正要人作無間道中工夫也況生死事大多少人臘月三十日腳忙手亂大率在平時安穩一往龐浮隨塵緣輕了逗到時節到來臨渴掘井豈做得辦也人生一世不早回頭百劫千生等閑蹉過今既知有此段只在堅固向前損諸知見撥棄妄緣長教胷中灑灑落落無一塵事或妄想起急須撥置令翛然無住本性常明明亦不取凜凜如吹毛劍誰敢當鋒一切語言道斷心行處滅要行即行要住即住聖亦不收凡亦不屬豈不是了事凡夫耶所以從上來人誨示訓導唯務無心非無眞心但無一切淨穢依倚分別知解執著之心耳此發心學道悟入修行方便次第也。

示超然居士　趙提刑

曹山辭悟本問向甚處去云不變異處去復徹云不變異豈有去也答云去亦不變異自非躡著實處安能透徹如此豈以語言機思所可測量哉蓋履踐深極到無滲漏之致然後羅籠不住學道之士立志外形骸一死生混古今絕去來要須攀上流造詣至眞諦實淵奧閫域打辦自己拔白露淨無絲毫意想墮在塵緣直下心如枯木朽株如大死人無些氣息心心無知念念無住千聖出來移換不得乃可以向枯木上生花發大機起大用興慈運悲乃無功之功無作之作豈落得失是非哉纔留一毫毛則抵捂於生死界自己未能度安可度人維摩大士不住金粟位入酒肆婬坊作大解脫佛事。

示魏學士

覿面相呈即時分付了也若是利根一言契證已早郎當何況形紙墨涉言詮作路布轉更懸遠然此段大緣人人具足但向己求勿從它覓蓋自己心無相虛閑靜密鎭長印定六根四大光吞群象若心境雙寂雙忘絕知見離解會直下透徹即是佛心此外更無一法是故祖師西來只言直指人心教外別行單傳正印不立文字語句要人當下休歇去苦生心動念認物認見弄精魂著窠窟即沒交涉也石霜道休去歇去直教唇皮上醭生去一條白練去一念萬年去冷湫湫地去古廟裏香爐去但信此語依而行之放教身心如土木如石塊到不覺不知不變動處靠教絕氣息絕籠羅一念不生驀地歡喜如暗得燈如貧得寶四大五蘊輕安似去重擔身心豁然明白照了諸相猶如空花了不可得此本來面目現本地風光露一道清虛便是自己放身舍命安閑無爲快樂之地千經萬論只說此前聖後聖作用方便妙門只指此如將鑰匙開寶藏鎖門既得開觸目遇緣萬別千差無非是自己本分合有底珍奇信手拈來皆可受用謂之一得永得盡未來際於無得而得得亦非得乃眞得也若不如是便落有證有得相似般若中卻不究竟也既豁然達得此根本分明然後起力作用正好修行二六時中孜孜履踐不取一法不捨一法當處圓融處處是三昧塵塵是祖師而不留勝解之心專行無人無我平等一相大道奉戒持齋精修三業令純淨無染滴水滴凍乃至六度萬行一一圓通發大機啓大用展轉令一切人信此參此悟此須行解相應愼勿作撥無因果濟濟蕩蕩魔邪見解纔作此即謗般若卻招惡報去所以佛祖垂教謂之淸淨明誨當須依此正因然後當證妙果所有一生力量正要透脫死生若一念圓證念念修行以無修而修無作而作煉磨將去於一切境不執不著不被善惡業緣縛得大解脫到百年後豁然獨脫前程明朗劫劫生生不迷自己

便是千了百當、此皆顯不落言詮玄妙機境之致、應當冥心體究、俾透徹塵勞、證清淨妙果。

示嘉仲賢良

全心卽佛、全佛卽人、人佛無異、始爲道矣、此諦實之言也、但心眞則人佛俱眞、是故祖師惟直指人心、俾見性成佛、然此心雖人人具足、從無始來、清淨無染、初不取著、寂照凝然、了無能所、十成圓陁陁地、只緣不守自性、妄動一念、遂起無邊知見、漂流諸有、根腳下恒常佩此本光、未嘗暖昧、而於根塵枉受纏縛、若能蘊宿根、遇諸佛祖師直截指示處、便倒底脫卻膩脂裹襖、赤條條淨倮倮、直下承當、不從外來、不從內出、當下廓然明證此性、更說甚人佛心、如紅爐上著一點雪、何處更有如許多忉怛也、是故此宗、不立文字語句、惟許最上乘根器如飄風疾雷電激星飛、脫體契證、截生死流、破無明殼、了無疑惑、直下頓明、二六時中轉一切事緣、皆成無上妙智、豈假脈喧求靜、棄彼取此、一眞一切眞、一了一切了、總萬有於心源、握權機於方外、而應物現形、無法不圓、何有於我哉、要須先定自己落著、立處既硬糾糾地、自然風行草偃、所以王老師十八上便解作活計、香林四十年、乃成一片、塵勞之儔、爲如來種、只在當人善自看風使帆、念念相續、心心不住、向此長生路上行履、卽與佛祖同德同體同作同證、況百里之政、併在手頭、安民利物、卽是自安、萬化同此一機、千差並此一照、盡剎塵法界、可以融通、何況人佛無異耶。

示方清老

老達磨來自竺乾、豈嘗持一物、及游梁歷魏、面壁少林、無人識渠、獨可祖効勤、立雪斷臂、始略垂慈、由此卽心、若謂無言、從何而入、如謂有言、向伊道甚、將知、須是箇人、始十分領略、乃無滲漏、所以入此門來、要是根器猛利、能疾速棄捨從前知見解路、使智次空勞勞、不留毫髮、洞照虛凝、言思路絕、直契本源、泯然無際、自得本有無得妙致、方號信及見徹、猶有無量無邊難測難量大機大用在、儘留些能所墮在緣塵、則卒急未便相應、是故古德勘合直下休去歇去、此段譬如快鷹鷂捎雲突日、迷風背寄掀騰、直截不容擬議、苟或躊躇、乃蹉過也、其爲教外別行、從可知矣、旣有志於是、請放下著、覩體承當、一切成現、則初祖不曾來、自己亦無得。

示李宜父

此道最徑要不出一言、而此言非佛口所宣、非諸祖所道、若謂卽心非心卽佛非佛、則刻舟守株、了無交涉、若嘿識此言、豈墮唇吻、趂塊之流、遂妄卜度、以爲瞬揚擧動、未夢見在、殊不知、從上來體裁步驟、且不是作聰明立知見、論權實照用、境界抑不得已、遂按下雲頭、棒喝交馳、星飛電擊、俊底聊聞卽知落處、且畢竟是那一言、莫是柏樹子、須彌山、露親晴、普錯、俱見知麼、莫是擔板漢、勘破了、喫茶去、珍重、敢保老兄未徹在、歇去參堂去麼、並是依草附木精魅、有底道、是也祖師以佛語心爲宗、無門爲法門、便是錯認定盤星也、直須待桶底子脫、如睡夢覺、大徹大悟、然後可以承當此言也。

示韓通判

透脫要旨唯在歇心、此心知見生卽轉遠、直下歇到無心之地、虛閑寂靜、雖萬變千轉、非外非中、了不相干、自然騰騰任運照應、無方便可以使得十二時、用得一切法、根本廓然不形、彼我

愛憎得失去來、所謂任運猶如癡兀人、他家自有通人愛。

示張國太

此段大因緣、乃佛乃祖特行獨唱、接上乘人利根明敏之士、要超情離見、覺機關、活卓卓地透漏、未舉先諳、未言先領、纔有朕兆、一剪剪斷、直下不明他事、終不向意根下尋思、要須打辨精神、當陽承當擔負、如太虛日輪無幽不燭、所以從上古德、到單提處、不容毫髮、編撥將去、使淨倮倮赤灑灑不與萬法爲侶不與千聖同鄙、獨脫超昇自由自在去、是故德山臨濟棒喝交馳、出沒縱擒不在窠臼、至於言語機用、一時坐斷、聖凡路絕、得失情遣、到大休歇場、更喚什麼作生死、曾次等閑、照亦不立、遇緣卽宗、拈得出來、蓋天蓋地、據慈悲方便、落草商量、正要令利根人撥去妄緣惡覺知見、徹空空處、空空亦不存、心如太虛、森羅萬象無不包含印定、頭頭處處得大解脫、乃名了事底人、亦尙未當得向上行履、若論向上行履、千聖密傳處、豈止壁立萬仞、隔千里萬里、盡大地拈來、未有一塵許、謂之大用現前、三十二年長養純熟、便乃契證也。卽心卽佛已是八字打開、非心非佛重向當陽點破、不尋其言、一直便透、方見古人赤心片片、若也踟躕、當面蹉過也。

不與萬法爲侶底、是什麼人、待爾一口吸盡西江水、卽向爾道、多少徑截省要、何不便與麼承當、更入它語言中、則永不透脫、多見學者只麼卜度下語、要求合頭、此豈是透生死見解、要透生死、除非心地開通、此箇公案乃是開心地鑰匙子也、只要明了言外領旨、始到無疑之地。昔修山主要見地藏、自陳、此番來見和尙、經涉許多山川、極是辛苦、地藏指云、許多山川與汝也不惡、渠便桶底子脫去、似此豈假多言、道途之間也須保任始得。

示張子固

大道無方、惟是利根種性一聞千悟、不從外起、不自內得、脫然如湯消冰、初無得喪、蓋此生佛未分已前、廓徹明妙、了無依倚、卓然獨存、但以一念逐緣背此眞體、遂生如許不相應事業、爛地飄流、無暫停息、取境既熟、心源混濁、習以爲常、見聞皆不出聲色、只以迷妄自縛、及至體究大解脫、渺渺茫茫、莫知涯際、識浪滔滔、未嘗暫住、故無由造入、而復有宿昔薰炙片善、喜樂諦信、要求其所、乃是上善、逗到伏膺參叩、卻黑漫漫地無它、只是拋離久、不純熟、乃爾、如今要直截承當、但辨著身心、冥然叩寂、喪卻心機、一如土木、待渠時節到來、翛然自桶底子脫、契此本光、了此湛湛澄澄、不變不動、清淨無爲妙淨明性、固蔕深根、到金剛堅固正體、全身擔荷得行、然後方可萬別千差、悉歸一致、動與靜一如、心與境俱合、則一明一切明、一了一切了、舉箇須彌山、道箇庭前柏樹子、一切機境豈從他發、至於行棒下喝、擎杈輥毬、無不一一印定、生死涅槃猶如昨夢、自然泰定安閑、得休歇處、更疑什麼、要用便用、要道便道、遇飯喫飯、遇茶喫茶、契平常心、不起佛見法見、佛見法見尙乃不起、何況起造業心、發不善意、終不作此態度、撥無因果、由是得坐披衣、調衞降伏、與無心相應、乃是究竟落著之地、永嘉道、但自懷中解垢衣、巖頭道、只守閑閑地、雲居道、處千萬人中、如無一人、相似、曹山道、如經蠱毒之鄉、水也不得沾它一滴、謂之長養聖胎、謂之染汚卽不得、直須放下、卻從前作解、一切淨穢二邊之像、行住坐臥悉心體究、乃自著底力、非從它人所授、乃是從上古德捷徑也。

示元賓

佛祖大因緣、非名字語言知見解路、作聰明、起思惟、所了、要忘懷忘緣、外空諸相、內脫識情、退守清虛安閑、澄徹洞然、超諸方便、直透本來妙心、亙古亙今、湛然不動、萬年一念、一念萬年、永無滲漏、諦當之地、一得永得無有變異、乃謂之直指人心、見性成佛、然此如上所說、尙是理論、以言遣言、以理會理、令人漸有趣向、從前爲入理蹊徑、拖泥涉水、廉纖之論、及至眞實提撕、何有如是周遮、是故靈山拈花、迦葉乃笑、是中豈可容毫髮說底道理、要須透頂透底、盡大千刹海一擧便透、悉知落處、方諳悉從上來所行正令、德山棒、臨濟喝、豈小兒戲耶、若具本分作家手段、不須一箭、所以龐老問石頭馬祖、不與萬法爲侶、是什麼人、石頭掩其口、而馬師道、待儞一口吸盡西江水、卽向儞道、豈二端耶、鞠其至趣、同是入泥入水、安可高下淺深之、到箇裏直須知有、既知有、更須轉去始得、切忌、守死語墮窠窟、纔有一毫芒能所作用、玄妙理性見刺、刺人卒未撥剔得下、作麼生透脫死生、證安樂無爲不動境界、去古人重履踐一門、得坐披衣向後自看是也、切須管帶使得力乃善。

古賢達具大根器、能自證明、又能力行之、喚做作二夫、長時只覷自己起心動念、纔有毫髮、卽及令淨盡、終不用作一種事業、資談柄、期勝於人、而伏人長知見、作能作勝、圖聲名、實頭只爲死生大事、百劫千生、不昧不陷墜、古來大有、不惜眉毛、爲人指出處、雲門覿體全眞、臨際坐斷報化佛頭、德山無事於心、於心無事、則虛而靈、寂而照、巖頭只守閑閑地、一切時中無欲無依、自然超諸三昧、趙州道、我見百千箇漢子、只是覓作佛底、中間覓箇無心道人難得、但熟味其言、休心履踐、它時異日逢境遇緣、乃得力也、要當愼護、勿令滲漏、乃祕訣也。

裴相國見黃檗、言下有契證、更爲發揮傳心祕要、再三叮嚀、無限量慈悲、于迪襄陽參紫玉、一喚便回頭、重爲指黑風飄船見墮羅刹國、方得渙然自古士流肯重此事、廢寢忘餐、直下見諦者不勝數、皆由當人根力智見高明爽快、然後能訪尋決擇、今既與古爲儔、尤宜力行不退、圖深證深入、勿只尙口頭語言、必使心心不觸物、頭頭無處所始得。

此道貴單提獨證、與祖佛向上機契合、高出心源、如擊石火閃電光、不容擬議尋伺、直下便透不落意根情想、以至說理說性、於機境語句中、作窠窟、立解會、遞互傳持說、唯心融地水火風、以虛空爲量、喚作透根塵卞事、只成理論、不出教家三乘五性、權立階梯、返成鈍置、當須了取未有佛祖已前、箇片田地、從甚處來、纔有纖毫、有所得、乃是相似般若、應深辨別、勿墮塵機、到臘月三十日、理地不明、斷割不去、那時慌惶繆亂、悔不可及也、五祖老師常示學徒、須參臨命終時禪、此非小事、設使聰明辯惠、八達七通、纖洪理論、絲來線去、不出識學詮文、正是打骨董、究竟無截斷處、所以從上古德大有道宗師、與利根上智奇特之士、如陸亘大夫、王敬常侍、裴相國、甘贊道人、陳操尙書、崔群李翺、杜鴻漸、龐老李勃子瞻、本朝楊內翰、大年、李附馬諸人、莫不探頤體究、八面玲瓏、有腳蹋實地處、而能作人所難作、行人所難行、爲內外護、於大法海中、津濟帳樣、不虛出南閻浮提一遭、古人旣爾、今豈只守尋常、不以自己死生大事、及洪持道妙爲至要、放令諸塵緣境、牽惹纏縛、名言句數、籠羅、無出格之作、向上眼目大解脫機、爲可惜、大丈夫漢、已能打破面皮、參請、應須通身是眼、照破幻緣、金剛寶劍、截斷愛網、雖在士流、現宰官

身、筆頭上好作方便指揮處、好行祖令、使一切聞見、皆知因果、俱識起倒、便是與古爲儔也。末後一句、始到牢關、把斷要津、不通凡聖、咄、不可只管落草開眼作夢也、須向頂額上施展始得。

示曾少尹

佛祖妙道、唯在各人根本上、實不出本淨妙明無爲無事心矣、雖久存識、未能諦實、蓋無始聰利智性、多作爲、而汨之、但教此心、令虛閑寂靜悠久、湛湛如如、不變不易、必有大安穩快樂之期、所患者、休歇不得、而向外覓作聰明也、殊不知本有之性、如金剛堅固、鎭長只在、未曾斯須間斷、若消歇久、驀地如桶底子脫、自然安樂也、若求善知識、廣要持論、則轉遠矣、惟是猛利根性猛、自割斷猛、自棄捨、當有證入、自知之矣、既知之後、知亦不立、始造眞淨境界、以公道契之外、故强言之、可照之區域之表也。

示蔣待制

此段事、天人群生至於佛祖、皆承威力、但以群靈雖蘊此、而冥昧枉受沈溺、佛祖達此而超證、迷悟雖殊、其不思議一也、是故佛祖開示直指莫不令一切含靈、各各獨了自己本來圓具、清淨妙明眞心、更不留如許塵勞妄想計念知見、直向五蘊身田、回光返照、湛寂如如、廓爾承當、明見此正性、此性卽心、此心卽性、浩浩作爲、應在六根門頭、千變萬化、初不搖動、故號常住本源、若達此本、力用所作無不透徹、須是截流而證、若踟躕動念、則沒交涉也、唯是當人根性素來純靜深沉、爲最易爲力、只略返照一透、便可證入、古人謂此、爲無盡藏、亦名如意珠、亦號金剛寶劍、要深具信根、信此不從他得、行住坐臥、凝神寂照、淨倮倮地無間無斷、自然諸見不生、契此正體、不生不滅、非有非無、無實無虛、離名離相、卽是當人本地風光、本來面目也、古德所以揚眉瞬目、拈槌豎拂、行杖行喝、微言妙句、百千億方便、無不令人向此透脫、一纔透得、便深徹源、棄卻敲門瓦子、了無毫髮當情、三十二年於中履踐、截斷路布葛藤、閑機破境、豁然無心乃安樂之歇場也、所以道、卽今休去便休去、若覓了時無了時。

摩竭掩室、毗耶杜詞、人皆以爲極致、殊未夢見渠腳指頭在、大人大見、大智大用、豈拘格量哉、直是痛的的地、恨不兩手分付、那論淺深得失、彼我現量、紛紜和泥合水耶、且如佛未出世、祖師未來、世界未成、虛空未現、向甚處捫摸、要須喪卻知見、脫去世智辯聰、放下直如枯木朽株相似、驀地體得、到絕氣息處、淡然忘懷、萬年一念、將養保衞、久久純熟、子細返觀、便諳得摩竭淨名來脈也。

趙州臨示寂、封一柄拂子、送與鎭府大王云、此是老僧一生用不盡底、原其高識遠見、豈令人滯於相、執於言、縛於葛藤耶、唯直了證、則活鏇々有出群作略、乃能擔負、如水入水、似金博金也。

襄陽郡將王常侍、參溈山大圓、得旨、一日有僧、從溈山來、常侍問、山頭老漢有何言句、僧云、人問如何是祖師西來意、溈山豎起拂、常侍云、山中如何領解、僧云、山中商較、卽色明心、附物顯理、侍云、會便會、著甚死急、汝速回去、待有書與老師、僧馳書回、溈山拆見、畫一圓相於中、書箇日字、溈山呵呵大笑、云、誰知吾千里外、有箇知音、仰山云、也只未在、溈山云、子又作麼生、仰山

於地上畫一圓相、書箇日字、以腳抹之而去、看他得底人步驟趣向、豈守窠窟、則箇裏若善觀其變、則能原其心、既能原其心、則有自由分、既有自由分、則不隨他去也、既不隨他去、何往而不自得哉、每接士大夫、多言塵事縈絆、未暇及此、待稍撥剔了、然後存心體究、此雖誠實之言、然一往久在塵事中、只以塵勞爲務、頭出頭沒、爛骨堆地熟了、只喚作塵事、更待撥卻塵緣、方可趣入、其所謂終日行、而未嘗行、終日用而未嘗用、豈是塵勞之外、別有此一段大因緣耶、殊不知大寶聚上、放大寶光、輝天焯地、不自省悟、承當更去外求、轉益辛勤、豈爲至要、若具大根器、不必看古人言句公案、但只從朝起、正卻念、靜卻心、凡所指呼作爲、一番作爲一番、再更提起審詳看、從何處起、是箇甚物作爲、得如許多、當塵緣中一透一切諸緣塵、不皆是何待撥剔、卽此便可超宗越格、於三界火宅之中、便化成清淨無爲清涼大道場也、法華云、佛子住此地、卽是佛受用經行、及坐臥常在於其中。

示寧禪人

死生之變亦大矣、衲僧家坐斷報化佛頭、不立纖毫知見、直下透脫、要萬年一念、一念萬年、死死生生、生生死死、打成一片、不見毫末起滅輪轉、所以道、任是千聖出頭來、終是向渠影中現、試問、渠正體作何形段、須知空劫已前、由他建立、至於窮華藏浮幢王刹盡未來際、亦因他成就、若是上根利智、脫卻無始劫來、虛妄染汚、聖凡情量、向腳根下猛省、直透棄捨一切依倚、聞見覺知、色聲味觸、如紅爐上著點雪、灑然淨盡、無量珍寶、於中運出、無邊勝相、於中顯現、亦於本心、初無彼我是非勝負欣厭、便與本來無二無別、更喚甚作生死、喚甚作小大、冥然寄寂得大安穩、始知從來不曾喪失、亦不缺少、豈不見、石頭問藥山、汝在此作什麼、山云、一物不爲、頭云、恁麼卽閑坐去也、山云、閑坐卽爲也、頭云、汝道不爲、不爲箇什麼、山云、千聖亦不識、石頭乃有頌、從來共住不知名、任運相將只麼行、自古上賢尤不識、造次凡流豈可明、看渠師資踐履趣向如此、可不是本分事耶、既闖參問、宜乎追慕使古風不墜、乃自己行腳事辦也。

示勝上人

大道體寬無易無難、小見狐疑、轉急轉遲、若達大道體寬、廓然同太虛空、放懷曠蕩、觸處皆眞、不拘限量、有何難易、信手拈來、蓋天蓋地、含育十虛、而不作相、若纔作毫毛知見解礙、則墮知見、究徹不及、返生狐疑、所以此道唯務大根利器直下承當、脫然惺悟便休、更不作限量知見、萬別千差、一劍截斷、等閑不立勝負、惟務退藏、似兀如癡、孤運獨照、融通溶合、密密綿綿、佛眼亦覷不見、況乎魔外、長養成就、自然有入心入髓之功、便於根塵違順死生、亦咬得斷、終不疑著、此乃無心無爲無事大解脫境界、既然闖欲預此勝流、當須切切孜孜、放下身心、體究一句、一機一境上發明悟入、無量無數作用公案一時穿透、纔拈得來、更不放過、便與截斷豈不快哉。

示琛上人

僧問趙州、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、不妨省力、如今參問之士、性識昏昧、只管去語言上咬、至了不柰何、下梢無合殺、遂滿肚懷疑、多作異見異解、蹉卻本分事、殊不知、不在言語上、又不在事物邊、如擊石火閃電光、略露風規、纔擬承當、早落二三也、若要直截應須退步

就己歇卻狂心、使知見解礙、都盧淨盡、時節緣熟、瞥然明證、亦不爲難、似恁說話、早葛藤了也、且作死馬醫會、當有趣入處、但一則公案上、透頂透底、信得及到無疑之地、餉間千種萬端、改頭換面、長句短句、多句少句、有句無句、一時透脫、豈有兩種也、所謂直指人心、見性成佛、一得永得、據自寶藏、運自家財、受用、豈有窮極也、不見德山在龍潭、吹紙燭、豁然瞥地、便道、從今日去、不疑天下老和尚舌頭也、後來住山、打風打雨、不妨性操、但恁麼參、但恁麼證、恁麼用、辦取肯心、必不相賺。

示英上人

道妙至簡至易、誠哉此言、未達其源者、以謂至淵至奧、在空劫已前、混沌未分天地未成立、杳冥恍惚、不可窮不可究不可詰、唯聖人能證能知、是故誠其言、不識其歸趣、安可以語此事哉、殊不知、人人根腳下圓成、只日用之中、淨倮倮地、被一切機、徧一切處、無幽不燭、無時不用、但以背馳既久、强生枝節、不肯自信、一向外覓、所以轉覓轉遠、是故達磨西來、唯言直指人心、而已、此心卽平常無事之心、天機自張、無拘無執、靡住靡著、與天地齊德、日月合明、鬼神同吉凶、無容立毫髮見刺、唯蕩然大通、契合無心無爲無事、若立纖芥能所彼我、卽隔礙永不通透、所謂無明實性卽佛性、幻化空身卽法身、若能無明殼子裏證得實性、餉間無明全體一時發揮、幻化空身窠窟中見法身、餉間空身全體都盧瑩徹、第恐於無明空身中作爲立見、則沒交涉也、既透此正體、無明空身無別發明、則一切萬有、大地山河、明暗色空、四聖六凡、皆非外物、眞實諦當、則二六時中、大方無外、何處不爲自己放下身心處、豈不見古者道、塵勞之儔、爲如來種、觀身實相、觀佛亦然、然後世法佛法打成一片、等閑喫飯著衣、卽是大機大用、則行棒行喝、百千作爲機境、豈更疑著、若達此、自腳跟下至簡至易道妙、無量法門一時開現、透脫生死成勝妙果、豈有難哉。

示圓上人

古來有志之士、旣聞頂相、卽超方訪道、誠不以一身、使虛來閻浮提、打一遭、所以刻意息心擇眞正具頂門宗眼知識、放下複子、靠取成辨、觀其跋步、眞龍象也、今旣蘊趣向大因緣之志、要當盡形壽、專一堅確、忘餐廢寢、不憚辛勤、効勞忍苦、若體究之攸久、自有信入處耳、況此一段因緣、自己分上元本圓成、未嘗缺闕、與佛祖無殊、但以起知作見、强生節目、情執虛僞、不能直下實證、若宿植根性敏利、一念不生、頓超二十五有、圓證自己本有如如妙性、更不生毫髮許能所彼我、廓然大達、聖凡平等、彼我如如、是佛更不覓佛、於心初不求心、佛心無二、所至現成、二六時中更不落虛僞、便乃腳蹋實地、打開自己庫藏、運出自己家財、隨所發機悉超宗格、透得眞實活潑潑地、雖遇德山臨濟雲門玄沙施難測難量妙機、不消一箭、所謂多虛、不如少實、但令最初發心猛利、不移、相續到徹頭處、不憂自己道業不辨、大丈夫兒須了卻向上大機大用、安穩快樂始是泊頭時、切勿少了、切宜久遠業業兢兢、自然得豈不解脫去。

示照禪人

石霜三十年、一張弓兩隻箭、只射得半箇人、爲甚不全去、蓋是中豈可容如此、何故不見道、向上一路千聖不傳、若體得不傳之意、則盡底裏、直言此事、無儞用心機處、無儞湊泊存坐處、是

故從上來唯是特唱直指要人格外玄悟不拖泥水不墮塵緣所以道他上流聊聞舉著剔起便行萬機收他不著千聖籠羅他不住要如是參究證入要如是提撥舉唱豈論情底箇箇須眼似流星殺人不眨眼始得相應若踟躕凝佇則蹉卻千萬了也有此一至寶之地乃可以建立萬差儘眞實到恁處終不揑恠作相畫樣起摸只守閑閑尙不可得至於立己透脫爲物解黏去縛無不皆是踞地時節臨濟道山僧見處也要諸人共知直下坐斷報化佛頭據此垂示既坐報化佛向上更有箇甚豈是世間麁想所度要須打摑從前妄想計較執着情塵勝劣見解明辨性理終非本分一刀截卻直得脫然自得如毫末許盡十方界塵無不包攝全作用是佛祖全佛祖是作用一棒一喝一句一機並無窠窟一切以實證印之如靈藥點鐵成金無不皆從我轉既久參問多作知見解路只益多聞終非實事須一歇一切歇一了一切了見此本來面目達此本地風光然後作爲一切成現不假心力如風偃草雖山林城市亦無二種喚作把得住作得主權衡含生命脈在自手中隨心意作何判斷便謂之無用道豈非至要至妙安穩大解脫哉。

示鑑上人

祖師門下本分提綱一句截流萬機寢削已是涉廉纖了也何況言上生言機上生機窮考許多一堆擔葛藤汙卻心田有甚了期此事若在言句機境上盡被聰明解會浮根虛識者如學事業一般違將去了也豈更論發悟見性耶釋迦佛一周出現無窮奇特勝妙尙只道曲爲時緣至末梢始密付此印達磨老師少林九年冷坐獨有可祖承當得故謂之教外別行單傳心印只如此印且如何傳莫是揚眉瞬目麼莫是舉拂敲床麼莫是總無言說只以行住動用麼莫是總不與麼便承當麼莫是向上向下面前背後別有奇特麼莫是道理論性深入淵源麼似此正如掉棒打月有甚交涉將知非世間麁浮淺識所料要須如龍象蹴蹋直拔超昇大徹大證始得一等參請須教透去莫只守住窠窟不唯自賺亦乃累人所以從上來作家宗師仰重此一段不輕分付不輕印可不見永嘉道粉骨碎身未足酬一句了然超百億。

祕魔平生只持一木杈見人便道甚魔魅教儞出家甚魔魅教儞行腳道得也杈下死道不得也杈下死原其一場豈是虛設蓋入草求人爾若是知有底豈有多端縱涉紛紜即千里萬里此宗省要唯是休意休心直令如枯木朽株冷湫湫地根塵不偶動靜絕對根腳下空勞勞無安排存坐它處脫然虛凝所謂人無心合道道無心合人至於應物隨緣不生異見只據現定一機一境悉是坐斷更說甚麼棒喝照用權實一擬便透唯我能知更無餘事長時如此履踐何憂本分事不辨耶。

示祖上人

如祖上人自德山來久以此段爲務見蔣山佛果何曾有兩種佛法若擔帶來是納敗闕不擔帶來須知轉身處始得如今時衲子到處叢林有宗匠莫不咨參然求一實證到本分田地得大休大歇安穩之場實難其人大丈夫兒已能是拋鄉離井在本分尊宿身邊又能効勤戮力作種種緣皆非分外亦足以不昧行腳然至諦實要須知有從上來事且從上來列祖相承至

於德山臨濟行棒行喝作千萬種方便至竟要人何爲應須似香象渡河截流而過了無疑礙。尙未稱從上來事道人家相逢不拈出棒打石人頭不可向卷子上指東畫西去也只此已是漏逗了也歸德山舉似堂頭看它如何爲爾證據。

示宴禪人

歸宗有僧來別宗云爾但去束裝臨行來爲汝說一上佛法其僧如言及至再上方丈歸宗云時寒塗中善爲歸宗滿許渠說佛法其僧虛心欲聞所未聞而歸宗乃爾須知它古德於此事綿密無間若喚作佛法早是中毒藥也晏師來別不欲蹈古人腳迹也亦未免從頭起

示從大師　住药州黃檗山

衲僧家具眼行腳須知有本宗向上鉗鎚透頂透底淨倮倮不立階梯直截超昇無纖毫隔礙大解脫金剛王印向萬機盤錯千聖交羅百億端緒撥不開處遂令受用使著著有出身之要頭頭脫絕塵之迹使通身是眼底徧界羅籠不住底把斷放行不漏毫髮底龍馳虎驟電轉風旋底摸索不著等閑蕩蕩地似兀如癡豈更做會禪面背到處釘鬬機關詮注語句貼肉著骨論量向上向下有事無事埋沒宗風所以道他得底人只守閑閑地且道他得箇甚道理若有針鋒許有無得失我見我解則刺卻命根須知如猛火聚近之則燎卻面門如金剛劍擬之則喪身失命列祖出興只提持箇一段壁立萬仞既具大根器不受人瞞直下脫卻向來依倚明暗兩岐放得下信得及活鱍鱍無窠臼廓然及得淨盡承當擔荷得從上來佛祖共證底於脫透生死破塵破的豈爲難事乃可謂之眞正本分衲子既有志於是宜悉圖之。

示祖禪人

世尊拈花迦葉微笑二祖禮拜達磨傳心豈有他哉箭鋒相拄也當其神契理御非言思所測唯知有向上宗風者證之雖千萬億載猶且莫也是故乃佛乃祖求之初不草草要是純剛打就利根上智然後提其要擊其節如膠投漆舉一明三阿轆轆地無窠窟絕滲漏底始可首肯更應淘汰煉到盤錯交加人所不能窮詰辨別處綽綽然有餘當受用時浸淫露手段有超宗越格不傍師旨獨出智襟壁立千仞驚群敵勝方堪付授法既不輕道亦尊嚴所謂源深流長也從上古德動盡平生或三二十載靠箇入處期徹頭徹尾去志既有立用心堅確是以成就得來擲地金聲大丈夫兒攀上景仰不得不然彼既能爾我豈不能耶況透脫死生窮未來際一得永得當深固根本根本既固枝葉不得不鬱茂但於一切時令常在勿使走作湛湛澄澄吞爍群象四大六根皆家具爾況知見語言解會耶一時到底放下到至實平常大安穩處了無纖芥可得只恁隨處輕安眞無心道人也保任此無心究竟佛亦不存喚甚作衆生菩提亦不立喚甚作煩惱翛然永脫應時納祐遇飯喫飯遇茶喫茶縱處闤闠如山林初無二種見假使致之蓮華座上亦不生忻抑之九泉之下亦不起厭隨處建立又是贏得邊事何有於我哉大迦葉云法法本來法無法無非法何於一法中有法有不法。

古人得旨之後多深藏不欲人知恐生事也抑不得已被人捉出亦不牢讓蓋無心矣至於垂慈示方便亦只隨家豐儉如俱胝一指打地唯打地祕魔擎杈無業莫妄想降魔舞笏初不拘格轍勝負見務人各知歸休歇不起見刺向鬼窟裏弄精魂卓卓可嚀到脫體安穩之地乃妙

旨也。

靈利漢、腳跟須知點地、背梁要硬似鐵、游人間世、幻視萬緣、把住作主不徇人情、截斷人我脫去知解、直下以見性成佛直指妙心爲階梯、及至作用應緣、不落窠臼、辨一片長久守寂淡身心、於塵勞透脫去、乃善之又善者也。

示諸上人

道本無言、法本無生、以無言言顯不生法、更無第二頭、纔擬追捕、已蹉過也、是故祖師西來、特唱此事、只貴言外體取機外薦取、自非上上機器、何能驀爾便承當得、然有志於是者、豈計程限、要須立處孤危、辨得一刀兩段猛利身心、放下複子、靠著箇似咬猪狗惡手段底、盡情將從前學解路布、黏皮貼肉知見、一倒打疊卻、使智次空勞勞地、己私不露、一物不爲、便能徹底契證、與從上來不移易毫髮許、直得如此、更知有向上超師作略、始得、所以古者問佛向上答非、佛又答方便呼爲佛、則見性成佛、乃筌罤爾、是中云何指東畫西、直須密契自能將護、方得灑灑落落、更說甚證涅槃契生死、皆增語也、雖然只小僧恁麼道、也未可取爲極則、始免佛病祖病、大丈夫漢、圖心要參、豈可立限劑耶、但辨卻深信、一往向前、未有不腳蹋實地者、日新日新、日日新、日損日損、日日損、退步到底便是也、至了是亦不立、此正是作工夫處。

示楊州僧正淨慧大師

箇事唯憑作者、通不論千里、自同風聞名十載、今相遇、拈起金圈栗棘蓬、維楊前僧正淨慧大師宗公、得得渡江、由鍾阜迂訪、標誠、爲自己大因緣、專請小參、因說此偈塞其誠意、蓋淨慧生平修持甚清潔、其宿福緣所集、如佛在世時、須菩提室中寶藏充溢、根性敏明、殊無繫著、了得失皆儻來物耳、操心唯務究此一段、相見雖遲爾、而堅確深至、矻矻孜孜、因副所期、爲發其蘊、祖師諸佛單傳顯示、不出人人腳跟下本有之性、唯聖凡器界、根塵正體、歷劫以來、曾未間斷、但以各人人妄想緣塵翳障、若發起本根大力量、勇猛操持、一念不生、前後際斷、直下明信、此心明見此體、寬若大虛、明如杲日、不分能所、不作限量、透頂透底、直下徹證、便透得、卽心卽佛、無別有心是佛、無別有佛、淨倮倮虛妙明通、全無依倚、如人打開無盡寶藏、其中所有無不皆是自己珍財、日用之中徧界不藏、併入無念無心休歇境界、所謂一句了然超百億、餉間千般萬種、千句萬句、豈更差別耶、如今要省力、但知息卻妄緣、疑情淨盡處、便是自己透生死處、只此便是金圈栗棘、應須直下領取。

示覺禪人

佛祖宗乘、唯務直截、如香象渡河勢、須徹底、若稍踟躕、則千里萬里、沒交涉、是故從上古德、行棒行喝、機境處參、如擊石火閃電光、略露風規、已是拖泥帶水、落草了也、豈更論量淺深得失、偏圓事理解會、明知是土上加泥、所以俊流佩最上乘印、似千日並照無幽、不燭纔見入門、未舉目搖唇、已先覷透、心肝五臟、蓋本分手段、初無造作、只貴快自承當、剔起便行、可以籠罩古今、十方坐斷、萬世千劫、不移易絲毫許、儻未能如是、頓超、亦須先自擺脫根塵妄緣、以至淨妙、殊勝理道、待空豁豁地、如桶脫底、胷次蕩然、疑情盡去、勝解俱忘、自然根本洞明、與從上來同得同證、曾無間隔、乃是入理之門、悟中之則、終不向髑髏前見神、見鬼認影、認光、墮在窠窟求。

出處不得、只如古人道、卽心卽佛、又道、非心非佛、又道、不是心不是佛不是物、又道、麻三斤、又道、鋸解秤鎚、萬別千差、若直下領略、豈有二致、所以一了一切了、一明一切明、只這明了、也須斬作三段始得、方入無事無爲履踐諦當處耳。

示自禪人

初發心人、性識勇猛、忘餐廢寢、專誠堅確爲可喜、況春秋鼎盛、不戀鄉井溫煥、依清高雅衆、體究此一段大因緣、是誠宿有大根器、然更宜日愼一日、業業兢兢直下脫灑、滴水滴凍、蹈規循矩、既以爲道之心、代衆持盂、不爲不好事業、要須居三家村裏、亦如稠人廣衆、所謂自作一叢林也、袖跳投刺、見人折節恭謹、於日用中當自參取、萬境萬緣、皆爲自己入路、一塵中透脫、徧界皆是大寶藏、發此蘊奧、八萬塵勞皆八萬波羅蜜、轉物歸己、隨處了心、並爲作工夫處、是故古德道、山僧爲汝發機、卻有限、不如他山河大地、一切音聲及自己心念所起、乃文殊普賢觀世音妙門、豈不見寶壽作緣化、於鬧市見二人相爭、傍人解勸、彌得恁無面目、渠便桶底脫去、後來出世打風打雨、但一如初心專一不移、將來自己七通八達、到無疑之地、自可超佛越祖、透脫生死乃餘事耳。

示有禪人

至道無難、唯嫌揀擇、誠哉是言、纔有揀擇、卽生心、心既生、卽彼我愛憎、順違取捨、橛然而作、其趣至道、不亦遠乎、至道之要、唯在息心、心既息則萬緣休罷、廓同太虛、了然無寄、是眞解脫、豈有難哉、是故古德蘊利根種智者、聊聞舉著、剔起便行、快自擔當、更無回互、如大梅卽佛卽心、龍牙洞水逆流、烏窠吹布毛、俱胝豎一指、皆是直截根源、更無依倚、脫卻知見解礙、不拘淨穢二邊、超證無上眞宗、履踐無爲無作、今時學道、既有志性、當宜勉旃、與古爲儔、心期澈到、腳蹋實地處、動用全歸本際、千聖不可籠羅、解會併亡、得失俱脫、乃是無欲無依、眞正自在自由道人也、到此豈更論難之與易哉、則無難無易、亦了不可得也、祇僧家句裏出身、蓋提持向上機、於無句中出句、於無身中現身、言語道斷、心行處絕、等閑蕩蕩地放曠寬閑、纔有機緣、卽蓋天蓋地、所謂密密綿綿、無間無隔、不是强爲、任運如此、是以諸天捧花無路、魔外潛覷不見、直得恁麼行履、自然超諸三昧。

古人以無爲無事爲極致、蓋其心源澄淨、虛融灑落、眞實踐履、到此境界、然亦終不住滯於此、直得如盤走珠、如珠走盤、豈是死煞頓住得底、所以道、雖是死蛇解弄也活。

長慶道、撞著道伴、交肩過一生、參學事畢、酌然若非獨脫、安能知有此段、信知、須是恁麼人、知有恁麼事、僧問曹山、因地而倒、因地而起、如何是倒、山云、背卽是、如何是起、山云、起也明眼人透見、更不別求、只這片田地不妨嶮峻時直嶮峻、平坦時直平坦、立地也不可明得、坐地也不可明得。

古人得意之後、向深巖僻洞茅茨石室、大休大歇、放懷履踐、忘名棄利、與世不相關涉、作自己成辦、然後隨緣不出則已、及至一出、必驚群伏衆、蓋源深流長也、今既未能入深山窮谷、但只依本分、守淡靜、如箇百不知百不會底人、隨處守見、成得安穩、亦乃忘機之本也。

昔曹山別悟本問向甚處去山云不變異處去本云不變異處豈有去耶山云去亦不變異悟本領之蓋其透得綿密無間隔得大安穩無所不通是故機路灑落千人萬人籠羅不住至於發言直截了無凝滯若智次稍有解會隨處執著則豈能句下便恁剪斷善體此意眞不變異雖千生萬劫亦只如如頭緒紛然一一當陽皆無變異豈非得如空際大定耶所以道妙體本來無處所通身那更有縱由則去亦不變異之旨明矣。

釋迦老子道我今爲汝保任此事終不虛也將知徹佛知見淵源無不皆實履踐到實處凡所舉止悉不落虛一一透頂透底過古超今求其形相毫末了不可得極其諦當則喫飯著衣四威儀中全體成現要須保任鄭重如獲至寶將護長養使得大力量以之度世利物靡所不堪方爲佛子不辜釋迦老子苦口謂之知恩報恩也。

示本禪人

常獨行常獨步達者同游涅槃路此蓋不與萬法爲侶之大旨也況自己本有根腳生育聖凡含吐十虛無一法不承他力無一事不從他出豈有外物爲障爲隔但恐自信不及便把不住去若洞明透脫只一心不生何處更有如許多所以道靈光獨耀迥脫根塵要須直下承當從本以來自有底活卓卓妙體然後於一切時一切處無不逢渠無不融攝喫飯著衣凡百作爲世出世間皆非外得既達此矣只守平常不生諸見說什麼一口吸盡西江水設使百千諸佛無量祖師顯現無邊恠異神變不消一箇但恁麼信及見徹行腳事豈不辨耶。

示達禪人

大道正體不在混沌未分及杳冥恍惚處亦不是故作深邃隱蔽令人不可窮不可測量蓋至明非明至妙非妙直下簡易若是宿根純靜聊聞舉著便知落處更不向外馳求向根腳下千了百當全體現成乃至觸境遇緣悉皆透頂透底坐得斷把得住作得主終不取他人舌頭路布及古今言教機境公案將爲極則是故從上作家唯只提持此段要人自承當擔荷豈曾更立階梯地位漸次如之若彼來今時兄弟不道他全不用心要是不得省力具大根大器大機大用一聞千悟徹骨徹髓痛領將去纔一蹉卻毫髮便入解會理路言詮意識根塵中去所以脫他藥網不出未免漠漠懷疑便更下鈍工十年五載終莫能果決尋常每勸兄弟須奮猛利心棄卻從前學路得失窠臼似向萬仞懸崖撒手拌捨性命從他氣息一點也無如大死底人餉開甦醒起來謾懶不得也卻爲已到腳蹋實地處寬若太虛明如杲日更不消造化一切自圓成二六時中與千聖交參俱爲殊勝奇特脫灑信口開信腳行更疑箇甚豈不見古宿指人道由悟達法離見聞若也眞的悟去更憂甚佛不解語切須向日用中不起異見放教胸中灑灑落落打辨精神自覷見久之須有信入處若只守閑閉眉合眼要參露柱燈籠也須知有佛種性底終不向死水裏折倒但辨肯心必不相賺。

菩提離言說從來無得人具摩醯正眼靈利衲子聊聞舉著即便覷透終不作限量墮在解脫深坑中有般底容有路布即謂離言說眞言說無得人乃實證之人當面蹉卻被葛藤纏倒終不明得從上來事是故此宗雖務冥契密付既作諸佛苗裔應須紹續門風明全提正印深機脫生死塵勞惡作執縛永嘉乃云大丈夫秉慧劍般若鋒兮金剛燄豈容擬議於其間哉。

生死爲大事眞透脫去不以爲大何故以無怖畏諦了實證如如不動視萬有起滅中外根株洞然明白始末齊平初無得喪而常執此大明普照若揭日月而行如師子王游戲自在促百千劫爲一念衍一念爲百千劫須彌納芥子中大千鄉方外皆我心常分何有淨穢去來爲罣礙生死得喪爲繫累哉古德云生也猶如著衫死也還同脫袴不以生死爲大變可知矣

示印禪人

參問之要當人不論曉夕以爲事長令念茲在茲自覩捕蕩然絕情識忘思量一旦桶底子脫心上更不具心佛上豈假作佛得大休歇場虛閑寂靜無相無爲無執無住祖師言教更不明別事所謂了得身心本性空斯人與佛何殊別但自體究終有箇入處卻來證據乃是了事人也子細看之

初機晚學乍爾要參無捫摸處先德垂慈令看古人公案蓋設法繫住其狂思橫計令沉識慮到專一之地驀然發明心非外得向來公案乃敲門瓦子矣只如龐居士問馬大師不與萬法爲侶底是什麼人馬云待汝一口吸盡西江水卽向汝道但靜默沉審然後舉看攸久之間須知落處去若以語言詮注語言只益多知無緣入得此箇法門解脫境界諦信諦信以悟爲則勿嫌遲晚

挨苦在身宜善攝心不爲外境所搖中心亦不起念常以生死事大無常迅速爲意不可斯須恣縱唯嗔一法於三業爲大過患儻有順違切勿令生常虛己正心觀外來觸如虛舟飄瓦則物我俱寂到不動地爾思之諦思之

示妙覺大師

學道先於擇師既得眞正具頂門眼善知識依其決擇死生大事須猛勇放下身心忘情體究當資悟入發明從本以來獨脫無滯礙本分事日損日日損履踐到無疑至實大休歇之場此所謂具眼參學有勝負存窠臼雖一往超勝不知有不存誠不學道不求出離者然於此宗未得深造猶在半塗亦爲可憫大凡出家離俗要洪聖道度一切人而無度人得道之迹方可超詣向上人行履處且向上人肯自謂會佛法能證妙果越佛超祖不酌然的無是理蓋只覓箇老師只要癡鈍去豈不見渠每每垂示三世諸佛不知有狸奴白牯卻知有直饒得渾脫狸奴白牯去也未合向裏存坐在要須恁麼恁麼更恁麼撒手向那邊去始得夾山道任儞碧潭清似鏡終教明月下來難將知纔及不盡並是影響棒打石人頭曝曝論實事去究竟看著衣喫飯雖不是別人且要脫貼肉汗衫子不得卽留滯也既脫卻貼肉衫子管取是一員無爲無事出塵得度大道之人耶

示仁書記

雪峰爲人如金翅鳥擘海直取龍吞豈唯雪峰從上大有道之士蘊兼利並照老作家手段者莫不皆然蓋不直截不盡力如銀山鐵壁峭拔則鈍置去是故臨濟德山行棒行喝下毒手腳正欲大心大器大根者向上承當應不令人只認目前光影口頭聲色也所以道向上一路千聖不傳若是箇漢聊聞舉著便透徹去終不守他窠臼取他死語也且行棒行喝落在什麼處

若不明得直取龍吞意、則又紛紛紜紜去也、大丈夫漢己靈猶不重、何況取他人路布爲自己胸襟、直須不受人瞞、昂藏特立、截卻從來依倚、擺撥理性玄妙動用作略體本分事、既體得到本分處、只曲肱而枕、亦是箇大快活人、若不了、泯然冥然、迢然悠麼去、纔回頭覷捕、有纖毫疑問、則沒關涉也、豈不見臨濟道、元來黃檗佛法無多子、參。

答怡然道人

宿承光賁小參、以此道爲懷、況利根上智廓然自得、以極清淨本源、而能玲瓏照了、徹透靈覺、不出戶庭、已驗過諸方、而老僧淺陋、乃沐知照、許令擊揚、既同風密契、因不自疎外、於此事盡底裏羅列、一句一言一機一境皆絕唱之深致也、非心性玄妙、語默關涉、葛藤路布、直是透頂透底、蓋色騎聲、坐斷報化佛頭、不落是非得失、唯徹根源清淨正眼、雖思念寂滅、明惠脫去籠羅、超然獨證頂顙上一著、此時豈有纖毫道理、亦不立空劫已前威音已後、到箇裏、諸天捧花無路、外道潛覷不見、淨倮倮赤灑灑、乃本地風光本來面目、直得佛覷不見、謂之向上一路千聖不傳、除非其中人、則一舉便知落處矣。

答黃通判

承別紙、踐履是誠、有意於實諦、不徒資談柄之浮根、尙口語之淺學矣、況此段大緣、人人根本、洞然融通、包括群有、不滅不生、亙今亙古、常在日用之中、而以無始妄習翳障、强作知解、不能獨脫爾、明公今既息心絕力體究、離諸妄緣、了如如性、要見諸相非相、若確然專一、下些攸久工夫、定須有所契證、如佛所謂若見諸相非相、卽見如來、此直諸相當體了不可得、全是自心、及爲非相、則於如如而來如如而去、無二無別、脫體全眞、契妙明眞心、本來淸淨、只自己本來面目是也、固非使人撥諸相爲非相、向外馳求也、然此心本來澄湛、物我一如、境之與心、初無兩種、要心冥境寂、然後有所證入、及至證入之後、證亦非證、入亦非入、翛然通透、如桶底子脫、始契無生無爲、閑閑妙道正體、今作息念澄慮工夫、乃是入道門徑、但辨此心、當有深證爾、古德道、若不安禪息定、到這裏、總須茫然去、逗至透得到徹頭處、玄亦不立、佛祖亦不立、乃向上大機大用、其中人行履處、又且更須知有始得。

此事不在言句中、雲門云、若在言句中、一大藏敎豈是無言、何假祖師西來、將知、祖師之來、唯論直指人心、不立文字語句、但忘懷體究、令澄湛綿密、到一念不生、脫卻向來知解作略、機境計較道理、忘心直證然後於日用之中、以此正印印定、一切諸相則非異相、則築著磕著、無非眞淨明妙、大脫解境界也、然既了此、卻依尋常諸佛諸祖所垂示正因正果、將世間雜染害道諸不善業、脫然打摒、怙怙地修行、念茲在茲、三十二年、枯淡此心、此身卽成就堅固法身也、切恐撥無因果、作豁達空、作無礙見解、此毒刺也、切望體究圓深證耳。

示禪人

大凡截生死流、濟無爲岸、無他奇特、只貴當人根器猛利、揭自胸襟、了一切有爲有漏、如虛空花元無實性、以照了之心、返自觀省、翻覆覷捕、審諦、諦審久之、當有趣入之證、蓋此段並非他物、亦非他人能著力令自己省發、如人負千斤擔子、當由己有如許力量、方能堪可、若氣小力弱、則被他壓倒去也、所以道、大人具大見、大智得大用、大丈夫漢打辨精彩、豈可向山鬼窟子

裹作活計、有甚出徹之期、應須令不可測、不可量、荷負大事、超情離見、卓絕類邁之志、直下透脫、擺撥無始以來、妄想輪廻、彼我得失、是非榮辱、穢濁之心、令淨穢兩邊、都不依怙、翛然獨脫、不依倚一物、向千聖未有消息時、生佛世間出世間、不曾顯露處、一念不生前後際斷、蹋著本地風光、明見本來面目、承當得、直下牢固無毫髮見刺、內外融通、蕩蕩然得大安穩、乃轉身吐氣、於這邊來、自然日用之中、凡百施爲之際、一一朝宗返本、豈是分外事耶、雖喫飯著衣修世間法、無不如如、無不通透、無不與所證正體相應、更論甚高低向背、纔生見刺、卽刺卻命根爾、祖師及古宿德、行棒行喝、作用百千億種、無他志、元只令人自透脫自休歇、如大死人、豈只了自己、度世便休、勉有餘乃不忘悲願、推此以發未悟、居人間世、汎然若不繫之舟、喚作無心道人、今既未能頓了頓明、且放教若身若心、空勞勞地、虛寂既久、驀地打破漆桶、到桶底子脫處、也不難、況自具猛利根性、荷負佛事、作爲殊特奇勝之緣、此豈借別人力耶、是故古者道、學道須是鐵漢、著手心頭便拌。

示詔副寺

昔雪山童子、爲半偈捨全軀、可祖斷臂立雪、沒胯求一句子、老盧八箇月負舂、象骨飯頭擔桶杓、同巖頭事園、欽山補紐、而九上洞山、三到投子、只爲究此段、其餘効勤勞力、臥雪眠霜、攻苦食淡、蓋不可勝數、鞠其趣向、初不爲名聞苟利養、並以死生大事爲懷、紹隆佛祖種草、作務、是故雖理光雪林、聲迹不到人間、往往有終老至死、脫然獨得如鳥出籠、了然明證萬世不移、至如傳記所載、太山毫芒十一、於百千萬、特少分爾、其爲高隱深道、流轉溝壑、長往不顧、豈有涯量哉、是故諸佛垂世、祖師西來大意、全機超情識、越詮表、遙影迹、出聖量、豈細事耶、唯大有志之士、宿薰種勝、根力不群、然後能堪此任、雖頭目髓腦、不自愛惜、況小小艱勤哉、往時大達之士、得旨之後、深關牢藏、起順違方便、故意作害、現怒罵鞭叱、百種千端、要試驗學人、待其經苦楚、不動心、乃與一挨一拶、垂片言纖機、如大飢困人得食、如醍醐甘露灌注、珍重忻快拳拳不失、成就大法器、踐履向上人道徑、猶須爛骨董地熟、始可委付、如讓祖之於曹溪、八年始道得箇說似一物卽不中、稜師至雪嶺、十五載坐破七箇蒲團、靈雲三十年、涌泉四十祀、德山臨濟皆依師門、歲月甚久、蓋此道廼千聖不傳之妙、豈可以輕心慢心而趣入哉、永嘉云、粉骨碎身未足酬、一句了然超百億、霜華諸道者、在大潙執務、一日庫前自篩米、大圓過拾遺一粒米、謂云、道者勿輕此粒、百千粒從此粒生、諸廼返徵、百千粒既從此粒生、和尙且道、這一粒從甚處生、大圓拂袖而去、晚小參、謂衆云、大衆米裏有蟲、趙州到桐城、路逢投子挈一油瓶、遂云、久響投子、只見賣油翁、投子云、公且不識投子、州云、如何是投子、投子提起油瓶云、油油米裏蟲、何似油裏蟲、若參得投子、卽見石霜、何故、豈不見道、衆裏有人、衲僧家第一須得具金剛眼、第二須得金剛寶劍、第三須得拄杖子、第四須得衲僧巴鼻、直饒一一透得、更須知有末後句、始得。

示燈上人

要直截透脫、須先深信自己根腳下有此一段、輝騰今古、迥絕知見、淨倮倮沒依倚、常在目前、無毫髮相、寬同太虛、明逾杲日、天地萬物有成壞、此箇無變無移、古人謂之不與萬法爲侶底人、亦號如來正偏知覺、但諦實承當、使一念不生、徹透本來、元不動搖、長時無間、若行若住、百

種作爲、初不妨礙、歷歷孤明、一機一境、一句一言、皆含法界、稱本眞如、情想計度無起滅處、以此正印一印印定、自然隨方逐圓、悉非二種、他自古明見佛性、得道之士運用作爲、未嘗不在觀塵緣境界、無塵緣可得、鞠歸一眞實際、如此退步、一日之功便抵一劫、是故南泉道、王老師十八上、便會作活計、不是揭搭强爲、蓋任運騰騰寬通自在、天龍鬼神、覓他起心行處不得、此無心人、行履直下深嚴、若能休歇知見解礙、將來便有徹證之分、亦解作活計去、要須揭志勉强、然後無行不圓、於曹溪路上、得無間力用也。

示禪人

利根種智、聊聞舉著、徹底透頂、直下承當、了無別法、撒手便行、豈復更有遲凝、正如秉利劍當門、阿誰敢近、到箇裏凜凜神威、佛祖莫能近傍、吞爍群靈、豈不是得大解脫、更不立向上向下、超然獨證、是故從上人立一機、垂一言、謂之垂鉤四海、只釣獰龍、到箇裏不論如之若何、要箭鋒相拄、一擊便過、纔涉擬議、則千里萬里去也、只如達磨面壁少林、九年唯有可祖默契、如今要立地明得、也不難、但辨撥卻、從前作解種種機智、不立毫末、使智中淨倮倮、聖凡不存、彼我不拘、一念不生、單刀直入、更覓甚佛、高步毗盧頂、不禀釋迦文、破的破機、超宗出格、引頭方外看、誰是我般人、始可作種草、然後向千人萬人羅籠、不住處、不辱一條線、硬糾糾地、壁立千仞、等閑拈一毫芒、便見逼塞十虛、拈示同風同德、而不期自會、不言而知互作主賓、建宗立旨、雖相去遠隔河沙、長如目擊、可透向上機、了生死事、報恩立法、使群靈一一如是、方稱箇大丈夫作奇特緣了、殊勝事、昔裴相之與黃檗、李習之之與藥山、楊大年之與廣慧、李都尉之與慈照、無不以此投機、既已投機、復資此以履踐、外空諸見、內絕心智、徹底平常、騰騰任運、爲內外護、流通大法、所謂要知恁麼事、須是恁麼人、若是恁麼人、始解恁麼事。

示魯叟

佛法如大海、萬有包含、不可以形器數量、所能測度、一一俱無邊際、若欲造入、須辨箇沒量大智見、窮法界、等虛空、盡未來、不退轉、跋步超越、合下如鐵石堅固、然後廓頂門正眼、愼擇眞實具本分作家手段、大宗師、息心依附、將死生大事託、之無透脫超證、不已、第一先得、不落窠窟、而能直截、明見本來面目、躡著本地風光、深根固蔕、信得及了、得徹虛寂靈明、不動不變、爲基址、情念計較俱不生、直得空豁豁地、前後際斷、與諸聖不移易絲毫許、諦了自己、其次展轉退步、一切不留、而能於毛端現剎海、納須彌於芥中、拈起向上機、提持祖佛令、到此正好著力、及去今時玄妙理性、妙句奇言、掀天作略、擺撥盡方始體得那邊意旨、幾時更肯道我會佛法、能活脫逞機用也、若履踐得攸久、分明無事安樂人矣、將知聖賢橫身爲此、臨事不爲立功能逞、我見意在令人人、無疑無爲無事去、今雖富春秋、居貴富、而以夙昔願力、高識遠見、要學此道、潔清身意、不捨世緣、乃修淨行、初段早已眞正也、要辨長久不退之心、縱逢一切違緣處之如食餳蜜、養得純熟、便是大解脫人、佛法與世諦、豈有二種耶、推此直前、何往不利、古人道、千里同風、蓋不言而照、不面而知、豈假繁詞哉、是故毗耶大士一默、文殊贊善、瘡病不假驢馳藥、意在鉤頭、應須領取、向獨行獨步處、靠實考究看、從何而起、自何而來、去縛解黏、不眞何待、無業只說箇莫妄想、俱胝只豎一指、天皇胡餅、趙州喫茶、雪峰輥毬、禾山打鼓渾無別事參。

示禪者

達磨祖師、觀此土有大乘根器、由是自天竺西來傳教外旨、直指人心、不立文字語句、蓋文字語句乃末事、恐執泥之、卽不能超證、所以破執著、去玄妙、離聞見、出意表、如擊石火閃電光、一念不生、直下透卻根塵、向各各根脚下、承當領覽此一段大因緣、翛然獨脫、不依倚一物、含吐十虛、湛然澄寂、契悟本來妙心、此心能生一切世間及出世法、唯宿薰種性、略聞提取、卽知落處、更不從別處流出、全心卽佛、全佛卽人、人佛無二、一道淸虛、豈有得失是非、違順好惡、長短來、有爲有漏如幻如夢、了無一塵長久、是故蘊才智、有力量底、卽能發一念眞正菩提心、不爲諸緣所牽、貴富所拘、動是歷歲月不退不轉、埋頭向前、念茲在茲、回光返照、諦了從上來威音那邊萬緣根本、纔覷得透、卽身心泰然、二六時中更不放舍、直俟徹證、乃能事畢矣、況當人合下性靜純一慈善、無如許惡覺惡知、而復相續綿綿體究、豈不善哉、古人道、百草頭邊薦取、只如從朝至莫、是箇什麼、但念念覷捕、心心無住、攸久純熟、只見光輝、觀一切法、空不曾有實、唯此一心亘古亘今、可以透脫死生、學此道者、不得其門、只爲情在解上觸途成滯、若一切盡情打疊、胸中不存纖微、自然七通八達也、但長時無間消遣、將去淨念聖解尙令不生、何況觸情而動、作衆不善耶、親近善知識、只貴提誘與己作增上緣、世尊記、當來一牛吼、地有善知識、遞相擊勸、相與行持、體此妙道矣、鏡淸云、汝等十二時中、須管帶始得、趙州云、我便得十二時、佛言、若能轉物、卽同如來、旣已久存誠、唯務向前得不退轉、等閑要當、心中不留一物、直下似箇無心底人、如癡兀不生、勝解養來養去、觀生死、甚譬如閑便與趙州南泉德山臨濟同一見也、

示禪人

西方大聖人、出迦維羅、作無邊量妙用、顯發刹塵莫數、難思議殊特正因、以啓迪群靈、其方便順逆開遮、餘言遺典、盈溢寶藏、及至下棺、始露一消息、謂之敎外別行、單傳心印、金色老子已來、的的綿綿、只論直指人心、見性成佛、不立階梯、不生知見、利根上智、向無明窟子裏、警破煩惱根株中活脫、應時超證得大解脫、是故竺乾四七、東土二三、皆龍象蹴踏、師勝資强、機境言句動用語默、有上上乘根器、格外領略、當下業障冰消、直截承荷、於餘時、自能管帶、打作一片、度世絕流、頓契佛地、尙不肯向死水裏浸卻、唱出透玄妙、越佛祖、削去機緣、剗斷路布、如按太阿、凜凜神威、阿誰敢近、作家漢確實論量、纔有向上向下、勝妙理性、作用纖毫、卽叱之、不是從來種草、直下十成、煅煉得熟、踐履得實、始與略放過、猶恐異時落草、負累人、瞎卻正法眼、嗟見一流、拍盲野狐種族、自不曾夢見祖師、卻妄傳達磨以胎息傳人、謂之傳法救迷情、以至引從上最年高宗師、如安國師趙州之類、皆行此氣、及誇初祖隻履普化空棺、皆謂此術有驗、遂至渾身脫去、謂之形神俱妙、而人間厚愛、此者怕臘月三十日、惶惶、競傳歸眞之法、除夜望影喚主人翁、以卜日月、聽樓鼓、驗玉池、覘眼光、以爲脫生死法、眞誑誕閭閻、揑僞造窠、貽高人嗤鄙、復有一種假託初祖胎息說、趙州十二時別歌、龐居士轉河車、頌遞互指授、密傳行持、以圖長年及全身脫去、或希三五百壽、殊不知、此眞妄想愛見、本是善因、不覺墮在荒草、而豪傑俊穎之士、高談大辯、下視祖師者、往往信之、豈知失故步、畫虎成狸、遺有識大達明眼覷破、居常衆切自保任、端居此無生無爲大安樂之地、乃甚善耶、

中惟默觀憫憐、豈釋迦文與列祖體裁、止如是耶、曾不自回照始末、則居然可知矣、海內學此者如稻麻竹葦、其高識遠見、自不因循、恐乍發意未入閫奧、揭志雖專、跂步雖遠、遇增上慢導入此邪見林、末上一錯、永沒回轉、其流浸廣、莫之能遏、因出此顯言、庶有志願於大解脫大摠持、可以辨之、而同入無生大薩婆若海、汎小舟濟接群品、使正直妙道、流於無窮、豈不快哉。

示遠猷奉議

從上徑截一路、直拔超昇、無出直指人心、見性成佛、但此心淵奧、脫去聖凡階級、只貴利根上智於無明具縛窠窟中、不動纖毫、直下頓契廓徹靈明、與有情無情有性無性同體、與大法相應、發起作用、透古超今、騎聲蓋色、虛而靈、寂而照、無量無礙、不思議大解脫、一一七穿八穴、了無回互、便識落著、所以乃佛乃祖、謂之單傳密付、如印印空、如印印泥、如印印水、萬德昭然十方坐斷、獨證獨超、初無依倚、若起見作相、則沒交涉也、今時大有具種性之士、能始末覰破幻緣幻境、猛勇奮志向箇邊來、亦有久存誠探賾者、然患缺方便力、止以知見解會爲明了、殊不知、全坐子但是識心、縱解到佛邊窮、到修證盡頭處、不出指蹤在、是故古來作家宗師、不貴人作解會、唯許人舍知見、胸中不留毫髮許、蕩然同太虛空、攸久養得成熟、此卽是本地風光、本來面目也、到此亘古亘今之地、脫離生死、有甚難耶、如裴相國、龐居士、揉直以信得及、便得力受用自在、塵緣夢境豈從別處生、若脚下諦實、二六時中、更轉一切物而無能相、等閑空勞勞地、不生心動念、隨自天眞、平懷常實、便是從宦游幹幹悉皆照透、承阿誰恩力、旣識得渠、則如下水船相似、略左右照顧、扶持將去、自然速疾於般若相應、此禪流所謂自做工夫、觸處無有、虛棄底時節、綿綿長久、辨不退轉心、不必盡棄世間有漏有爲、然後入無爲無事、當知元非兩種、若懷去取、則打作兩橛也、一切時一切處、唯以此爲實、在力行之、當截斷衆流、得大安樂矣、

示嚴殊二道人

參須實參、見須實見、用須實用、證須實證、若纖毫不實、卽落虛也、此實地乃三世諸佛所證、歷代祖師所傳、惟此一實、謂之腳蹋實地、初則須大悟、若只認門頭戶底、作窠窟說路布、立機境照用、取捨解會、則不徹也、此透生死要徑、到臘月三十日、一千二百斤擔子、須是自有力量荷負、得行方可翛然獨脫、是故無業國師垂示、臨終之際、若一毫凡聖情量未盡、纖毫思慮未忘、便乃輕重五陰去也、古人以生死事大、是以訪道尋師決擇、豈可只學語言、理會古人公案下得三五百轉好語、便當得也、將知聰明黠惠、皆爲障道之本、要須冥然扣寂不怕放教身心如土木瓦礫、蕊然翻卻業根種子、便乃知非、見學佛學法、如中毒藥相似、然後透出佛法、乃體得本分事也、此非小緣、就分是久參之士、尤宜放下不擔著禪道、不輕毀上流、愈透徹愈低細、愈高明愈韜晦、作箇百不知百不會無用處底人、行不動塵、言不驚衆、澹然安閑、常行恭敬、始堪保任、於一切違順境界、心不動搖、志無改易、達磨謂之一相三昧、一行三昧、切宜履踐純熟、以至古今作用機緣、便七達八通、亦不留在胷次、等閑蕩蕩地觸著、便轉捺著便動、拘牽惹絆不得、居千人萬人之中、如無一人相似、不是强爲、任運如此、更須知末後一語、始得參。

示道明

此道至玄妙深邃、是以佛祖不容擬議、要直截承當、超出見聞色聲之表、單契密領、謂之教外

別行、然得之奧、用之徹、脫去理障、烹煅淨盡到極則之地、須遇大達善決擇之士、剔撥猛咬斷綫索、始能無佛無祖、窠窟只平白汎汎地、於日用之間透頂透底、擔荷無一法當情、無一念可得、等閑作爲、向一切境界之中圓融無際、亦無圓可融、亦無融可圓、始行無間道中、游歷絕功動處、喚作平常心不可得、似此腳蹋實地、無落虛底工夫、綿綿密密、便掃田掠地、拈筯把匙、種種作爲、皆入場屋、是故地藏呵僧云、南方說禪浩浩地、便道、爭如我箇裏種田博飯喫、准此而推、忍苦捍勞、繁興大用、雖麁淺中、皆爲至實、惟貴心不易移、一往直前、履踐將去、生死亦不奈我何、何況餘事、永嘉道、上士一決一切了、信矣。

示侍者法榮

學道之人、能矻矻孜孜、以生死之事居懷、晝三夜三、不憚勞苦、事善知識、求一言半語、發藥、雖遭呵斥、種種惡境、而力向前、非自宿昔薰成自然種智、必且猶豫、或則退悔、能於此恬然初無動搖其志願、亦頗難得、然此本有之性、現定見聞知覺、父母緣不可生、境界緣不可奪、若隨向來知解、卽墮業識、若猛擺撥、棄著一邊、只守虛靜、到一念不生之地、掀翻解路、不落機緣、直下了了無毫髮疑間、便截徑承當無第二頭、則玄妙理性尙自脫去、況隨世間事物所轉耶、是故古人卽心卽佛、得大力量、向上上不立佛祖、如紅爐猛燄、處透徹、但把得住作得主、便住山去、此須十年工夫一色專注、便可趣向入也、趙州云、儞向衣單下坐十年、若不會禪、截取老僧頭去、斷定不在言句機境上、只要心休意歇、便徹底安樂耶。

示道人

當人腳跟下一段事、本來圓滿、不曾動搖、威音王佛前、直至如今、廓徹靈明如如平等、只爲起見生心、分別執著、便有情塵煩惱擾攘、若以利根勇猛身心、直下頓休、到一念不生之處、卽是本來面目、所以古人道、一念不生全體現、此體乃金剛不壞正體也、六根纔動、被雲遮、此動乃妄想知見也、多見聰明之人、以妄心了了、放此妄心不下、逗到歇至不動處、不肯自承當本性、便喚作空豁豁地、卻擬棄有著空、是大病、若有心棄一邊著一邊、便是知解、不能徹底見性、此性非有不須棄、此性非空不須著、要當離卻棄著有無、直下怙怙地圓滿虛凝、翛然安穩、便能自信此眞淨妙心、餉間被世緣牽拖、便能覺得、不隨他去、覺則把得住、不覺卽隨他去、直須長時虛閑自做工夫、消遣諸妄、使有箇自家省悟之處、始得、昔人云、不離當處、常湛然覓、卽知君不可見耶。

示仲宣維那

嶺外祖師曹溪乃佛種也、發迹新城、開法番禺、如日照世、如麟鳳呈祥、海內莫不宗仰、厥後揭揚、大巔・三平・龍象、間出拔昌黎見刺、爲世明炬、是知、彼有人焉、蓋絕俗離倫、眞克家種草也、其跂步志業如天之高、那肯碌碌循行逐隊耶、昔興化謂克賓、儞不久爲唱導之師、云、我不入者保社、化徵云、會了不入、不會了不入、賓云、沒交涉、乃行令罰錢出院、多少人墮在常情、不然、作奇特機關、豈知他家通霄正路、只管望風摸要、須是箇中人、方可與曹溪・大顚・三平・興化・克賓、羽毛相似也、且作麼生、是箇中人、鳳凰直入烟霄外、誰怕林間野雀兒。

示中竦知藏

巖頭道、大凡扶宗唱教意、在未扃時一覷便透、縱然理論亦沒痕迹、良哉、眞作家手段也、明眼漢纔入門來、已辨深淺、更待皷兩片皮弄泥團、豈有了期、雪峯問投子、一槌便成時如何、云、不是性燥漢、不假一槌時如何、云、不快漆桶、他古人自有如是風範、要離泥水截葛藤、嚼鐵破的、電卷風旋、乘機當陽劈面快與、乃稱臨濟宗風、亦不辜方來依扣、以言破言、以迹刻迹、不墮死水、達得便行、驅耕牛奪飢食、意在出生死越聖凡、平人我融染淨、承當輝天照、地大解脫、自利利他紹聖種族、不見道、二祖不往西天、達磨不來東土、與人去縛解黏、拔屑抽釘、正在密室中、不將實法繫綴人、從頭與伊槌將去、一人半箇眼目定動堪作種草、若求義路、立解會治擇語句、商較古今、寧可無人掃地、此乃據曲彔床本職事也、時中勤勤垂手繼之不勸、若只管推爛則失腳本宗、辜負先聖、白雲師翁云、未透時一似鐵壁、及至透得、元來鐵壁便是自己、也須作得鐵壁定始得、然後著著有出身之機、始副巖頭點破綱宗、體段也、九尾野狐多戀窟、金毛師子解翻身。

示錢次道學士

人人腳跟、具有此一段大事、佛與衆生無異無別、但佛覺證圓融群靈染惑、遂相懸遠、是故諸聖出興、獨唱此大法、謂之直指人心、見性成佛、特接上機、要利根種性覿面相呈、更不擬議、達得便行、所以靈山立卻胷樣、才拈起花、迦葉便笑、若更論他如之若何、則蹉過也、器量既等、無虛授者、自爾源源到今、得證契悟如恒河沙、只如俱胝見天龍得一指、烏窠吹布毛、侍者大悟、豈有許多路布言詮、返惑亂其眞性、舉要而指、唯是靈利上智、以透脫根塵截斷生死爲意、向日用中、高著眼覷破萬緣、一切勝劣境界、了無一實、惟有本來靈明大解脫、亘古洞今、長時活鱍鱍地、一念契合、得無罣礙、便放下人我知見、世智辯聰、喜慍得失、種種執著、坦然一切平懷、初不妨日逐作用、築著磕著、俱爲本地風光、應物現形、不將不迎、湛然眞寂、逗到臘月三十日、便了當得、所謂把得住、作得主、豈不見老龐長養、臨行謂于頓相公、但願空諸所有、愼勿實諸所無、枕公膝乃行、楊侍郎透徹圓融、立節立朝、下梢啓手足、乃云、漚生與漚滅、二法本來齊、要識眞歸處、趙州東院西、不是向結交頭得力也、大凡存誠向慕、本不希聞見談柄、正欲確然清身潔意、內守虛閑、外廓開見、密運慧刃、剸割情慾、返照回光、如靈雲見桃花、香嚴聞擊竹、以至不是風動、不是幡動、仁者心動、非風鈴鳴、我心鳴耳。

示處謙首座

先德垂機立教、初不等閑、必使萬世仰法爲標準、是故摩竭掩室、少林冷坐、毗耶杜詞、善現宴寂、蓋有爲而爲、如北辰據位、百川潮宗、虎視龍驟、風回雲合、知有者默識其趣、向不做道理、便可直領深入其閫奧、卽體裁步驟、自然沼合、當其初立、似若適會、及已成形聲、則不可掩、卓卓驚世、漸漸日新、至於德嶠縱白木棒、濟北振奮雷喝、俱胝只立一指頭、秘魔擎箇鐵杈子、象骨輥三毬、禾山四打鼓、國師水椀、潙阜牧牛、俱逗逸群絕類作略、而西園燒浴、金牛召飯、天皇餅、趙州茶、極於細微、洞徹淵奧、不負時機、超宗出格、眞麒麟頭角、師子爪牙、異世仰之、不可跂及、逮發一句施一機、尤不可意象名模也、有志之士未發足已蘊此作、驀地超方遇緣、豈局促籠檻、爲循循頻頻之黨哉、所以於不已中、聊發所蘊、追配古人高風、自不凡爾、然遇賞音、卽不徒

然當使垂之竹帛亦無忝也故予心腹而爲表出之

示悟侍者

雲門示衆云和尙子莫妄想山是山水是水僧是僧俗是俗時有僧問學人見山是山見水是水時如何雲門以手面前劃一劃云佛殿爲什麼從箇裏去舊時在衆參見說無事禪底相傳云山是山水是水平實更無如許事撥去玄妙理性免得鑿空聒撓心腸所以雲門慈悲開一線路指示者僧便領覽得出來問雲門便用後面高禪茶糊鶻突伊遂以手劃云佛殿爲什麼從者裏去此迺移換它也所以大凡只說實話是正禪纔指東劃西是換彌眼睛但莫信它但向道我識得個苦哉苦哉頓卻山僧在無事界裏得二年餘然胷中終不分曉後來驀地在白雲桶底子脫方猛覷見這情解死殺一切人生縛人家男女向無事界裏胷中一似黑漆只管長無明業識貪名取利作地獄業自謂我已無事了也細原雲門意豈只如此哉將知醍醐上味遇此翻成毒藥若是眞實到雲門田地安肯如此死殺則其提振處併將佛祖大用大機顯示則以手劃云佛殿爲甚從者裏去千聖應須倒退便是具大解脫知見底也須飲氣呑聲山僧抑不得已聊且露些只知音知耳大凡參學須實究到絕是非離得失去情塵脫知見然後可以入此流矣參

示馮希蒙

厭三界火宅蘊爽邁風度潔清緣業從方外游乃給孤淨名裴公老龐趣向豈非英傑偉特驚群敵聖者哉然此段由威音七佛已前下及窮未來際萬有十虛把斷包攝悉無透漏要一舉便明拈著便了早是鈍置也所以丹霞生知龐老通方目機銖兩勘辨諸禪高步叢林平沈數萬珠金脫卻幞頭一味向無間道中行寧可嚼笊籬赤日裏臥街曾無歉怍及至逢人逆拈倒用莫非蹋上頭關捩作略如今既操此志根性氣度幸自不凡唯務退損精修長久不變不轉乃克全體受用只如剗佛殿前草騎聖僧頂燒木佛一口吸盡西江水不昧本來人皆圓機活脫出沒隱顯唯上流作家識其起倒自餘立亡坐往俱爲餘韻眞所謂三界外人豈火宅所能羅籠也但使銀山長壁立不須入草更求人

示華嚴居士

平常心是道纔趣向卽乖到箇裏正要腳蹋實地坦蕩蕩圓陁陁孤迥危峭不立毫髮知見倒底放下澄澄絕照壁立萬仞喚甚作心作佛作玄作妙一往直前不起見不生心如猛火聚不可近傍似倚天長劍孰敢攖鋒養得純和冲淡透徹無心境界便可截生死流居無爲舍端如癡兀拍盲罔分皁白猶較些子所謂絕學閑閑眞道人也了了回光深深契寂廼絕滲漏自然與向上人不謀而同不言而喻若作聰明立知見懷彼我分勝負則轉沒交涉此唯尙猛利快割斷懸崖撒手棄捨得性命便當下休歇只大休處是究竟合殺處爾

示無住道人

維摩經依無住本立一切法金剛經應無所住而生其心古德云一切無心無住著世出世法莫不皆爾使有住卽膠固豈復能變通耶日月住則無晝夜四時住則失歲功唯其無住乃所以流於無窮是故住於無所住所以轉凡成聖卽無作無爲無住妙用於萬有中得大解脫既

達此理見此道唯力行不倦乃眞道人也。

示元長禪人

佛語心爲宗達磨傳此者矣而馬師爲蛇畫足慈悲落草乃云諸人欲識佛語心麼已是漏逗了也更言只如今語便是佛語此語出於自心便是佛心若舉揚正宗作如是話會如何出得作家八十四人邪是故從上來行正令底視之如將惡水澆潑人成甚模樣應知這老子太煞屈曲事不獲已然今學者尙看他底不破只管落語言執解會認光影做窠窟好不性懆也可中有箇生鐵鑄就手裏握得頑石粉碎眼目定動擬議不來一綽便透更說甚佛語心如之若彼直饒千佛萬祖躬親動地放光如雲如雨行棒行喝雷奔電激不消箇熱不采等閑凡不收聖不管更喚甚作生死菩提涅槃煩惱不如飢來喫飯困來打眠此乃稍稍類他家種草也所以地藏道儞南方佛法浩浩地爭如我種田博飯喫十成是以此爲事徹到無事如斬一綟絲一斬一切斬把斷世界不漏絲毫諸見不生了無滲漏以長歲月不動不退靠之自然成辨香林四十年方打成一片溈山三十載牧一頭水牯既有此志深宜長久乃能堪報不報之恩是眞出家大解脫衲子也。

示丹霞佛智裕禪師

祖師宗風步驟闊遠迥出教乘單提正印靈山拈瞬而飲光笑領龍猛示圓相而提婆中的少林覓心而二祖超證盧老說偈而大滿付衣鉢人皆以爲密傳鞠其端倪乃是納敗豈造妙深極之旨止如是而已要須如天之高地之厚海之淵虛空之廣尙未髣髴信過量大解脫人回天轉地吸海枯竭喝散虛空奮大機顯大用於無邊香水淨幢刹外斬魔外見網摧佛祖化權揭示不可示拈提不可提之奧尙未爲的則雪峯鼇山得道雲巖始終不知有乃戲論爾應須生鐵鑄就心肝殺人不眨眼手段乃可略露風規貴慧命流於無窮差可人意耳。

建炎三年閏月十一日前雲居圜悟禪師

克勤書與耿龍學書批。

妙喜示來教見矻矻於此意況甚濃眞不忘悲願也而以宗正眼照破義路情解透見肝膽何明眼如此正宗久寂寥後昆習窠臼守箕裘轉相鈍致擧世莫覺其非大家隨語生解祖道或幾乎息矣不有超卓穎悟之士何以規成哉此皆正念乃眞外護也時節擾擾山居領衆亦未可保全尙未有可乘之便爲轉身之計爾果佛日一夏遣參徒踏逐山後古雲門高頂欲誅茆隱遁其志甚可尙今令謙去山叟爲書數語及疏頭亦與輟長財成之可取一觀也渠欲奉鋤正在高裁也。克勤啓上。

示楊無咎居士

佛祖出興于世以大悲願力起無緣慈唯務引接利智上根具大器量堪委任大解脫上上勝妙玄機作人所不能爲超群絕衆可以彈指證無生可以立地越果海眼觀東西意在南北如快鷹俊鶻戛戛騰雲迷風曜日捎玉兎拂金雞英靈掀豁乃拈當頭末上一著子似電閃星飛不容擬議待伊全體脫去籠羅直下不費一毫指點遂乃披襟透頂透底領略卽兩手分付是故體裁步驟如獰龍之得水似猛虎之靠山雲突突風颯颯傾人肝膽耀人心目方可謂之本

家種草、所以維摩大士、大集會魔王、現首楞嚴定、魔界行不汚菩薩之儔、與夫文殊・普賢・金色頭陀之類、皆離倫拔萃、而一旦擧花密傳、豈常事哉、以至達磨西來、神光瞥地、自爾多沒量大人、特達精通、只向動用瞬揚、語默舒卷、縱擒與奪、顯發底裏、長時已思不露、等閑兀兀地、若百不知百不會底人、及乎挨拶著、便見驚群動衆、雖然鞠其至趣、初無如許多事、唯直下明妙、一切無心而已、苟能棄去學解執著、放教閑閑地、聖諦亦不爲、自然契合從上來綱宗、便可入此選佛場中、轉度未度轉化未化、得不是再來人間世、不依倚一物、無爲絕學、眞正出格大道人耶。

詔使觀察楊公無咎、高識遠見博學多能、而於祖道尤深造詣、智鑒機警、未擧先知、未言先透、在都下日、獲參陪玆沿帝命、使宣撫司再會錦官、特辱道照臨、還索葛藤、因出此納敗云。

示成都雷公悅居士

如今照了本心、圓融無際、色聲諸塵那可作對、迥迥獨脫、虛靜明妙、要須徹底提持、勿令浮淺、直下高而無上、廣不可極、淨躶躶圓梁梁、無漏無爲、千聖依之作根本、萬有由之建立、應須斗頓回光自照、令絕形段、分明圓證、萬變千化、無改無移、謂之金剛王、謂之透法身、倘間行住坐臥、無不透徹、物物頭頭、有間隔喚作乾白露、淨單明自心、不可只麼守之、守住便落窠窟、卻須猛割猛斷、十分棄捨、轉捨轉明、轉遠轉近、抵死打疊、令斷卻命去、始是絕氣息人、方解向上行履、若論向上行履、唯己自知、知亦不立、釋迦彌勒、文殊・普賢・德山・臨濟、不敢正眼覷著、豈不是奇特底事、一棒上一喝下、一句一言、若細若麁、若色若香、一時穿透、方稱無心境界、養得如嬰兒相似、純和冲淡、雖在塵勞中、塵勞不染、雖居淨妙處、淨妙收它不住、隨性任緣、飢飡渴飲、善尙不起念、惡豈可復爲、所以道隨緣消舊業、更莫造新殃。

又示

道貴無心、禪絕名理、唯忘懷泯絕、乃可趣向、回光內燭、脫體通透、更不容擬議、直下桶底子脫、入此大圓寂照、勝妙解脫門、一了一切了、只守閑閑地、初不分彼我勝劣、才有毫芒見刺、卽痛劃之、放教八達七通自由自在、長養綿密、千聖亦覷不見、自己尙似寃家、只求得遠離不隈傍、翛然澄靜、虛而靈、寂而照、猛勇斷割、徹底無纖毫、撓智次、王老師謂之作活計、趙州除粥飯二時是雜用心、悠久踐履、使純熟、乃令從上來無心體道、密密作用、自見工夫、到下梢結角頭、自然如懸崖撒手、豈不快哉。

示張持滿朝奉

克勤自出峽止訥堂、唯念玆在、玆相從者多不告倦、所爲利他乃自利也、要須根本明徹、理地精至、純一無雜、纔有是非、紛然失心、若踏正脈、諸天捧花無路、魔外潛覷不見、深深海底行、高高峯頂立、始得不驚群動衆、謂之平常心、本源天眞自性也、雖居千萬人中、如無一人相似、此豈麁浮識想利智聰慧所能測哉、示論、綿密無間、寂照同時、歲月悠久、打成一片、而根本愈牢、密密作用、誠無出此、應當當處全眞、則彼我遐邇、觸處皆渠、刹刹塵塵、皆在自己大圓鏡中、愈

綿愈密、則與能轉換也、故雲門道、直得乾坤大地、無纖毫過患、猶爲轉物、不見一色、始是半提、直得如此、更須知有全提時節、始得、所以德山棒、臨濟喝、皆徹證無生、透頂透底、融通自在、到大用現前處、方能出沒、欲人全身擔荷外、退守文殊普賢大人境界、巖頭道、他得底人、只守閑閑地、二六時中無欲無依、自然超諸三昧、德山亦云、汝但無事於心、於心無事、則虛而靈、寂而照、若毫端許言之本末者、皆爲自欺、此既已明當須履踐、但只退步、愈退愈明、愈不會愈有力量、異念纔起、擬心纔生、卽猛自割斷、令不相續、則智照洞然、步步踏實也、豈有高低憎愛違順揀擇於其間哉、無明習氣旋起旋消、悠久間自無力能擾、人也、古人以牧牛爲喻、誠哉、所謂要久長人、爾直截省要最是先忘我見、使虛靜恬和任運騰騰、騰騰任運、於一切法、皆無取捨、向根根塵塵、應時脫然自處、孤運獨照、照體獨立、物我一如、直下徹底、無照可立、如斬一綟絲、一斬一切斬、便自會作活計去也、佛見法見尙不令起、則塵勞業識自當氷消瓦解、養得成實、如癡似兀而峭措、祖佛位中收攝不得、那肯入驢胎馬腹裏也。

趙州道、我見千百億箇、盡是覓作佛漢子、於中覓箇無心底難得、又云、我在南方三十年、除粥飯二時、是雜用心處、香林四十年、方成一片、湧泉四十年、尙自走作、南泉十八上、解作活計、信知、從上古人無不皆如此、密密履踐、安可計得失長短、取捨是非知解也、同學之中、唯龍門智海、昔常熟與究明、但逢緣遇境、莫不管帶、何止此生而已、窮未來際、證無量聖身也、未是他泊頭處、但一味退步、切莫作限量也。

示吳教授

佛祖以禪道設教、唯務明心達本、況人人具足各各圓成、但以迷妄背此本心、流轉諸趣、枉受輪廻、而其根本初無增減、諸佛以爲一大事因緣而出、蓋爲此也、祖師以單傳密印而來、亦以此也、若是宿昔蘊大根利智、便能於腳跟直下承當、不從他得、了然自悟、廓徹靈明、廣大虛寂、從無始來、亦未曾間斷、情淨無爲妙圓眞心、不爲諸塵作對、不與萬法爲侶、長如十日並照、離見超情、截卻生死浮幻、如金剛王堅固不動、乃謂之卽心卽佛、更不外求、唯了自性、應時與佛祖契合、到無疑之地、把得住作得主、可不是徑截大解脫耶。

探究此事、要透死生、豈是小緣、應當猛利誠志、信重如救頭燃、始有少分相應、多見參問之士、世智聰明、只圖資談柄、廣聲譽、以爲高上趣向、務以勝人、但增益我見、如以油投火、其炎益熾、直到臘月三十日、茫然繆亂、殊不得纖毫力、良由最初已無正因、所以末後勞而無功、是故古德勸人參涅槃堂裏禪、誠有旨也、生死之際處之良不易、唯大達超證之士、奮利根勇猛、一往截斷、則無難、然此段雖由自己根力、亦假方便、於常時些子境界中、轉得行打得徹、不存解不立見、豪然全體現成、踐履將去、養得純熟、到緣謝之時、自然無怖畏、只有清虛瑩徹、無一法當情、如懸崖撒手、棄捨得、無留戀、一念萬年、萬年一念、覓生了不可得、豈有死也、是故古德坐脫立亡、行化倒脫、能得勇健、皆是平昔淘汰得淨潔、香林四十年、得成一片、湧泉四十年、尙有走作、石霜勸人休去歇去、如古廟裏香爐去、永嘉云、體卽無生、了本無速、蓋業業兢兢念茲在茲、方得無碍自在、旣捨生之後、得意生身、隨自意趣、後報悉以理遣、不由業牽、所謂透脫生死耶、報緣未謝、於人間世上、有如許參涉交牙、應須處之使綽綽然有餘裕、始得、人生各隨緣分、不

必厭喧求靜、但令中虛外順、雖在鬧市沸湯中、亦恬然安穩、才有纖毫見刺、則打不過也。

示禪人

末後一句都通穿過、有言無言、向上向下、權實照用、卷舒與奪、不消箇勘破了也、誰識趙州這巴鼻、須是吾家種草始得。

示韓朝議

乃佛乃祖、直指此大法、於人人跟腳下、洞照、如千日並出、但趣外奔逸、久不能自信、有如是大威德光明、唯務作聰明、立知見、向業惑中、以謂出乎等彝、衒耀自得、向人間世、所習古今博究廣觀、謂窮極底蘊、殊不知、螢火之光、豈比太陽、所以古之奇傑之士、顯脫之性、就近而論、如裴相國楊大年之儔、投誠放下、就宗師決擇、剗去浮塵知見、大徹大悟始能超軼、與老禪碩德抗行履踐、到臨合殺結角頭、自解撒手克證、大解脫豈小事哉、今既明敏、不減前輩、平時學業才力、邁往於世路、久之、雖知宗門有此段緣、謂不出我所宗尙、殊不著意、以夙昔大緣相値、歐峯、經年會聚、一聞擧揚、卽起深信、迴光返照、顧人間世、如夢如幻、隨大化變滅、乃虛妄爾、唯此千劫不壞不移易、一切聖賢根本、乃造物之淵源、印定自己、若一發明、七通八達、何往不自得哉、是知、宿世亦曾薰炙、遇緣而彰、見於行事、豈非自信耶、然能自檢點二六時中、學佛法、已是雜用心、則去卻佛法、乃眞淨界中行李矣、但請、依此一切不雜、卽純一洞然無愛憎、離取捨、不分彼我、不作得失、一切法坦然、皆我家不思議處、淨妙圓明受用之物爾、須令此心長時現前、不墮沉昏、不生聰慧、入平等安閑寂靜境界、那有惡作業緣識情干撓、得此本妙光明也、只恐臨境界面前、都盧忘失、依前紛亂、則不堪也、古人修行、亦只以自所證入、時中照了、截斷塵勞、敎活卓卓地、悠久三二十年純熟、超出生死、不爲難著力、在行處、不只空高談說之而已、古云、說得一丈、不如行得一尺、蓋定慧之力、回轉業緣、正要惺惺地、勇猛果決、千百生中當受用其餘古人機緣語句、不必盡要會之、但一著分明、則著著如此、千變萬化、豈移變得渠力用哉、內心旣虛、外緣亦寂、著衣喫飯、本自天眞不勞、凋琢、若或立勝見、負我能、卽禍事也、切須照管、勿作此態、由是可入無我眞實平等、如如不動、不變淨妙、淸涼穩密田地矣、誌公云、不起纖毫修學心、無相光中常自在。

示曾待制

禪非意想、道絕功勳、若以意想參禪、如鑽木求火、堀地覓天、只益勞神、若以功勳學道、如土上加泥、眼裏撒沙、轉見困頓、儻歇卻意識、息卻妄想、則禪河浪止、定水波澄、去卻功用、休卻營爲、則大道坦然、七通八達、是故僧問石頭、如何是禪、頭云、磨磚、僧云、如何是道、云、木頭、此豈意想功勳所能辯哉、除非直下頓領截流便透、則禪道歷然、才擬作解、則千里萬里、要是向來世智辯聰、頓然放卻、消遣令盡、自然於此至實之地、自證自悟、而不留證悟之迹、翛然玄虛通達乃善。

馬大師嘗擧楞伽經、以佛語心爲宗、無門爲法門、乃云、諸人要識佛語心麼、只爾如今語、便是心、心便是佛、故云、佛語心乃是宗也、此宗無門、乃是法門、古人大煞老婆、拖泥涉水、若一擧便透、猶較些子、或窮研義理、卒模搽不著。

示宗覺大師

佛語心爲宗、宗通說亦通、既謂之宗門、豈可支離去本逐末、隨言語機境作窠窟、要須徑截超證、透出心性玄妙勝淨境界、直徹綿密穩審向上大解脫大休大歇之場、等閑雖似空豁豁地、而力用圓證、不拘限量、千人萬人、羅籠不住、所以迦文老人、久嘿斯要、三百餘會略不明破、但隨機救拔、俟時節到來、乃於靈山露面皮拈出、獨有金色頭陀、上他鉤鉤、謂之教外別行、若諸此旨、則威音已前漏逗了也、點檢將來、雖隨類化身、千般伎倆、萬種機緣、無不皆是箇一著子、此豈單見淺聞、存知解墮機括者所測量、是故從上來、行棒行喝、輥毬擊杈、喫茶打鼓、揷鍬牧牛、彰境智據坐掩門、喚回叱咄、與掌下踏莫、不皆于此、唯本色衲子、自既了悟透徹、又復遇大宗師惡手段、淘汰煅煉、到師子咬人不隨藥忌、直截軒豁處、方可一舉便知落處、如獅子入窟、出窟踞地返擲、何人可測量哉、此門不論拖泥涉水、草裏輥打葛藤、眼麻眯三搭不回者、唯是八面受敵、未舉先知、未言先契、自然水乳相合、得坐披衣、養得純熟、待霜露果熟出頭來、便與麼用始合祖先本因地發行一周佛事、所以道、要窮恁麼事須是恁麼人、若是恁麼人、不愁恁麼事。

佛果圜悟眞覺禪師心要卷下　終

國譯禪門寶訓集

解題

禪門寶訓集は、初め妙喜竹庵の編集に係り、後に吳僧淨善の重集する所なり。淨善曾て寶訓の末に記して曰く、

寶訓は、昔、妙喜竹庵、茅を江西の雲門に誅せし時、共に集む、余、淳熙の間、雲居に游びて之を老僧祖安に得たり。惜しいかな、其の年深うして蠹損して首尾完からざることを。後來或は語錄傳記の中に見えて、之を積むこと十年、僅かに五十餘篇、仍つて楊岐、黃龍より下、佛照、簡堂に至るまで諸老の遺語を取りて、節葺して三百篇を類す、其の得る所、後先あり、而も古今を以て詮次となさず、大概學者をして勢利人我を削りて道德仁義に趨らしむるのみ。其の文理優游平易にして、甚だ高誕荒邈詭異の跡なし、實に以て入道の遠猷を助くべし。且つ木に刊して以つて廣く流傳せんとす、必ず同志の士あつて、一たび見て心に許さば、余、丘壑に老死すと雖も而も志願足りなん。

淨善敬書。（原漢文）

と、以て本書編集の沿革を知るに足るべし。而して編者の傳、古來より共に詳かならざるは惜しむべ

し。

本書は、我が邦に於ける禪書刻版の先驅にして、既に弘安十年、僧の古倫によりて開版せられたり。現存の弘安版本、卷末識語に曰く、

此の書、叢林に補あること久し、然も本朝未だ刊行あらず、輙ち衆緣を募り、梓に鋟めて工を畢る、今此の版を將て、建長禪寺正續庵に捨入し、廣印流通せしむ。惟だ古德の先言往行を傳揚するのみならず、而も古倫も亦少しく夙志に酬ゆるあらん。弘亥中夏、幹緣古倫識。（原漢文）

以て此の書の我が邦叢林に流傳の久しきを知るに足るべし。德川時代に至りては又屢々印刻せられ、現時の流布本のみにても、數種の異本ありて彼此一定せざるものあり。今時國譯に際しては延寶九年五月の刻版に據れり。蓋し現時の流布本中、最も信據するに足るべきもの歟。

國譯㊀禪門寶訓集　上

㊁東吳沙門　淨善重集

㊅明敎の嵩和尙の曰く、「尊きことは道より尊きは莫く、美なることは德より美なるは莫し、道德の存する所は、㊂匹夫と雖も窮するにあらず、道德の存せざる所は天下に王たりと雖も、通ずるにあらず。㊆伯夷叔齊は古の餓夫なり、今斯の人を以て之に比すれば、人皆喜ぶ。㊇桀紂㊈幽厲は古の人主なり、今其の人を以て之に比すれば、人皆怒る。是の故に學者道德の身に充たざるを患ひよ、勢位の己に在らざることを患ひざれ」と。（鐔津集）

明敎の曰く、「聖賢の學は、固に一日の具に非ず、㊉目足らざれば、之に繼ぐに夜を以てす、之を歲月に積めば自然に成ずべし。故に曰ふ、『㊋學んで以て之を聚め、問うて以て之を辨ず』と。斯の言、學は辨問に非ざれば發明するに由無し。今學者至る所、一言を發して、人に辨問する者あるに依れば、「庶人夫妻相匹し、

㊀禪門寶訓と普通稱すれども、或は禪林寶訓とも言ふ。禪門とは禪宗の法門の略、寶訓とは敎を設けて、奧義を發せしむるなづく。

㊁東吳。蘇州府禹貢、揚州堀方を指す。

㊅明敎嵩。洞山曉聰の法嗣、佛日契嵩といひ、藤州鐔津李氏の子、永安寺に住し、禪門定祖圖、正宗記等を著し、仁宗に上り、嘆賞して入藏せしめ、明敎と賜號せらる。

㊂匹夫。論語に「三軍可レ奪レ帥、匹夫不レ可レ奪レ志也」と。韻會に依れば、「庶人夫妻相匹し、

ことを罕なり。知らず將た何を以てか㋺性地を裨助し、㋩日新の益を成せん乎」と。㋥（九峰集）

明教の曰く、「㋦太史公、孟子を讀んで、『梁の惠王問ふ、何を以てか吾が國を利せんと云ふに至つて、覺えず卷を置いて長嘆す。嗟乎、利は誠に亂の始なり、故に㋧夫子罕に利を言ふ、常に其の原を防ぐなり、原は始なり、尊崇貧賤利を好むの蔽、何を以てか別ならん㋨』と。夫れ公に在る者、利を取るに公ならざるときは、則ち法亂る。私に在る者、欺を以て利を取るときは、則ち事亂る。事亂るゝときは、則ち人爭ふて不平なり、法亂るゝときは、則ち民怨みて伏せず。其の悖戾、鬪諍、死亡を顧みざることは此より發る矣。是れ亦利は誠に亂の始なるにあらずや。且つ、聖賢深く戒めて利を去け、仁義を先とすることを尊ぶ。而も後世、尚ほ利を恃んで相欺くことあり、風を傷り、教を敗る者、何の限りかあらん。況んや復た公然として其の征利の道を張つて、之を行ふて天下風俗正しうして、㋪澆ならず、㋫薄ならざることを欲せば、其れ得べけんや」と。（鐔津集）

その名既に定る、單人にても通ずる故、通じて匹夫匹婦となす」と。匹或は疋に作る。

㋮伯叔。史記列傳に依れば、孤竹の君の二子にして、相讓つて國を逃れたり。後、武王、東方紂を討つや、伯叔二人馬を叩いて戒む。武王天下を定むるの後、二人周粟を食まずと言ふて、首陽山に隱れ、餓死して節を守る。

㋯桀紂。史記本紀に依れば、桀は帝發の子なり、紂は帝乙の子なり、共に惡虐をなす。

㋰幽厲。史記本紀に依れば、周の宣王の子幽王、名は湼、夷王の子、厲王、名は胡。共に不法好利の愚王也。

㋱日不足云云。禮記の禮器に、「日不レ足權レ之以レ燭」と。

㋲學以繫之云云。易經の乾掛の文に、「君子學以聚レ之、問以辨レ之、寬以居レ之、仁以行レ之、

明教の曰く、「凡そ人の爲る所の惡、形有る者あり、形無き者あり、形無きの惡は人を害する者なり、形有るの惡は人を殺す者なり、人を殺すの惡は小しきなり、人を害するの惡は大なり。所以に游宴の中に㋳鴆毒あり、談笑の中に戈矛あり、堂奥の中に虎豹あり、隣巷の中に戎狄あり、聖賢之を未萠に絶つて、之を㋴禮法に防ぐに非ざる自りは、則ち其れ害を爲すこと亦甚だしからずや」と。（西湖廣記）

明教の曰く、「㋵大覺の璉和尚育王に住す、因に二僧、㋷施利を爭ふて已まず、㋸主事能く斷ることなし。大覺呼び至つて、之を責めて曰く、『昔、包公㋻開封を㋼判す。民自ら陳ぶることあり、白金百兩を以て我に寄する者亡しぬ。今其の家に還す、其の子受けず、望むらくは、公其の子を召して之を還せと。公嘆異す、卽ち其の子を召して之を語る。其の子辭して曰く、先父存する日、白金私に㋽他室に寄する無しと。二人固く讓ること久し、公、已に責むることを得ず。在城の㋾寺觀に付して、㋿冥福を修

とあり。

㋺性地。本性心地といふの略也。

㋩日新。易の繫辭に、「日新之謂二盛德一」とあり、大學に湯の盤銘に曰く、「苟日新、日々新、又日新。」とあり。

㋥九峯集。九峯の韶公の集に係るものかと、古來定說なし。

㋦太史公。官名なり、司馬談を指す、談は太史喜の子也。此談は、史記孟子列傳（卷七十四）に出づ。

㋧夫子。孔子を指す也。

㋨これまでは史記孟子傳の文を採つて文字を替へたる也、傳に依れば、「太史公讀二孟子一、至二梁惠王問一、何以利二吾國一、不レ覺置レ卷長嘆、嗟乎、利誠亂之初也、夫子罕言レ利、常防二其原一也、故曰、放二於利一而行多レ怨、自二天子一至二於庶人一、好レ利之弊、何以異

して以つて亡者に薦む。』と、予目あたり其の事を觀る、且つ㋒塵勞の中の人すら、尙ほ能く財を疎んじ、義を慕ふこと此くの如し。爾佛弟子と爲つて、廉耻を識らざること是くの如し。遂に叢林の法に依つて之を㋓擯す。」と。（西湖叢記）

大覺の璉和尙、初め㋔廬山に遊ぶ。㋕圓通の訥禪師一たび見て直に㋖大器を以て之を期す。或ひと問ふ、「何に自つてか之を知る。」訥曰く、「斯の人、㋗中正にして倚らず、動靜尊嚴、如以ならず、道學行誼言簡にして理を盡す。凡そ人の資稟此くの如くにして、器と成ること有らざる者鮮し」と。（九業集）

㋘仁祖㋙皇祐の初め、㋚銀璫の小使をして、

說。」とあり、やや此の文と異れり。

㋐レ共にうすしと訓ず。

㋒塵。形驚に似て、大きさ驚の如し、紫綠色にして、頭七八寸、蛇蝮を食ふ、毒鳥なり。左傳閔公元年に「宴安酖毒、不レ可レ懷也。」とあり。

㋓禮法。禮義戒法といふ略。

㋔大覺璉。懷璉大覺禪師は、勉源懷澄の法嗣、明州育王山に住せり。

㋕施利。布施のこと。僧の法施に對し、俗人より僧に上すは、財施なり、施利ともいふ。

㋖主事。僧堂の監督僧のこと。

㋗東京開封府。

㋘當今の判事。（裁判所）

㋙他人のこと。

㋚寺院と云ふこと。

㋛亡者の爲めに追善回向すること。

㋜塵勞の人。在俗の人。楞伽經に曰く、染汚を塵といひ、擾惱を勞と云ふ。

㋝擯斥、即ち追ひ出すこと。

㋞廬山。一統志卷二十五に、南康府の西北二十里にあり、古名は南障。傳に依れば、「周の武王の時、匡俗の兄弟七人、廬を結び、此に隱居せるより廬山といへり」と。

㋟圓通訥。居訥禪師は梓州中江、蹇氏の子、洞山子榮の法嗣也、江州圓通寺に住す。（續傳燈卷六）

㋠大器。老子經に曰く、「大器は晚成し、大音は聲希なり」と。

㋡中正不倚。中庸にして異倚ならざるをいふ。易の乾卦の文に、「剛健中正」と、中とは行ふこと過不及なきをいひ、正とは其立つて偏ならざるをいふ。

㋢仁祖。宋の第四世也、諱は禎、眞宗の第六子也。

㋣綠綈尺一の書を持して圓通の訥を召し、孝慈の㋤大伽藍に住せしむ。訥疾と稱して起たず、大覺を表疏して詔に應ぜしむ。或人曰く、「聖天子、道德を旗はし崇めて、恩、泉石に被らしむ、師何ぞ固く辭する」と。訥曰く、「予㋥濫に僧倫に厠はつて視聽聰ならず、幸に林下に安んじ、蔬を飯ひ水を飲む、佛祖と雖も爲ざる所あり、況んや其の他をや、先哲言へることあり、㋦『大名の下には、以て久しく居り難し』と。予れ平生、知足の計を行じて、㋧聲利を以て自ら累さず、若し心に厭かば、何の日にか足らんや。故に㋨東坡嘗て曰く、『安きことを知るときは則ち榮え、足ることを知るときは則ち富む』と。名を避け、節を全うし、始を善くし終を善くす。圓通に在つて之を得たり」と。（行實）

圓通の訥和尙の曰く、㋩「璧たる者は命杖に在り、杖を失ふときは則ち顚る。渡する者は命舟に在り、舟を失ふときは則ち溺る。凡そ林下の人、自ら守る所無うして、外勢を挾んで、以て重しと爲る者、一旦其の挾む所を失へば、皆顚溺の患を免るゝこと能はず」と。（廬山野錄）

㋣皇祐。日本紀元一七〇九より一七一三まで、後冷泉帝の永承四年より天喜元年に到る。

㋤銀璫小使。內官の鬚髯、即ち內勳の使と云ふこと。但し初めは士大夫のみに用ひ、後、建武以來は官吏悉くこれを用ひたりと、文選卷五十の註にあり。

㋥綠綈尺一。綠色の厚絹にて、長さ尺一寸あり、以て詔書を寫す。

㋦伽藍。梵語にして衆園と譯す、僧大衆の生息する建築物、即ち寺院のことなり。

㋧濫厠僧倫。濫山譬策に曰く、「濫りに僧倫に厠りて、言行荒踈なり」と。

㋨大名之下云云。范蠡の言也。范蠡越王句踐に事へ、共に苦節二十餘年、深く謀つて吳を滅し、會稽の耻を報ぜり。その時、范蠡の云く、「大名之下

圓通訥の曰く、「昔、㋒百丈大智禪師、叢林を建て㋓規矩を立てて、㋔像季不正の蔽を救はんと欲す。曾て知らず、像季の學者、規矩を盜んで、以て百丈の叢林を破ることを。上古の世は、㋕巢に居り穴に處すと雖も、人々自ら律なりき。大智の後、高堂廣厦と雖も、人々自ら廢す。故に曰ふ、『㋖安危は德なり、興亡は數なり』と。苟も、德將ふべくんば、何ぞ必ずしも叢林のみならん。苟も數憑むべくんば、曷ぞ規矩を用ひん」と。（野錄）

圓通、大覺に謂つて曰く、「古聖心を未萌に治め、情を未亂に防ぐ。蓋し預め備ふるときは則ち患ひ無し。所以に㋗重門に柝を擊つて、以て暴客を待つ、諸を豫に取れり。事預め之を爲すときは則ち易し、卒に之を爲すときは固に難し、古の賢哲、㋘終身の憂あつて一朝の患なし』とは、誠に斯に在り」と。（九峯集）

雜二以久居一」とて、勾踐の雜を俱にすべきも、安を俱にすべからざるの爲人を書して、越を辭せり。史記世家に出づ。

㋓名譽と云ふに同じ。

㋔東坡。蘇東坡といひ、支那一流の文豪にして、深く禪に造す。

㋖此の示衆は自己本有の道心を忘れ、外勢を求め權者に依るを誡む。

㋒百丈大智。傳燈六に曰く、馬祖道一の法嗣に洪州百丈山の懷海禪師あり、福州長樂の人也、大智はその謚號にして、禪宗の規度、是れより興る、百丈清規はその書なり。

㋓規矩。規は圓器具、矩は方器具、律令のことなり。

㋔像季不正。釋迦入滅より後を正法五百年、像法一千年、末法一萬年と分つ、今は所謂像、末の年を指す。

大覺の璉和尚の曰く、「㋙玉琢かざれば器とならず、人學ばざれば道を知らず、㋚今の古を知る所以は、後の先を知る所以なり。善者は以て法と爲すべし、惡者は以て戒と爲すべし。前輩身を立て名を當世に揚ぐる者を歷觀するに、㋛學問せずして之を成ずること鮮し」と。（同上）

大覺の曰く、「㋜妙道の理、㋝聖人嘗て之を易に寓す。周衰へて先王の法壞れ、禮義亡するに至つて、然して後、奇言異術間々出で、俗を亂る。我が㋞釋迦㋟中土に入るに逮んで、醇ら㋠第一義諦を以て始末設爲し、慈悲を以て群生を化す、亦時に趨く所以なり。生民あつてより以來、淳朴未だ散せざることは、則ち㋡三皇の教、簡にして素なるは春なり。㋢情實、日に鑿するに、㋣五帝の教詳かにして文なるは夏なり。時、世と異に、情、日に隨つて遷る故に、㋤三王の教、密にして嚴なるは秋なり。昔、㋥商周の誥誓、後世學者、故に曉すこと能はざることあり。當時の民、之を聽いて違はざるに比すれば、則ち俗、今と如何ん。其の弊して秦漢と爲るに及んでは、則ち至らずと云ふ所無し矣。故に天下、聞くことを願ふに忍びざ

㋙巢居穴處。易繫辭に出づ。「上古は穴居して野處す、後世の聖人之に易ふるに宮室を以つてせり」と。家語の問禮に「夏則居二橧巢一」とあり、註に「在レ樹曰レ巢」と言へり。

㋚安危德。晉譚子の語。「安危德也、又曰、興亡數也、苟德可二以恃一何必廣二粱帛一乎云云」と。

㋛重門擊柝。易繫辭に出づ。重門待二暴客一之象にして、䷯雷地豫之卦なり。

㋜終身憂。孟子離婁に「君子は終身の憂あつて、一朝の患なし」とあり。

㋝玉不琢云云。禮記の學記の全文なり。

㋞今之所以知古。韓文卷三十八に依れば、順宗皇帝に進むる實錄表狀に「臣愈（韓愈）言、今之所二以知一古、後之所二以知一今、不レ可二口傳一、必憑二諸史一云云」と。

る者あり。是に於てか、我が佛如來之を一推するに ㋒性命の理を以てするは冬なり。天に四時あり、循環して以て萬物を生成す、聖人教を設けて迭に相扶持して以て天下を化成す、亦是れに由る而已矣。然れども其の極に至つては、皆弊無きこと能はず。弊と云ふは迹なり、要す當に聖賢の者あつて世々起つて之を救ふべし。秦漢より以來千有餘載、風俗靡々として愈薄し。聖人の教列つて ㋓鼎の如くに立つて互に ㋔詆訾し、大道寥々として之に返ること莫し、良に嘆すべし」と。（答二㋕侍郎孫莘老一書）

大覺の曰く、「夫れ一方の主者と爲つて、所得の道を行ふて人を利せんと欲せば、先づ須らく己を克め、物を惠んで心を一切に下すべし。然

㋑不學問云云。孝經第一章に依れる語也、以て道學、科學の必要を說けり也。

㋺妙道之理。微妙の大道の眞理。

㋻聖人寓之於易。易の繫辭に、「八卦の始也。包犧氏天下に王たらんとし、象を天に、法を地に、文と地の宜とを觀るに、近くは身に、遠きは諸物に依つて八卦を作れり」と。

㋼釋迦。能仁と譯す、此にては佛教といふ意味に用ふ。

㋽中土は支那、後漢の明帝、永平八年に佛教始めて渡來す。

㋾第一義諦。大集經に、「甚深之理不レ可レ說、第一義諦無二聲字一」と。

㋿三皇とは大昊、炎帝、黃帝の三皇なり。

㋀情實は尙ほ人情といふが如し。

㋁小昊、顓頊、帝嚳、堯、舜。

㋂夏、殷、周。

㋃商周之誥誓。誥とは告にして、衆を喩すに用ふ。誓とは軍旅に於て、士師が刑罰を後にし、戒を先にするをいふ。誥に湯誥、太誥、康誥あり、誓に秦誓、牧誓、費誓等あり。

㋄性命之理。易の說卦傳に、昔は聖人の易を作ること、將に以て性命の理に順ぜんとすとあり。性は天理自然の賞性也、命はその行はしむる所の力也、理は當然の道也。

㋅鼎立。史記淮陰侯の列傳に蒯通が曰く、「天下を三分して鼎足のごとくにして居らん」と。鼎は三足にして能く立つ、その一を失するも倒るる也。

㋆詆訾。信ぜずして、疑ひそしること。揚子法言卷一に曰く、「大瓦詆訾聖人、卽爲二怪迂一」とあり。

㋇侍郎孫莘老。侍郎は三十六人あり、四百石を領し、書に六

して後、金帛を視ること糞土の如くならば、則ち ㋈四衆尊んで之に歸せん」と。（與二九僊調和尙一書）

大覺の曰く、「前輩聰明の資あつて、安危の慮り無し。㋉石門の聰、㋊開先の舜二人の如くんば戒と爲すべし。然らば則ち人生の ㋌定業、固に明辨し難し。細かに其の原を詳かにするに、安んぞ其の忽慢不思の過たることを知らざることを得ん歟。故に曰ふ、禍患は隱微に藏れて人の忽にする所に發す。是れを用て之を觀れば、尤も宜しく謹畏すべし。」（九峰集）

雲居の舜和尙字は老夫、廬山の開先に住せし日、郡守槐都官が私忿を以て、㋍横逆に罹つて ㋎其の衣を民にす。京都に往いて大覺を訪ふ。㋏山陽に至つて雪に ㋐旅邸に阻てらる。一夕客あつて二僕を携へて雪を破けて至る、老夫を見て舊識の如し。已にして衣を易へて前に拜す、老夫之を問ふ、客の曰く、「昔洞山に在つて師に隨つて荷擔し、漢陽に之きし幹僕宋榮なり」と。老夫共に疇昔を語る、客嗟嘆すること久し。凌晨に飯を備へて、

人あり、文書起草を司る役。孫莘は宋の侍郎にして、名は覺、字は莘老、高郵の人也。

㋈比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

㋉石門聰。石門寺聰禪師は、初め慈照にあり、首山省念の子也。咸平年中、石門に住ぜり。大惠武庫によれば、土地の太守の爲に箠辱せられしが、太守、この法罰に依りて、遂に襄州に全滅ぜりといふ。

㋊開先舜。舜老夫は廬山の棲賢に住し、槐都官、私怨に依りて南康に守たりしを以つて、舜を遺俗せしむ。舜後に入院の上堂に曰く、

「無レ端被レ譖枉遭迍。半年有餘作二俗人一。今日再歸三峽寺。幾多懽喜幾多嗔」。

㋌定業。先天的に約定せられたる罪業の義なれど、實は業は自ら作り、因に依つて生ずる

白金五兩を贈る。仍つて一僕を喚ぶ。客の曰く「此の兒、京城に來往することと數々す、道途の ㋓ 間關、備悉す、師の行、固に慮無からんか」と。老夫是に由つて ㋔ 輦下に達することを得たり。此を推すに益々其の二人、平昔存する所を知るべし。（同上）

大覺の曰く、「舜老夫、賦性簡直にして、㋕ 權衡貨殖等の事を識らず、日に定課あり、曾て少しも易へず、燈を炙し地を掃ふと雖も皆躬ら之を爲す。嘗て曰く、『㋖ 古人一日作さざれば一日食はず』と云ふの戒あり、予れ何人ぞや、老に垂とすと雖も其の志益々堅し。或人の曰く、『何ぞ左右の人を使はざる』と。老夫曰く、『寒暑を經涉して、起坐常ならず、之を勞せんことを欲せず』と。」

舜老夫の曰く、「此の道を傳持せば、貴ぶ所は一切眞實なり、邪正を別ち、妄情を去るは、乃ち心を治するの實なり。因果を識り、罪福を明むるは、乃ち操履の實なり。道德を弘め、方來を接するは、乃ち住持の實なり。才能を量り、執事を請ずるは、乃ち人を用ふるの實なり。言行を察し、可否を定むるは、乃ち賢を求むるの實なり。其の實を存せずして、徒に虛名を街はば、理に益なからん。是の故に、人の操履は惟だ誠實を要す。苟も之を執つて渝らずんば、㋗ 夷險と雖も、以て一致にすべし」と。（以上の二事坦然庵集）

舜老夫、浮山の ㋘ 遠錄公に謂つて曰く、「無上の妙道を究めんと欲せば、㋙ 窮するときは益々堅く、老いては當に益々壯なるべし。俗に循つて、苟も聲利を竊んで、自ら至德を喪すべからず。夫れ玉は潤潔を貴ぶ、故に丹紫も能く其の質を渝ふること莫く、㋚ 松は歲寒を表はす、故に霜雪も能く其の操を凋ますこと莫し。是に知る、節義は天下の大たることを。惟だ公の操致、尙ぶべし、自ら强めざることを得んや。古人の曰く、㋛『逸翮獨り翔り、孤風侶を絕す』と。宜しく其れ然るべし」と。（廣錄）

浮山の遠和尙曰く、「古人、師を親しみ友を擇んで、曉夕敢て自ら怠らず、㋜ 執纍 ㋝ 負舂賤役に ㋞ 陸沈するに至れども、未だ嘗て勞を憚らず、予れ ㋟

㋓ 間關。崎嶇風轉して、艱難なること也。

㋔ 輦下。王者の乘る車をいふ。故に輦は京邑の地なり。

㋕ 權衡。權は量を量るもの、衡は輕重を計るもの、共に周禮、考工記に詳し。

㋖ この言は百丈大智禪師の行戒にあり、會元三に出づ。

㋗ 夷險一致。歐陽書錄堂の記に曰く、王家に勤勞して、夷險一節なり。

㋘ 浮山遠錄公。浮山の法遠圓監禪師は、三葉縣の首の法嗣、鄭州の人なり、師は、頗る吏事に通曉せるを以て、遠錄公と通稱せり。

㋙ 窮則益堅。後漢の馬援傳に曰く、「丈夫爲レ志、窮當二益堅一、老當二益壯一」と。

㋚ 松表歲寒。論語の子罕に、「歲寒して然る後、松柏の凋に後るるを知る」と。

㋛ 逸翮。文選卷十二に、王僧達が、顏光錄を祭る文に、「逸翮獨り翔り、孤風侶を絕す」とあり。

㋜ 執纍。毛詩の楚茨に出づ。

㋝ 求道の人法の爲めに碓屋にて米を舂づくこと。

㋞ 陸沈。莊子の則陽に曰く、「世と違つて、心に是と俱にする

果に外ならず。

㋟ 橫逆。橫逆は强暴にして、理に順ぜざるを謂ふ也。

㋠ 法衣を脫がしめて俗となす。

㋡ 山陽。楚州にあり。

㋢ 旅邸。邸とは至る也、歸り至る所をいふ。今人は却つて逆旅を邸となす。漢制には、郡國朝宿の舍にして、京師にあるものを邸となづくと。今、玆には旅館の意に用ふ。

㋣ 間關。崎嶇風轉して、艱難なること也。

㋤ 輦下。王者の乘る車をいふ。故に輦は京邑の地なり。

㋥ 權衡。權は量を量るもの、衡は輕重を計るもの、共に周禮、考工記に詳し。

㋦ この言は百丈大智禪師の行戒にあり、會元三に出づ。

葉縣に在つて備に曾て之を試む。然れども一も利害を顧み、得失を較ぶるの心あらば、則ち㊁依違㊂姑息して至らずと云ふ所靡し、且つ身既に正しからずんば、又安んぞ能く道を學せんや」と。㊃（岳侍者法語）

遠公の曰く、「㊄夫れ天地の間に誠に生じ易き物あり、一日之を㊅暴め十日之を寒えしめば、亦未だ能く生ずるもの有ることを見ず。無上の妙道昭昭然として心目の間に在り、故に見ること難からず。要すらくは志を堅くし行を力むるに在り、坐立に待つべし。其れ或は一日は信じて十日は之を疑ひ、朝には則ち勤めて夕には則ち之を憚らば、豈獨り目前に見難きのみならんや。恐らくは其の身を終るまで之に背かん」と。（雲首座書）

遠公の曰く、「住持の要は㊆取捨を審かにするより先なるは莫し、取捨の極りは内に定まり、安危の崩は外に定まる。安は一日の安に非ず、危は一日の危に非ず、皆積漸よりす、察せずんばあるべからず。道德を以て住持すれば道德を積む、禮義を以て住持すれば禮義を積む。㊇刻剝を以て住持

一二

ことを厝ぜざるを陸沈といふ、譬へば聖人の却つて市中に隱るるが如し。」

㊁葉縣。廣敎院の葉縣歸省禪師を指す。省は首山省念禪師の法嗣也。

㊂依違。詩の箋に、「謀の善なるものは、俱に背違し、その不善なるものには、依つて立に就く」と。

㊂姑息。禮記に、「細人之愛、人也以二姑息一」と。注に、「息は安也、言は苟容にして安きをとる也」とあり。

㊃岳侍者。興化仁岳禪師か、岳は浮山遠の法嗣也。

㊄有易生之物云云。孟子告子の一節を引用せるなり。

㊅暴は溫と同義にとる。

㊆取捨。取善捨惡の畧。

㊇刻剝。唐書の皇傳が傳に、「民を刻剝せば可ならんか」とあり。

すれば怨恨を積む。怨恨積るときは中外離背し、禮義積るときは中外和悅し、道德積るときは中外感服す。是の故に、道德禮義、洽きときは中外樂しむ、刻剝、怨恨、極るときは中外哀しむ。夫れ哀樂の感、禍福斯に應ず」。と。

遠公の曰く、「住持に㊈三要あり、曰く、仁、曰く、明、曰く、勇。仁と云ふは道德を行ひ、敎化を興し、上下を安んじ、往來を悅ばしむ。明と云ふは禮義に遵ひ安危を識り、賢愚を察し、是非を辨ず。勇と云ふは果決を事とし、不疑を斷ち、姦を必ず除き、佞を必ず去く。仁あつて明あらざるは、田あつて耕さゞるが如く、明あつて勇あらざれば、苗あつて耘らざるが如く、勇あつて仁あらざれば、猶ほ刈ることを知つて種うることを知らざるが如し。三のもの、備はるときは叢林興り、一を缺くときは衰ひ、二を缺くときは危し。三のもの一も無きときは、則ち住持の道廢たる」と。（二事興二㊉淨因臻和尙一書）

㊈三要。三要とは、修心如法の三要點にして、仁、明、勇是なり。名臣言行錄後集卷七に依れば、「司馬光、御史中丞に除し、上疏して修心の要を論ずるに三あり、『曰仁、曰明、曰武』と。而して治國の要に三あり、『官人、信賞、必罰』。この六を以つて、よく仁宗皇帝に用ひられたり」と。今、浮山の遠公、採つて以て修心の要を是に取る、住持爲人の爲になす也。

㊉淨因臻。續傳燈卷九に依れば、東京淨因の淨照道臻禪師は、浮山遠禪師の法嗣にして、福州右田、戴氏の子也。

二賢不肖。中庸に曰く、「賢者は之に過ぎ、不肖は及ばず」となり。

㊉水火不同器。韓非子に、「夫水炭不二同一器而久、寒暑不二兼一時而至一」とあり。

遠公の曰く、「智愚、㊁賢不肖は㋓水火の器を同じうせず、寒暑の時を同じうせざるが如し。蓋し㋔素分なり、賢智の士は㋕醇懿、端厚にして道德仁義を以て是れ謀る、言を發し事を行ふこと惟だ人情に合はず、物理に通せざらんことを恐る。不肖の者は姦險詐佞にして己に矜り能を逞しうし、慾を嗜み利を苟めて、一切顧みざるが故に禪林賢者を得て道德修し、㋖綱紀立す。遂に法席を成す。一の不肖の者を廁へて其の間に在かば、群を攪り衆を亂して、中外安からず。大智の禮法と雖も、縱ひ何の用かあらん。智愚賢不肖優劣此くの如き爾。烏んぞ擇ばざることを得ん焉。」㋗（惠力芳和尚書）

遠公曰く、「住持は上に居す、當に㋘謙恭にして以て下を接すべし。執事は下に在り、情を盡して上に奉へんことを要す。上下既に和するときは、則ち住持の道通ず。上に居するもの驕倨にして自ら尊く、下に在るもの怠慢にして自ら疎んじ、上下の情通せざるときは、則ち住持の道塞がる。古德の住持、閑暇無事にして學者と㋙從容議論して至らずと云ふ所靡し。是に由つて、一言半句の傳記に載せて、今に逮ぶまで之を稱す、其の故は何ぞや、一には上の情をして下に通せしめて、道に壅蔽無からんことを欲す。二には預め學者の才性の能否を知つて、其の進退の間に於て、皆其の宜しきに合ひ、自然に上下㋚雍肅し、㋛遐邇歸敬す。叢林の興ること、之に由つて致す耳」と。㋜（與二青華嚴一書）

遠公㊂道吾の眞に謂つて曰く、「學、未だ道に至らざれば、見聞を衒耀し、機解に馳騁す。口舌辯利を以て相勝る者は、猶ほ厠屋に㋝丹雘を塗汚するが如し、祇だ其の臭を增す耳」と。（西湖記聞）

遠公㋟演首座に謂つて曰く、「心は一身の主、萬行の本たり。心妙悟せざれば妄情自ら生ず、妄情既に生ずれば、見理明かならず、見理明かならざれば是非謬亂す。所以に心を治めんには、須らく妙悟を求むべし。悟るときは神和し、氣靜かにして容敬し、色莊かなり。妄想、情慮、皆融して眞心と爲る。此を以て心を治むれば、心自ら靈妙なり、然して後、物を導き迷を指す。孰れか化に從はざらん」と。（浮山實錄）

㋔持前といふこと。
㋕醇粹懿美端嚴敦厚といふことの略也。
㋖詩に曰く「勉々たる我が王、四方に綱紀たり。」政を爲すに喩ふ。綱器之を張るを綱といひ、之を理むるを紀といふ。
㋗惠力芳。玉泉謂芳は蜀の人にして、潙山遠禪師の法嗣也と、續傳燈卷九にあり、此の人歟。
㋘謙恭。易の繫辭に「德言盛、禮言恭也者、致恭以存二其位一者也」と。
㋙從容。從容は優游して迫らざるの貌にして、廣雅なる擧動、詳審閑雅なるの貌なり。

㋚雍肅。雍は和の義、肅は敬の意なり。
㋛千字文に遐邇體壹。書經太甲に「高きに升るが若し、必ず下きよりす、遐きに陟るが如し、必ず邇きよりす。」卽ち遠近と云ふこと。
㋜青華嚴。投子山の義青禪師は、大陽の玄禪師の法嗣なり、青社李氏の子にして入洛し、華嚴を聽き、義に通ずること、貫珠の如く、世に青華嚴と稱せり。
㋝道吾山の悟眞禪師は、石霜の圓禪師の法嗣なり。
㋞丹雘。雘は采色の名にして、說文に雘は善丹なりとあり、衡山に丹雘を出すと。書經に、「惟其塗丹雘(いろとす)」とあり。赤色也。
㋟演首座。白雲守端禪師の法嗣、五祖法演禪師にして、蘄州に

五祖の演和尚曰く、「今時の叢林、學道の士、聲名ならず、人の爲に信せらるゝに匪ざることは、蓋し㋙梵行清白ならず、人の爲に諦當ならざるが爲なり。輙ち或し苟も㋚名聞利養を求めて、乃ち廣く其の華飾を衒はば、遂に識者のために譏られん。故に其の要妙を蔽ふ。道德、佛祖の如くなること有りと雖も、聞見疑つて信せざらん。爾が輩、佗日、若し㋛把茅蓋頭を蓋ふことあらば、當に之を以て自ら勉むべし」と。（㋜佛鑑答㋝投子書）

演祖曰く、「㋟師翁、初め楊岐に住す、老屋敗椽、僅かに風雨を蔽ふ。適適、冬暮に臨んで雪霰床に滿ち、居處するに遑あらず、衲子誠を投じて修造に充らんことを願ふ。師翁之を却けて曰く、『我が佛言へることあり、減劫に當つて、㋡高岸深谷、變遷常ならず、安んぞ圓滿如意にして、自ら稱ひ足ることを求むることを得んと。汝等、出家學道のもの、手脚を做すこと未だ穩かならず、已に是れ四五十歲、詎ぞ閑工夫の豐屋を事とすることあらんや』と。竟に從はず。翌日上堂に曰く、『楊岐乍住屋壁疎なり、滿床盡く雪の眞珠を撒す。項を縮却して暗に嗟噓す、翻つて憶ふ古人㋣樹

㋙梵行。梵は清淨にして無欲なること、行は行業動作のこと。
㋚名聞。名利譽聞にして、慾識の所作に任すこと也。
㋛把茅蓋頭。寺院の住持となること。六祖壇經に、六祖神光を誡めて、「汝回後有二把茅蓋一レ頭、只成二個知解宗徒一」と。
㋜佛鑑。舒州太平慧懃佛鑑禪師は五祖法演の法嗣也。
㋝投子。青平投子の通禪師ならんか、蓋し、細門警訓に、此文を載せ、投子通に與ふと記せり。
㋟師翁。楊岐山方會禪師を指す、會は石霜圓の法嗣也。
㋡高岸深谷。詩に曰く、「高岸は谷となり、深谷は陵となる」と、山河風物の遷變遠なきを示す也。
㋣樹下居。四十二章經に曰く、「日中一食、樹下一宿、慎勿

住し、綿州鄧氏の子なり。

下の居』と。」（廣錄）

演祖曰く、「衲子㋠心城を守り戒律を奉じ、㋥日夜に之を思ひ、朝夕に之を行ふ。行ふこと思を越ゆることなく、思行に越ゆることなく、其の始有つて其の終を成す。猶ほ耕者の畔あるが如し、其れ過鮮し」と。

演祖曰く、㋦「所謂叢林は、聖凡を陶鑄し、才器を養育するの地、敎化の從つて出づる所なり。群居類聚すと雖も、率ゐて之を齊へしむ。各々師承あり、今諸方、先聖の法度を守ることを務めず、好惡偏情多く、己が是を以て物を革む。後輩をして當に何としてか法を取らしめん」と。（二事坦然集）

演祖曰く、㋧「利生傳道は、務めて人を得るに在り、而して人を知るの難きことは、聖哲も病める所なり。其の言を聽いて未だ其の行を保せず、其の行を求めても恐らくは其の才を遺れん。素より與に交遊して備に本末を詳かにして、其の志行を探り、其の器能を觀て、然して後、道を守り用を藏す者に非ざるよりは、得て知るべけんや。名を沽り、貌を飾る者、其の僞を容れず、縱ひ其の潛密なるも、亦淵源を見る。夫れ覩探詳聽の理、固に一朝一夕の能する所に非ず。所以に㋨南嶽の讓、大鑒

再レ矢」と。

㋠心城。周諺に曰く、「衆心を城と爲す」と、衆心の好む所、之を能く敗ることなし、其の固きこと城の如きに譬ふ。

㋥日夜思之云云。この以下は、左傳襄公二十五年の條にあり。此言は、千載の語也。

㋦此段に於ては叢林古規に從つて、宜しく才器を養成すべきを明す也。

㋧利生傳道。利益衆生、傳二祖道一の略。

に見えて後、猶ほ執侍すること十五秋、馬祖、讓に見ゆるの時も亦相從ふこと十餘載なり。是に知んぬ、先聖授受の際、固に淺薄の敢て傳持する所に非ず、㋐一器の水を一器に傳ふるが如く、始めて克く㋑洪規を紹ぐに堪へたり。㋒當家の種草の如きは、此れ其の觀探詳聽の理明驗なり、豈㋓巧言令色、便僻諂媚を容れて選に充つる者ならんや」と。㋔（圜悟書）

演祖曰く、「住持の㋕大柄は㋖惠と㋗德とに在り、二つの者、兼行つて一を廢つれば不可なり、惠あつて德罔きときは人敬はず、德あつて惠罔きときは人懷かず。苟も惠の懷くべきを知り、其の德を加へて以て相濟さば、則ち敷く所の惠、適に以て上下を安んじ、四來を誘くに足らん。苟も德の敬すべきを規つて、其の惠を加へて以て相資くるときは、則ち持つ所の德、適に以て先覺に紹ぎ、愚迷を導くに足らん。故に善く住持する者は、德を養つて以て惠を行じ、惠を宣べて以て德を持つべし。德あつて能く養ふときは屈せず、惠あつて能く行ふときは恩あり。是に由つて德と惠と相蓄へ、惠と德と互に行ず。此くの如くならば則ち德、修することを用ひずして、敬すること佛祖に同じく、惠、費すことを勞せずして懷くこと父母の如くならん。斯れ則ち㋘湖海道に志す者あらば、孰か來歸せざらん。住持は將に道德を傳へ敎化を興さんとす。斯の要を明らめずんば之を行ふこと莫けん」と。（與二㋙佛眼一書）

演祖、海會より東山に遷る、太平の佛鑑、龍門の㋚佛眼、二人山頭に詣つて省覲す。祖、耆舊主事を集め、湯菓を備へて夜話す。祖、佛鑑に問ふ、「舒州熟するや否や。」對へて曰く、「熟せり。」祖曰く、「太平熟するや、否や。」對へて曰く、「熟せり。」祖曰く、「㋛諸莊共に稻を收むること多少ぞ。」佛鑑、籌慮する間、祖、色を正し、聲を勵まして曰く、「汝、濫りに一寺の主と爲り、事巨細と無く悉く心を究めんことを要す。常住の歲計、一衆の係る所なり、汝猶ほ知ること罔し、其の他の細務は言はざるに見つべし。山門の執事は、因を知り果を識る。㋜師翁の㋝慈明師祖を輔くるが若くなるをや。汝、常住の物重きこと山の如しと思はずや」と。㋞蓋し、演祖、尋常機辯峻捷なり、佛鑑既に弟子の禮を執る、應對含緩すること、乃至ち是くの如し。古人の云く、「師、嚴にして然して後學ぶ所の道尊し」と。故に

㋐南豐見大鑒。傳燈五、南岳懷讓禪師の章に、「師嘗然契會、執二侍左右一十五載一」とあり。
㋑一器水。經曰、「阿難領受佛法、如レ寫二瓶水一傳二之別器一、更無二遺餘一、瓶器雖レ殊、水則無レ別」とあり。
㋒洪規は尙ほ大法といふが如し。
㋓當種。禪門下の法種といふこと。
㋔巧言令色。巧は好、令は善也、外に飾りて、內に實實の心なき也、卽ち姦邪也。
㋕圜悟。圜悟は成都、昭覺寺の克勤佛果禪師にして、五祖演禪師の法嗣也。
㋖大柄。禮なり、禮記に、「禮者君子之大柄也」と。
㋗恩を以て人に及ぼすこと。
㋘敬を以て身を修むること。

㋙湖海。
五湖（太湖、謝陽湖、洞庭湖、丹陽湖、宣亭湖）
四海（九夷、八狄、七戎、六蠻）
天下至る所といふに同じ。
㋚佛眼。舒州龍門の清遠佛眼禪師は、五祖法演禪師の法嗣なり。
㋛五祖法演禪師の法嗣、舒州龍門寺の清遠佛眼禪師。
㋜村々の寺領田のこと。
㋝師翁。楊岐方會禪師を指す。
㋞慈明。汾陽昭禪師の法嗣にして、西河の師子と號し、法席盛にして、道風一時に天下を靡かす。南原に住するや、楊岐よく之を輔けたり。
㋟以下、耿龍學の評語なり。而して、師嚴以下の括弧內の句は、禮記の語なり。

東山門下の子孫、賢德にして超邁なる者多し、誠に源遠うして流長し。

（㋛耿龍學與㋐高庵書）

演祖、㋑祢子の節義あつて立つべき者を見ては、室中峻拒して㋒辭色を假さず、其の偏邪諂佞、爲す所猥屑にして敎ふべからざる者を察して、愈々愛重を加ふ。人皆測ること莫し。烏乎、蓋し祖の取捨必ず道あるをや。

（耿龍學致法語）

演祖曰く、「㋓古人、己が過を聞かんことを樂び、善を爲すことを喜ぶ。荒を包るに長じ、惡を隱すに厚し。謙にして以て友に交り、勤めて以て衆を濟ふ。得喪を以て其の心を貳にせず、所以に光明碩大にして今昔に照映す」と。（答㋔靈源書）

演祖、佛鑑に謂つて曰く、「住持の要は、衆に臨んで貴きこと豐盈に在り、己に處すること務めて簡約に從ふ、其の餘の細碎は悉く心に關すること勿れ。人を用ふることは、深く以て誠を推せ、言を擇ぶには故に須らく重を取るべし。言重せらるゝときは主者自ら尊し、人、誠を推すときは衆心自ら感ず。尊ぶときは嚴ならざれども衆服す、感ずるときは令せざれども事成る。自然に賢愚、各々其の懷を通じ、小大皆其の力を奮ふ。夫の持するに勢力を以てして、驅喝に迫つて已むことを得ずして之に從ふ者と、何ぞ啻に萬倍のみならんや」と。（與㋕佛鑑書見㋖蠻侍者自錄）

演祖、㋗郭功輔に謂つて曰く、「人の性情は、固に常の守り無し、化に隨つて日に遷る。古より佛法、隆替、數ありと雖も、興衰の理、未だ敎化に由つて成らずと云ふことは有らず。昔し㋘江西㋙南嶽等の諸祖の物を利するや、扇ぐに淳風を以てし、節するに清淨を以てし、被らすに道德を以てし、敎ふるに禮義を以てして、學者をして視聽を收め、邪僻を塞ぎ、嗜慾を絶つて利養を忘せしむ。所以に日に善に遷つて過を遠ざく、道成り德備つて自ら知らず。今の人、古の人に如かざること遠し。必ず此の道を參究せんと欲せば、志を確うし、易ふること勿うして、悟を以て期と爲さんことを要須して、然して後に禍患、得喪、之を㋚造物に賦す。苟も免るべからず、豈預め其の成らざらんことを憂へて、之を爲さざるべけんや。纔に絲毫の顧慮あつて胸中に萌さば、獨り今生に了せざるのみにあらず、以て千生萬劫に至るまで、

㋛耿龍學。耿は南仲といひ、開封府の人也、高宗、龍圖閣の直學士を以て寶州に列せしむ。

㋐高庵。佛眼遠の法嗣、雲居の高庵の善悟禪師也。

㋑此の一段は宗匠の、衆に接すること凡見を以て測るべからざるを示す。

㋒不假辭色。辭は悲愛の義、色は顏貌也。愛するの顏色を出さざる也。

㋓此一段は古人、心、常に道にあり、境を以て心を變ぜざるを明す也。

㋔靈源。黃龍心の法嗣に、隆興府の黃龍靈源惟清禪師あり、その零墨を集めたるものに、靈源筆語あり、本國譯叢書第二卷に收む。

㋕郭功輔。白雲守端禪師の法嗣、提刑郭祥正、字は功輔、淨空居士と稱す。

㋖江西の道一禪師（馬祖）、南嶽の嗣也。

㋗六祖惠能禪師の嗣、懷讓禪師。

㋚造物。天地自然に任す。

成就すること有るの時無からん。」（坦然庵集）

功輔、㊀當塗（太平州）より江を絶つて㊁白雲の端和尚を海會に訪ふ。白雲問うて曰く、「公の牛淳なりや。」公の曰く、「淳なり。」白雲之を叱す。公、拱きして立てり。白雲曰く、「淳なりや、淳なりや、㊅南泉、㊆大潙も之に異なること無し。」仍つて贈るに偈を以てす。曰く、

『牛山中に來る、水足り草足る、牛山を出で去る、東に觸れ西に觸る。』

又曰く、

『㊇上大人化三千可知禮也。』（行狀）

白雲、功輔に謂つて曰く、「昔し㊈翠巖眞點胸といふもの、禪觀を耽味して、口舌辯利を以て諸方を呵罵し、未だ其の意を可す者あらず。大法、實に明了せず、一日㊉金鑾の善侍者、見て咲つて曰く、『師兄、參禪多しと雖も、而も妙悟にあらず、癡禪と謂つべし』と。」（白雲夜話）

㊀當塗。本漢の丹陽縣の地にして、宋時代には、太平州の地にあり。

㊁白雲端。楊岐會の法嗣、舒州白雲の守端禪師也。

㊅南泉。南泉普願禪師、願世せんとし、第一坐、泉に「師の百年後、什麼の處にか去らん」と問ふや、泉、「山下の一水牯牛たるべし」といふや、第一坐、「某、和尚に隨ひ去らん」と、泉、「汝、若し共に去らば、一束草を咄取り來れ」と。

㊆大潙。潙山の傳は、本叢書中の禪家求國課に詳しく出づ。潙山、上堂示衆に曰く、「某僧百年の後、山下に向つて、一頭の水牯牛とならん」云々と。

㊇異朝に始めて小童に教ふるに、「上大人丘乙巳化三千七十子爾小生八九子可作仁可知禮也」といふ。上大人とは上古

白雲曰く、「道の隆替、豈常ならんや、人の之を弘むるに在るのみ。故に曰く、㊋『操るときは存し、捨つるときは亡ず』と。然らば道、人を去るに非ず、人、道を去るなり。古人山林に處し、朝市に隱れて名利に牽かれず、聲色に惑はされず、遂に能く清一時に振ひ、美萬世に流はる、豈古の爲すべくして今の爲すべからざらんや。教の未だ至らず、行の力めざるに由るのみ。或ひとの曰く、『古人淳朴なるが故に教ふべく、今人浮薄なるが故に教ふべからず』と。斯れ實に鼓惑の言なり。誠に稽ふるに足らず」と。（答二功輔一書）

白雲、㊌無爲子に謂つて曰く、「言ふべくして行ふべからずんば、若かず言ふこと勿らんには。行ふべくして言ふべからずんば、若かず行ふこと勿らんには。言を發して必ず其の終る所を慮り、行を立つることは必ず其の蔽はる所を稽ふ。是に於て先哲、言や謹み行を擇ぶ。言を發することは、苟も其の理を顯はすのみに非ず、將に學者の未悟を啓かんとす。行を立つることは㊍獨り其の身を善くするのみに非ず、將に學者の未成を訓へんと

の大聖人なり、丘乙巳とは孔丘一人のみ、化三千とは門徒三千人を教化する、七十子とは達者七十人、爾小生、八九子とは爾等小童八九輩、可作仁、可知禮也とは、丘の達者の如き五常を知るべしと云ふことなり。

㊈翠巖眞。洪州翠巖可眞禪師は、石霜圓の法嗣也、眞默智といへり。この以下の話は、續傳燈の七にも、亦、僧寶傳廿一慈明の章にも出づ。

㊉金鑾善侍者。羅湖野錄に、福州資福の善禪師は古田の人、姓は陳氏、里中の風林に出世し、資福に遷る、碌々として聞ゆるなしと雖も、宗門の先達なり、此一節は、よく彼の面目を表はす。

㊋此一句は、孟子告子にあり、「操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂歟」と。

す。所以に言を發するに㋙類あり、行を立つるに禮あり、遂に能く言、禍を集めず、行、辱を招かず。言ふときは則ち經と爲り、行ふときは則ち法と爲る。故に曰ふ、『言行は乃ち君子の樞機、身を治むるの大本なり』と。天地を動し、鬼神を感ず、敬せざることを得んや」と。（白雲廣錄）

白雲、演祖に謂つて曰く、「禪者の智能多く已然を見て未然を見ること能はず、㋚止觀定慧は未然の前に防ぎ、作止任滅は已然の後に覺ゆ。故に㋛作止任滅の用ふる所見やすく、止觀定慧の爲すところ知り難し。惟だ古人は志、道にあつて念を未萌に絶す。止觀定慧、作止任滅ありと雖も、皆本末の論となる。所以に云く、㋜『若し毫端許りも本末を言ふものあらば、皆自ら欺くと爲す、此れ古人見徹の處にして自ら欺かず』と。」（實錄）

白雲の曰く、「多く衲子を見るに、未だ嘗つて遠大の計に經及せず、予の恐るるは、叢林此れより衰薄ならんことなり。楊岐先師、毎に曰く、『上下安を偸む、最も法門の大患と爲す』と。予、昔歸宗の書堂に隱居して經史を披閲す、曾だ數百、目を過ぐるのみにあらず、其の簡編蔽故を極めぬ。然も卷を開く毎に、必ず新獲の意あり、予、是を以て之を思ふに、學人を負かざること此くの如し」と。（白雲實錄）

白雲、初め㋝九江の承天に住し、次に圓通に遷る、齒甚だ少し。時に、㋞晦堂、寶峰に在り、㋟月公、晦に謂つて曰く、「新圓通、㋠見元に洞徹す、楊岐の嗣を忝しめず、惜しいかな、㋡用を發すること太だ早し、叢林の福に非ず」と。公、晦、因つて其の故を問ふ、晦堂の曰く、「功名の美器、造物之を惜しむ、人に全きことを與へず、人固に之を欲すれば、天必ず之を奪ふ」と。白雲の舒の海會に終るや、方に四十八歲なり。識者の謂く、晦堂、機を知つて徹を知る、眞の哲人なり」と。（㋢湛堂記聞）

晦堂の心和尚、月公晦に寶峰に參す、公晦楞嚴深旨を洞明して海上に獨歩す。晦堂一句一字を聞く毎に㋣至琦を獲るが如く喜び自ら勝へず。衲子の中、間竊議するものあり、晦堂之を聞いて曰く、「彼の所長を扣いて我が

㋙無爲子。楊傑、字は次公、禮部員外郎たり、潤州に出で、兩浙の提點に除せられ、刑獄に卒す、年七十、自ら無爲子と號す、天衣の懷の法嗣なり。

㋚獨善其身。孟子に曰く、「窮則獨善二其身一、達則兼善二天下一」と。

㋛法に同じ。

㋜止觀定慧。實相は體寂なり、元靜に因つて乃ち止といふ、本覺は靈照なり、常明に由るが故に觀といふ。三昧を定といひ、慧は智慧を云ふ。

㋝作止任滅。圓覺經の四に四病を擧ぐ、「作病、任病、止病、滅病」是なり、善智識の所證は、この四病を離るゝを以つてなすものなり。

㋞若有毫端云々。此一句は、德山の上堂の示衆の語にして、傳燈に出づ。

㋝九江。九江は一統志に依れば、東は直隸池州府東流縣、西は湖廣武昌府興國州、南は南康府の星子縣、北は湖廣、黃州府の黃梅縣に到る間を指すと。

㋞晦堂。洪州黃龍の晦堂寶覺祖心禪師は、南雄の人にして、黃龍南の法嗣也。

㋟月公。洪州勝潭の曉月禪師は瑯琊覺の法嗣也。

㋠見元。見性のこと、人性の本元を發見するが故にいふ。

㋡用。ゆうとよむ、接化濟度、即ち住持となることなり。

㋢湛堂。寶峰文の法嗣に、勝潭文準禪師は湛堂と號せり。

㋣完全なる璧をいふ、琦は寶の古字。

㋤英邵武。黃龍禪師の嗣、洪州勝潭の洪英禪師、姓は陳氏、邵武軍の人なり、故に英邵武と稱せらる。

㋥自廣云々。自ら誇ること、倘

所短を礪す、吾何ぞ慊みん」と。㋐英邵武が曰く、「晦堂師兄道學禪衲の爲めに宗とせられ、猶ほ尊德自勝を以て强しとなし、未見未聞を以て媿と爲し、叢林㋑自廣として人を狹くする者をして㋒矜式する所あらしむ、小補ならんや。」（靈源拾遺）

晦堂の曰く、「住持の要、當に其の遠大の者を取り、其の近小の者を略し、事固に未だ決せざれば、宜しく㋓老成の人に㋔諮詢すべし。尙ほ疑はしくば更に識者に扣問せよ、縱ひ未だ盡さゞるものありとも、亦甚だしきことを致さず。其れ或は主者好んで私心を逞しうして專り自ら取與せんに、一旦小人の謀る所に遭はば、罪將に誰にか歸せんとす。故に曰く、『謀は多きにあり、斷ずることは獨りにあり、之を謀ること多きに在れば、以て利害の極致を觀るべし。之を斷ずること我れに在れば、以て叢林の是非を定むべし』と。」（與㋕草堂書）

晦堂、潙山の請に赴かず、㋖延平の㋗陳瑩中、㋘移書して之を勉めて曰く、「古人の住持は職事なし、有德の者を選んで之に居らしむ。是の任に當る者は、必ず將に斯の道を以て斯の民を覺さんとす、終に勢位聲利を以て之が爲めに變せず。今の學者、大道未だ明かならず、各々異學に趨つて名相に流入す。遂に聲色の爲めに動され、賢不肖、雜糅して別白すべからず。正に宜しく老成の者の㋙惻隱存心の時なり、道を以て自任すべし。㋚百川を障回せんこと、固に難きこと無し。夫の退いて靜謐を求め、務めて安逸に在るが如きは、此れ獨り其の身を善くする者の好むところなり。叢林、公に望む所以のものに非ず」と。（靈源拾遺）

晦堂一日㋛黃龍の㋜不豫の色あるを見て、因に逆つて之を問ふ。黃龍の曰く、「㋝監收、未だ人を得ず」と。晦堂、遂に㋞感副寺を薦む。黃龍曰く、「感尙ほ暴なり、恐らくは小人の爲に謀られん。」晦堂曰く、㋟「化侍者稍廉謹なり。」黃龍謂く、「化は廉謹なりと雖も、㋠秀藏主の量あつて忠なるには若かず」と。靈源、嘗つて晦堂に問ふ、「黃龍一監收を用ふるに、何ぞ過慮すること此くの如くなるや。」晦堂曰く、「國を有ち家を有つ者、未だ嘗つて此に本づかずんばあらず、豈に特り黃龍のみ然りとせんや、先聖も亦曾つて之を戒しむ」と。（遺庵壁記）

書の語也。

㋒矜式。矜は敬也、式は法也、模範とすること也。

㋓老成人。書の毅庚に、「汝無レ侮二老成人一」とあり、詩經の注に「老成人は舊臣也」とあれど、今は先輩の意也。

㋔諮詢。詩經に、諮を咨に作る、同じ也、承り尋ねること也。

㋕草堂。續傳燈二十二に曰く、「晦堂心禪師の法嗣、隆慶府勝潭草堂善清禪師は南雄州何氏の子なり」と。

㋖延平。東は建寧府建安縣、西は汀沙府清流縣、南は福州府古田縣、北は邵武府邵武縣に至る。

㋗陳瑩中。宋史列傳に陳瓘、字は瑩中、南劍州沙河の人也。

㋘移書。移は易也、我情を以て、彼の意を移し易ふる也とあり。

㋙惻隱。惻は傷の切なり、隱は痛の深き也。惻隱の心は仁の端也と。

㋚障回百川。退之、進學の解に曰く、「障二百川一而東、之瀾二狂瀾於旣倒一」となり。

㋛黃龍。黃龍南禪師は章氏、諱は惠南、石霜圓の法嗣也。

㋜不豫。豫は悅なり、不豫は不悅なり。

㋝監收。監を主る役。

㋞感副寺。福嚴の感感禪師、黃龍の嗣也。

㋟化侍者。隆慶府、雙嶺化禪師は黃龍晦堂心の法嗣也。

㋠秀藏主。大潙の懷秀禪師は、黃龍南の法嗣也。

晦堂、㋐朱給事世英に謂つて曰く、「予、初め道に入る、自ら甚だ易きことを恃む。黄龍先師に見ゆるに逮んで後、退いて日用を思ふに、理と矛盾するもの極めて多し、遂に力めて之を行ふこと三年、㋑初寒、溽暑と雖も志を確くして移さず、然して後、方に事々、理の如きことを得て、今に咳唾、掉臂も也た是れ㋒祖師西來意たり」と。（章江集）

㋐朱世英、晦堂に問うて曰く、「君子、不幸にして小さき過差あれば、聞見之を指目して暇あらず、小人終日惡を造るも以て然りとせず、其の故は何ぞや。」晦堂の曰く、「君子の德は美玉に比す、瑕、内に生ずることあれば、必ず外に見はる、故に見る者異なりと稱す、指目せざることを得ず。夫の小人の如き者は、日用の所作、過惡に非ずと云ふことなし、又安んぞ用つて之を言はん。」（章江集）

㋑晦堂の曰く、「聖人の道は天地の萬物を育つるが如し、道に備はらざる者あることなし。衆人の道は、江河、淮濟、山川陵谷、草木昆蟲の如し。各々其の量を盡すのみ。知らず、其の外備はらざるものあることなきことを。夫れ道豈に二つあらんや、猶ほ之を淺深に得て、成ること小大あるのみ」と。（答㋓張無盡書）

㋐朱給事。朱庭傑、字は世英、給事は官名也。朱は永嗣の人、崇寧中、進士に登る。給事は、黄門侍郎にして、六百石を領し、侍從となり、王室内外の事務を司る役也。

㋑初は大なり、溽は濕なり。

㋒佛法、即世法と一致するをいふ。

㋓此段の主意は、君子小人と同意ならざるを明す也。

㋔此の一章は、大道は天地の極致と同じく其の缺なきを示す。

㋒晦堂の曰く、「久廢は速かに成るべからず、積蔽は頓かに除くべからず、優游は久しく戀ふべからず、人情は能く恰好ならず、禍患苟も免るべからず。夫れ善知識となつて此の五事に達せば、世を涉ること悶りなかるべし」と。（與㋔祥和尚書）

晦堂の曰く、「先師、進止嚴重にして、見るもの敬畏す。衲子、事に因つて請暇す、多く峻しく拒んで從はず。惟だ親老に省侍することを聞いては、氣色穆然として顏面に見はれ、禮を盡くして津遣す。其の人の恭孝なるを愛すること此くの如し」と。（與㋕謝景温書）

晦堂の曰く、「黄龍先師、昔㋖雲峰の悅和尚と同じく、荆南の鳳林に夏居す。悅、辯論を好む。一日衲子と喧すしきことを作す。先師、經を閲すること自若にして閑見せざるが如し。已にして、悅、先師の案頭に詣つて目を瞋らして、之を責めて曰く、

㋓張無盡。張商英、字は天覺、蜀州新津の人、兜率の悅に嗣法して、大に護法論を著はす、本叢書にも是を收む、就いて見るべし。

㋔本章には住持の處世の用意を示す、古人の大法に對することを、亦斯くの如きを知る。

㋕祥和尚。勅潭景祥禪師か、若し同師とせば、眞如慕菴の法嗣なり。

㋖謝景温。字は師直といふ。宋史列傳五十四に詳し。

㋗雲峰。南嶽の雲峰文悅禪師は、大慈芝禪師の法嗣也。

『爾、此に在つて善知識の量度を習ふや』と。先師、稽首して之を謝し、經を閲すること故の如くなりき。」（已上並見三藪源拾遺）

㊀黄龍の南和尚の曰く、「予、昔文悅と同じく湖南に遊ぶ。衲子の籠を擔つて行脚するものを見て、悅、驚異㊁蹙頞し、已にして呵して曰く、『自家㊂閻閣中の物、肯へて放下せず、返つて累はしく他人の擔分に及ぶ。無乃太だ勞するをや』と。」（㊃林間錄）

㊄黄龍の曰く、「住持の要は衆を得るにあり、衆を得るの要は情を見るにあり。先佛の言く、『人情は世の福田たり、蓋し理道、由つて生ずる所なり。故に時の㊅否泰、事の損益、必ず人情に因る。情に通塞ある時は、則ち否泰生ず、事に厚薄ある時は、則ち㊆損益至る。惟だ聖人、能く天下の情に通ず。故に易の卦を別つ。乾下坤上なる時は、則ち泰と曰ふ。乾上坤下なる時は、則ち否と曰ふ。其の象を取ること、上を損し下を益するをば、則ち益と曰ひ、下を損し上を益すをば、則ち損と曰ふ。夫れ乾は天たり、坤は地たり。天、下にあつて、地、上に在るは、位故に乖けり。而して返つて之を泰と謂ふことは、

㊀此の章の大意は、學道は、須臾も放下すべからざるを明す。
㊁顰をしかむること。
㊂自己の妄想執着をいふ。閻閻は元來、家中の小門をいふ也。
㊃林間錄。木叢書、第二卷に收む、就いて見るべし。
㊄大意は上下相交はりて諸事整一なり、即ち和合を示す。
㊅䷊乾下坤上、泰。天地相通じて、萬物の生ずるをいふ。䷋坤下乾上、否。天地相隔絶して、交通し難きをいふ。
㊆䷩震下巽上、益。風雷相助く、益といふ。上を損し、下を益する也。䷨巽下艮上、損。上を益し、下を損する也。

は、上下交る故なり。主は上に在つて、賓下に處る義故に順ふ。而して返つて之を否と謂ふことは、上下交らざる故なり。是を以て天地交らざれば庶物育たず、人情交はらざれば萬事和せず、損益の義も亦是れに由る。夫れ人の上に在る者は能く己を約かにして、以て下を裕かにすれば、下、必ず悅に上に奉ず、豈に之を益と謂はざらんや。上に在る者、下を蔑にして、諸れを己に肆にすれば、下必ず怨んで上に叛す、豈に之を損と謂はざらんや。故に上下交る時は則ち泰なり、交らざる時は卽ち否なり。自ら損する者は人益す、自ら益する者は、人損するは情の得失なり、豈に容易ならんや。㊇先聖嘗つて喻ふるに、人を舟と爲し、情を水となす、水能く舟を載すれども亦能く舟を覆へす、水、順ふ時は舟浮ぶ、違ふ時は則ち沒す。故に住持の人、情を得る時は則ち興し、人情を失ふ時は、則ち廢たる。全く得て全く興し、全く失つて全く廢す。故に善に同じき時は、則ち福多し、惡に同じき時は、則ち禍甚だし。善惡類を同じうす、㊉端しきこと貫ける珠の如し、興廢、行を象る、明かなることを日を觀るが如し、斯れ歷代の㊉元龜なり」と。（與㊈黄

㊇先聖喻。家語の五儀に、「夫れ君は舟也、庶人は水なり、水は舟を載するところ、亦、舟を覆す所以なり。」
㊉端如貫珠。禮記の樂記に、「居れば矩に中り、勾れば鈎に中る、累々乎として、端しきこと貫珠の如し。」
㊉元龜。龜は卜なり。元龜の熟語は、書の大禹謨にあり。
㊈黄檗勝。黄龍南の法嗣に、端州黄檗惟勝禪師をいふ。

黄龍、㊀荆公に謂つて曰く、「凡そ心を操り、爲す所の事、常に面前路徑、開濶にして一切の人をして行ひ得せしめんと要せば、始めて是れ大人の用心なり。若し也た險隘にして通ぜずんば、獨り他人をして行ふこと能はざらしむるのみならず、自家を兼ねて亦足を措くの地なけん」と。（章江集）

㊁黄龍の曰く、「夫れ人の語默舉措、自ら謂へり、上、天を欺かず、外、人を欺かず、内心を欺かずと。誠に之を得たりと謂つべし。然れども猶ほ獨居隱微の間に戒め謹んで、果して纖毫も欺く所無くんば、之を得たりと謂つべし」と。（答荆公書）

黄龍の曰く、「夫れ㊂長老の職は乃ち道德の器なり。先聖、叢林を建て、紀綱を陳ね、名位を立て道德あるの衲子を選び擇びて、之を命じて長老と曰ふ事は、將に其の道德を行はんとす、苟も是の名を竊むに非ず。慈明先師、嘗つて曰く、『其れ道を守り、丘壑に老死せんよりは、若かじ道を行じて衆を叢林に領せんには』と。豈に善く長老の職を守る者に非ずんば、則ち佛祖の道德存せんや」と。（與三聚岩眞書）

㊀荆公。黄峰の法嗣、王安石荆州の知事也、字は介甫、王安石といふ。
㊁此の章は人は明暗、ともに心身一致の行爲を爲すべきを明す也。
㊂長老に三つあり、卽ち耆年、長老、年臈多きもの。法長老、法性に了達し内に智德あるもの。作長老、假に之を號するのみ。三長老とは是なり。

黄龍、隱士㊃潘延之に謂つて曰く、「聖賢の學は㊄造次に成るべきにあらず、須らく積累にあるべし、積累の要惟だ專と勤となり、嗜好を屏絶して之を行じて倦むことなかれ、然して後擴めて之に充たしむ、天下の妙を盡しつべし」と。（龍山廣錄）

㊃潘延之。倘寶傳によれば、黄龍章南州の高士潘延之、字は興嗣、嘗つて黄龍に見えて、法要を問へることあり。
㊄造次。急に成すこと、暫時のいひなり。

❶潘延之、黄龍の法道嚴密なるを聞いて、因つて其の要を問ふ、黄龍の曰く、「父、嚴なる時は則ち子敬ふ。今日の規訓は後日の模範なり。諸を地を治むるに譬ふ。隆きものをば之を下くし、窪かなるものをば之を平にす。彼れ將に千仞の山に登らんとす、吾れも亦之と俱にし、困じて九淵の下に極まれば、吾れも亦之と俱にす。伎これ窮まり、妄之盡きて、彼れ則ち自ら休す」と。又曰く、「之を㊅姁し、之を㊆嫗す、春夏の生育する所以なり。之を霜にし、之を雪にす、秋冬の成熟する所以なり。㊇吾れ言なからんと欲せば可ならんか」と。（林間錄）

黄龍、室中に㊈三關の語あり、衲子其の機に契ふ者すくなし、脫し訓對することあれば、惟だ目を斂めて危坐す、殊に可否することなし。延之益

❶本節の大意は、師の接衆は天地の萬物を發育するの理と同じかるべきを示す。
㊅姁を以てするを姁といふ。
㊆嫗を以てするを嫗といふ。
㊇自然の發育に放任すればよけれども、然も末世根機下劣なる故、老婆心を以て斯く諄々として敎ふるなりといふ意。
㊈雲臥紀談に、黄龍南禪師、平時學者の來るを見れば、必ず生緣、佛手、驢脚の三關を以て問ふ、叢林名づけて、黄龍の三關といふ、嘗つて三頌を發明して、その宗旨を明かにせりと。

益之を扣く、黄龍曰く、「已に關を過ぐる者は臂を掉つて去る、關吏に從つて可否を問ふ、此れ未だ關を透らざるものなり」と。（林間錄）

㋐黄龍曰く、「道は山の如く、愈々昇れば愈々高し。地の如く、愈々行けば愈々遠し。學者、卑淺にして其の力を盡して止むのみ。惟だ道に志すものあれば、乃ち能く其の高遠を窮む、其の他は孰れか焉れに與せん」と。（記聞）

㋐黄龍曰く、「古への天地日月も、猶ほ今の天地日月の如し、古への萬物性情も、猶ほ今の萬物性情の如し。天地日月固に易ることなし、萬物性情、固に變ずることなし、道、胡爲ぞ變せんとするや。嗟、其れ未だ至らざるものは故きを厭ひ新しきを悅ぶ、此を捨てゝ彼れを取る、猶ほ越に適くものゝ南に之かずして北に之くが如し、誠に人に異なりと謂つべし。然も徒に其の心を勞し、其の身を苦しめば、其の志愈々勤むれども、其の道愈愈遠からん。」（㋔遁庵壁記）

㋐本章には學道高遠なり、一意專心に之を窮むべきを示す。
㋐此章の大意は、大道は一貫なり、古今不變の理を示す。
㋔遁庵。荊南府公南の遯庵祖珠禪師は南平の人にして、萬庵顏の法嗣なり。

黄龍、英邵武に謂つて曰く、「志は當に一に歸すべし、久しうして退くことなくんば、他日必ず妙道の歸する所を知らん。其の或は心に好惡を存し、情に邪僻を縱にせば、志氣古人の如くなることありと雖も、予、恐らくは終に其の道を見ることを得じ」と。（壁記）

寶峰英和尙曰く、「諸方の老宿、先覺の語言、拈提、㋓公案を批判す、猶ほ土を捧つて太山に培ひ、水を掬して東海に沃ぐが如し。然れども彼れ豈に此に賴つて以て高深と爲さんや。其の志を觀るに之を益するに在り、而も自ら其の當に非ざることを知らず」と。（廣錄）

英邵武、每に學者の恣肆にして因果を懼れざるを見て、嘆息すること久しうして曰く、「㋒勞生は旅泊の如し、住する時は則ち緣に隨ひ、去る時は則ち亡す、彼の所得能く幾何ぞ。爾が叢、廉耻を識らず、名分を干し犯し、宗敎を汚し瀆すこと乃至是くの如し。大丈夫、志、祖道を恢弘し、後來を誘掖するにあり。私かに己が欲を擅にして避忌する所なくして、一身の禍を媒し、萬劫の殃を造るべからず。㋐三途、地獄に苦を受くるものをば未だ是れ苦とせず、㋖袈裟

㋓公案。山房夜話によれば公案とは、公府の案牘に喩ふ、法の所得を檢するに用ふる言句なりと。公は天下其の理を同じうするの至理、案は聖賢の理とするを記する文をいふ也。
㋒勞生。大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てす、人生といふに同じ。
㋐三途。火途—(地獄)刀途—(餓鬼)血途—(畜生)
㋖袈裟下云々。僧と爲つて大事を明めざる、之を最苦となすこと。

下に向ふて人身を失却するを實に苦と爲すなり」と。（壁記）

㊀英邵武、晦堂に謂へらく、「凡そ善知識と稱しては、佛祖を助けて化を揚げ、衲子をして心を廻らして道に向はしめ、風を移し俗を易へしむ、固に淺薄のもの、能くする所にあらず。末法の比丘、道德を修せず、節義あること少し、往々に㊁苟苴骯髒として尾を搖して憐みを乞ひ、聲利を權勢の門に追求す。一旦業盈ち、福謝して天人之を厭ふ、正宗を玷汚して、師友の累を爲す、太息することを得たり」と。晦堂之を頷す。（靈源拾遺）

㊂英邵武、潘延之に謂つて曰く、「古への學者は心を治む、今の學者は跡を治む。然れども心と跡と相去ること霄壤なり」と。

英邵武、㊃眞淨の文和尚に謂つて曰く、㊄「物暴かに長ずるものは必ず夭折し、功速かに成る者は必ず壞し易し、久長の計を推さずして、卒成の功を造すは、皆、遠大の資に非ず。夫れ天地は最靈なり、猶ほ五載再閏の如し、乃ち其の功を成し其の化に備ふ。況んや大道の妙、豈に倉卒にして

㊀此章にては、比丘の弊風を呵して、正道の尊貴を示す。
㊁懷勢の門に包みものを持參し、門に立つて伺ひ立つ樣千。
㊂此一節にては、古今の人の奉道の差異を示す。
㊃眞淨文。洪州淨潭の眞淨克文禪師は、黃龍南の法嗣。
㊄此の垂誡の主意は大事を成ずるは、積功累德に在ることを明し、幷に、刻苦勵志、道の爲めに不惜身命なる可きを示す。

能く辨せんや、要は積功累德にあり。故に曰く、『速かならんと欲する時は、則ち達せず、細行なる時は、則ち失せず。美の成ることは久しきにあり、遂に終身の謀あり』と。㊅聖人の云く、『信、以て之を守り、敏、以て之を行ひ、忠、以て之を成す時は、事、大なりと雖も必ず濟る』と。」

昔、㊆喆侍者、夜坐して睡らず、圓木を以て枕と爲す、小かに睡れば、則ち枕轉ず、覺めて復た起き、安坐すること故の如し、率ね以て常と爲す。或人の謂く、「用心太だ過ぎたり。」喆曰く、「我れ㊇般若に於て緣分素薄し、若し刻苦勵志せずんば、恐らくは安習の爲めに牽かれん、況んや夢幻眞ならざるをや、安んぞ久長の計を爲すことを得ん」と。予、昔、湘西にあつて、其の操履此くの如くなるを日擊す、故に叢林、其の名に服し、其の德を敬して之を稱す。（靈源拾遺）

㊈眞淨文和尚、久しく黃龍に參ず、初め「人前に出でず」と云ふの言あり、後、洞山の請を受けて、道、㊉西山を過ぐ。㊋香城の順和尚を訪ふ。順、之に戲れて曰く、

㊅聖人とは、左氏を指す、此語は、春秋左氏傳にあり。
㊆喆侍者。翠岩可眞禪師の法嗣、潭州嘉祐眞如禪師を指す也。
㊇般若。知慧と譯す、一切諸法を了知するに、不可得なりと、斯く知らば、既に一切に通達して無碍なり、故に知慧と名づく。知慧は光明無量なり、壽無限なり。
㊈本章の大意は、雲水修行者が、山谷に退隱して積德あり、人天感じて世に用ひらるるを勸す。
㊉西山。西山は南昌府にあり。
㊋香城。順。洪州上藍の順禪師は、黃龍南の法嗣也。

「㋑諸葛、昔年隱者と稱す、
茅廬堅く請じて山を出で來る、
松花若し也た春力に沾はば、
根は深岩に在つても也た開くことを著けん。」
と、眞淨謝して退く。（順語錄）

眞淨、㋺廣道者を擧して五峰に住せしむ。廣、疎拙にして應世の才なしと輿議す。廣住持するに逮んで、精、以て己を治め、寬、以て衆に臨む。未だ幾くならずして百廢具に擧ぐ。衲子往來競ひ爭ひ喧しく傳ふ。眞淨、之を聞きて曰く、㋺「學者何ぞ毀譽し易きや、予、毎に叢林を見るに、竊かに議して曰く、『那箇の長老は、道を行ひ衆を安んず。那箇の長老は、常住を侵し用ひず、衆と甘苦を同じうす』と。夫れ善知識と稱して、一寺の主となり、道を行じ衆を安んじ、常住を侵さず、衆と與に甘苦すること、固に當に之を爲すべし、又何ぞ言ふに足らん。士大夫、官と做つて國の爲めに民を安んじて乃ち曰く、『我が㋻贓を受けず、民を擾らず』といふが如し、且つ贓を受けず民を擾らざること、豈に分外の事

㋑諸葛云々。諸葛亮孔明の故事。蜀志五、本傳にあり。
㋺瑞州九峰希廣禪師、世に廓無心と號す。
㋺此の垂示は、衲子外容に由らず、非に他人を毀譽するの過を示す。
㋻賄賂なり。

ならんや」と。（㋺山堂小參）

眞淨、歸宗に住す、毎歲㋽化主㋾疏を納る、布帛雲のごとくに委る、眞淨之を視て嘆じて曰く、「信心の膏血なり、予慙らくは德なし、何を以てか克く當らん。」（㋿李商老日涉記）

眞淨曰く、「㋼末法の比丘、節義あること鮮し。其の高談濶論を見る毎に、自ら謂へり、『人能く及ぶことなし』と。一飯の惠に逮んでは、則ち始めは異にして終には之を輔く。先づ毀つて後に之を譽む、其の是を是と曰ひ、非を非と曰ひ、中正にして隱さゞる者を求むるに少し」と。（壁記）

眞淨曰く、㋹「比丘の法は、受用豐滿なるべからず、豐滿なる時は、則ち溢る。意に稱ふの事多く謀るべからず、多く謀れば、終に敗す。將に之を成すことあれば、必ず之を壞ることあり。予、黃龍先師に見え、應世四十年、語默動靜、未だ嘗て顏色、禮貌、文才を以て、當世の衲子を牢籠せず、唯だ確く見地あつて、實を履み眞を踐む者をば、委曲に成就す。之其の愼重なること、眞に古人

㋺山堂。黃龍堂消雲禪師は草堂善清の法嗣なり。
㋽化主。寄附者。
㋾疏。目錄。
㋿李商老日涉記。雲臥紀談に、海昏の逸人、日涉國夫と號するは、李商老なり、寶峰の湛堂に參じ、時に、大惠老師に參じて禪悅をたのしめりと。
㋼末法。佛滅後に三法あり、即ち、正法、像法、末法の世是なり。今は末法に屬し、大法地を拂ふの時なり。
㋹此垂示は知足の樂きことを明し、並に實踐躬行の至要を示す。

の體裁を得たり、諸方倫比あること罕なり、故に今日衆に臨むに法を取らざるなし」と。（日涉記）

眞淨、建康の保寧に住す。舒王、齋して素繻を㋐覩す。因に寺僧に問ふ、「此れ何物ぞ。」對へて曰く、「㋑紡絲羅。」眞淨曰く、「何の用ぞ。」侍僧曰く、「㋒袈裟と做すに堪へたり。」眞淨、衣る所の布伽黎を指さして曰く、「我れ尋常に此を披る、見る者亦甚だ嫌惡せず」といつて、卽ち㋓庫司に送つて估賣して衆に供せしむ。其の服飾を事とせざること此くの如し。（日涉記）

眞淨、舒王に謂つて曰く、㋔「日用是なる處をば力め行ず、非なる時は則ち固く止む、難易を以て其の志を移すべからず。苟も今日の難を以て、頭を掉つて顧みずんば、安んぞ他日、今日よりも難からざらん事を知らんや」と。（日涉記）

眞淨、一方有道の士の㋕化し去るを聞いては、惻然として嘆息して涕泣するに至る。時に湛堂、侍者たり、乃ち曰く、「物天地の間に生ず、一たび形質を兆す、枯死殘蠹は逃るべからざるに似たり、何ぞ苦に自ら傷まん。」眞淨曰く、「法門の興ること有德のものの之を振ふに賴る、今、皆、亡せり、叢林

㋐財施のこと、卽ち布施なり。
㋑緊織帛。
㋒木綿袈裟なり。
㋓副司卽ち會計係りなり。
㋔此言は境の順逆に依つて志を變ずべからざるを明す。
㋕遷化なり、出世の能事終はる故に、化か化界に遷すなり。

の衰替、此を以て卜すべし」と。（日涉記）

湛堂準和尙、初め眞淨に參ず、常に燈を帳中に炙して看讀す。眞淨呵して曰く、「所謂學者は心を治めんことを求む、學多しと雖も心治まらずんば、縱ひ學ぶとも奚の益かあらん、況んや百家の異學は、山の高く海の深きが如くなるをや。子、若爲して之を盡さん。今、本を棄てゝ末を逐ふ、賤が貴を使ふが如し、恐らくは道業を妨げん、直に須らく諸緣を杜絕して、當に妙悟を求むべし。他日之を觀ば、門を推して㋖臼に入るが如くならん、故に難からず」と。湛堂、卽時に所習を屛去して禪觀に專注す。一日、衲子が諸葛孔明が出師の㋗表を讀むを聞いて、豁然として開悟す。凝滯頓に釋け、辯才無礙なり、流輩の中に在つて、過ぐることあるもの鮮し。

湛堂曰く、「道德ある者は衆を樂ましめ、道德無き者は身を樂む。衆を樂ましむるものは長じ、身を樂むものは亡ず。今、住持と稱する者、多くは㋘好惡を以て衆に臨む、故に衆人之を佛る。其の好すれども其の惡しきことを知り、惡すれども其の好きことを知る者を求むること鮮し。故に曰く、

㋖門臼。俗に門斗といふ、其の入り易きに喩ふ。
㋗湛堂をして、開悟せしめしは、表中の「宮中府中俱爲一體」の句なりしといふ。
㋘大學に、好すれども其の惡しき事を知り、惡すれども其の美なることを知る者天下に鮮し。

『衆と憂樂を同じうし、好惡を同じうするものは義なり、義のあるところ天下孰か焉に歸せざらん』と。」（二事、瀨可賢々撰集）

湛堂の曰く、「道は古今の㊐正㋕權なり、善く道を弘むる者は要變通に在り、變を知らざるものは文に拘り、敎を執し相に滯り、情に殯る、此れ皆權變に達せざるが故なり。㋙僧、趙州に問ふ、『萬法一に歸す、一、何れの處にか歸す。』州曰く、『我れ青州に在つて一領の布衫を做る、重きこと七斤』と。謂へらく、古人權變に達せずんば、是くの如きの酬酢せんや。聖人の云く、㋗『幽谷私なし、遂に至れば斯に響ふ、洪鐘㋔籟に受く、扣くに應へずといふことなし』と。是に知んぬ、通㋘方の上士は、將に常に返して道に合ふ。一を守つて變に應せずんばあらず」と。（與李商老書）

湛堂曰く、「學者友を求めば須らく是れ師たるべき者をもとめよ、時中長く尊敬を懷いて事を作さば法を取れ、所益あることを期す。或は智識差我れに勝らば亦相從ふべし、未だ逮ばざる所を警む、萬か乙も我れと相似たらば、則ち無きにはしかず。」（寶峰實錄）

㋔正は常徑なり。
㋕權は變道、之を暫用して直に廢すべし。
㋙趙州は、南泉普願禪師の法嗣にして、趙州觀音院の從諗禪師なり、此公案は、趙州錄及び碧巖集四十五則に出づ。
㋗此の句は、龍牙頭陀寺の碑文にあり。
㋔つり鐘。
㋘方は道と同じ意味に用ふ。

湛堂曰く、「㋚祖庭、秋晩れて林下の人、囂浮を爲さゞる者、固に自ら得がたし。昔眞如、智海に仕す、嘗て言ふ、『湘西の道吾に在りし時、衆、多からずと雖も、猶ほ老衲數輩ありて此の道を履踐す。大潙より此に至る、九百僧を下らず、七五人我が說話を會するなし。予、是を以て知りぬ、人を得ることは衆の多きにあらざることを』と。（寶錄）

湛堂曰く、「惟人の履行、一㋛の酬一㋜詰を以て固に能く盡く知るべからず。蓋し口舌辯利の者、事或は未だ信すべからず、辭語拙訥の者、理或は窮むべからず、其の詞を窮むと雖も恐らくは未だ其の理を窮めず、能く其の口に服すれども恐らくは未だ其の心に服せず、惟だ人の知り難きことは、聖人も病める所なり。況んや近世の衲子、聰明にして物情に通ずることを務めず、視聽多く只だ過隙を伺ふ。衆と欲に違し道と方に乖く。相尙ぶに欺を以てし、相冒すに詐を以てす。佛祖の道をして靡々として愈薄からしむ、殆んど救ふべからず」と。（答三登直一書）

湛堂妙喜に謂つて曰く、㋝「像季の比丘、外、多く物に徇ひ、內、心を明めず、縱ひ弘く爲すこと

㋚末法の際法道凋衰なる意。
㋛問答。
㋜問詰。
㋝此章にては末世の比丘、古人の敦厚に及ばず、並に交友の士を撰ぶべきことを誡む。

あるとも、皆究竟に非ず。蓋し附する所聖猥にして然らしむ。㋐牛の虻を搏つに飛んで數歩に止れども、若し驥尾に附けば便ち追風逐日の能あるが如し。乃ち依托の勝るなり。是の故に學者、居には必ず處を擇び、遊ぶには必ず士に就く。遂に能く邪僻を絶ち、中正に近づいて正言を聞く。昔福嚴の㋑雅和尚、毎に㋒眞如の喆の標致尚ぶべきを愛す。但だ未だ附く所の者、何人と云ふことを知らず。一日㋓大寧の寛、㋔蔣山の元、㋕翠岩の眞と偕に行くを見て、雅、喜んで自ら勝へず。從容として喆に謂つて曰く、『諸㋖大士は法門の㋗龍象なり、子之に從つて游ぶことを得たり。異日、吾が道の頽頹を支へ、祖敎の利濟を彰はさん。固に予が多囑に在らず』と。」（日涉記）

湛堂、妙喜に謂つて曰く、㋘「參禪は須らく識慮高遠にして志氣超邁ならんことを要す。言を出し事を行ふ、信を人に持して、勢利に隨つて苟も枉ぐること勿れ。自然に朋輩の爲めに描模せられ、時に上下せられじ」と。（寶峰記聞）

㋐搏牛之虻。史記に出づ、「夫搏二牛之虻一、不レ可二以破一蠶蟲一」と。
㋑福嚴雅禪師、洞山の法嗣。
㋒喆の傳は前に出づ。
㋓大寧の道寛禪師、石霜の法嗣。
㋔蔣元覺禪師、石霜の法嗣。
㋕翠岩可眞禪師。
㋖運心廣大にして能く佛事を進つ、故に大士といふ。
㋗知行兼備の人、龍は水中の王、象は陸上の王なり、故に之に喩ふ。
㋘此垂示は越格の納僧ほ、庸人の指目に非ざるを明す。

湛堂の曰く、「予、昔靈源と同じく晦堂に章江寺に侍す。靈源、一日、二僧と城に入る、晩に至つて方に歸る。晦堂因に問ふ、『今日何くにか往く。』靈源曰く、『適に大寧に往きて來る。』時に㋙死心傍に在つて聲を厲して呵して曰く、『參禪は生死を脫せんことを要す、言を發せば先づ誠實を要す、清兄何ぞ妄言することを得たる』と。靈源、熱面して敢て對へず、爾しより城郭に入らず、妄に言を發せず。予、固に知る、靈源死心皆良器なることを。」（日涉記）

湛堂曰く、㋚「靈源好んで經史を閲す、食息も未だ嘗て少しも憩はず、僅かに能く背諷して乃ち止む。晦堂之を呵す。靈源曰く、『嘗て聞く、力を用ふること多き者は、功を收むること遠し。』故に黃太史魯直が曰く、『清兄、學を好む、飢渴の飲食を嗜むが如し、利養紛華を視ること、惡臭の如くす』と。蓋し其の誠心自然なり、特に爾るに非ず」と。（贅疣集）

靈源清和尚、舒州の太平に住す。毎に㋛佛眼が衆に臨んで周密にして、甚だ事を失せざるを見て、因に其の要を問ふ、佛眼曰く、「事を用ふること、寧ろ寛に失すれども急に失すること勿れ。寧ろ略に失すれども詳に失すること勿れ。急なる時は則ち救ふべからず、詳なるときは則ち容るゝ所なし。當

㋙死心。悟新禪師は、黃龍心の法嗣にして、黃龍に住す。
㋚此章は古人、學を好む自ら誠心に出づるを明す。
㋛舒州龍門寺清遠禪師をいふ。

に之を持するに、中道に於てし、之を待つに含綏を以てす。庶幾はくは衆に臨んで、事を行ふの法たらん」と。㋕（拾遺）

靈源、長靈の㋓卓和尚に謂つて曰く、「道の行はるに固に自ら時あり。㋖昔慈明、意を荆楚の間に放にして、耻を含み垢を忍ぶ。見る物之を忽にす、慈明唉ふのみ。其の故を問ふものあれば、對へて曰く、『連城、瓦礫と相觸る、固に勝らざることを知る』と。神鼎に見ゆる後に逮んで、麋、叢林に播し、終に㋗臨濟の道を起す。嗟呼、道は時と與す、苟も强ふべけんや。」（筆帖）

靈源、黃太史に謂つて曰く、㋘「古人の云く、『㋙火を抱いて積薪の中に措いて、其の上に寢ね、火未だ燃えざるに固に以て安しと爲す』と。此れ誠に安危の機、死生の理、明かなること、杲日の如くにして、間に髮を容れざるに喩ふ。夫れ人、平居燕處する時は、生死禍患を以て慮を爲すこと罕なり。一旦、事、不測に出づれば、方に足を頓ち、腕を振つて之を救へども、終に能く濟ふこと莫し」と。（筆帖）

㋕此の意は接衆は緩急其の宜しきを得て、中を失すべからざるを明すなり。

㋓長靈守卓禪師は黃龍清の嗣にして、東京天寧に住す。

㋖慈明、意を荆楚の間に放す云々は、僧寶傳、慈明の章に詳なり、就いて見るべし。

㋗臨濟。黃檗希運の法嗣、臨濟義玄禪師なり。臨濟宗の祖にして、詳しくは、本叢書、臨濟惠照禪師語錄を見よ。

㋘此の章の意味は生死事大なり、平常に誠心すべきを明す也。

㋙三界無安、猶如火宅、卽ち無常なる世の中に平氣に居るをいましむ。此句は、前漢書に出で、賈誼の上疏文にあり。

靈源、佛鑑に謂つて曰く、「凡そ東山師兄の書を接するに、未だ嘗て世諦の事を言はず、唯だ丁寧に軀を忘れ道を弘め、後來を誘掖するのみ。近ごろ書を得るに云く、『諸莊の早損我れ總べて憂へず、只禪家に眼なきことを憂ふ。今夏百余人室中に箇の㋚狗子無佛性の話を擧するに、一人の㋛岌得するなし、此れを憂と爲すべし』と。至れるかな斯の言や、院門の不辨を憂へ、官人の嫌責を怕れ、聲位の不揚を慮り、徒屬の盛んならざることを恐るゝ者と實に霄壤なり。毎に此の稱實の言を念ふ、豈に復た聞くことを得んや。吾が姪、嫡嗣たり、能く力めて宗風を振つて當に宗屬の望みを慰むべし、是れ切禱する所なり。」（禮侍者日錄）

㋚狗子無佛性の話。趙州錄に曰く、僧問ふ、狗子に佛性ありや無しや、師云く、無し、僧曰く、上諸佛に至り下蠕子に至る、皆佛性あり、狗子什麼が爲めに無し、師曰く、伊が業識有る爲めに性ありと。

㋛會といふ字に同じ。

㋜白。

㋝砥石。

靈源曰く、「㋝磨礱㋞砥礪は其の損するを見ざれども時あつて盡く。種樹蓄養は其の益すを見ざれども時あつて大なり、積德累行して其の善を知らざれども、時あつて用ひらる、義を棄て理に背く、其の惡を知らざれども時あつて亡ぶ。學者果して熟く計つて履踐せば、大器を成じ美名を播せん、斯れ今古不易の道なり。」（筆帖）

靈源、㋑古和尚に謂つて曰く、㋺「㋻禍福相倚り、㋼吉凶域を同じうす、惟だ人自ら兆す、安んぞ思はざるべき。或は己が喜怒を專らにして含容に隘く、或は私心廉費して人の欲する所に從ふ、皆住持の急にあらず、玆れ實に恣肆の慾漸禍害の基源なり。」と。（筆帖）

靈源、伊川㋽先生に謂つて曰く、「禍能く福を生じ、福能く禍を生ず。禍能く福を生ずとは、災厄の際に處して切に安を思ふに、理を求むるに深きに緣つて遂に能く祇畏敬謹す、故に福の生ずること宜なり。福、禍を生ずとは、安泰の時に居て其の奢欲を縱にし、其の驕怠を肆にするに緣つて尤も多し、輕忽侮慢なるが故に禍の生ずること宜なり。聖人云く、『難多ければ其の志を成じ、難無ければ其の身を喪ふ。得は乃ち喪の端なり、喪は乃ち得の理なり。』と、是に知んぬ福屢々僥倖すべからず、得常に覬覦すべからず。福に居て以て禍を慮るときは則ち其の福保つべし。得を見て喪を慮る時は、則ち其の德必ず臻る。故に君子は安けれども危きを忘れず、理まるにも亂を忘れざるは是れなり。」（筆帖）

㋺雲峰慧古禪師は、雲源清の法嗣なり。
㋻此垂示は吉凶禍福は人自ら之を招くを云ふ。
㋼老子曰く、禍は福の倚る所、福は禍の伏する所、孰れか其の極を知らん。
㋽賈誼新書、憂患門に聚まり、吉凶域を同じうす。
㋾伊川先生。生の前後に非ず、先覺は覺の意なり。程頤、字は正叔、宋史八十六に出づ、世に伊川先生といふ。

靈源、伊川先生に謂つて曰く、㋿「夫れ人其の迹を惡んで、其の影を畏れて却背して走る者あり、然れども走ること愈々急に跡愈々多く影愈々疾し、如かじ陰に就いて止まらんには、影自ら滅して跡自ら絕ゆ。日用此を明めば坐ながらにして斯の道に進むべし。」（筆帖）

靈源の曰く、㋾「凡そ住持の位其の任に過ぐる者は、克く終あること鮮し。蓋し福德淺薄に量度狹隘に聞見鄙陋にして、又善に從ひ義に務むること能はず、自ら廣くするを以て然ることを致すなり」と。（日錄）

靈源、㋿覺範の㋿嶺海に貶竄せらるると聞いて、嘆じて曰く、「蘭、中途に植う、必ず時を經るの翠なし、桂、幽岳に生ず、終に年を彌るの丹を抱く、古今の才智身を喪ひ、讒誘禍に罹るもの多し。其の世と浮沈して能く其の身を保つもの少し。故に㋿聖人の言く、『當世聰明深察にして而も死に近きものは、好んで人を議するものなり、博辯宏大にして而も其の身を危くする者は、好んで人の惡を發くなり。』㋿覺範に在りて之ありと。」（章江集）

㋿此の垂示の本意は妄を捨て、眞に就くの要を明す。
㋾此の章にては、事に當つて分に適はざれば、爲すべからざるを明す。
㋿覺範。筠州清涼寺德洪禪師、字は覺範、黃峰文の法嗣。
㋿嶺外海國。
㋿聖人云云。此聖人とは、老子を指す。
㋿覺範古塔主の說を破し、神秀傳の非を辯じ、宣律師、二祖が非を破したる等のことあり。故に靈源之を指して人の惡を發くと云ふ。

靈源、覺範に謂つて曰く、「聞く南中に在りし時、楞嚴を究めて特に箋釋を加ふと。不肖が望むところにあらず、蓋し文字の學は當人の性源を洞かにすること能はず。徒に後學の爲に先佛の智眼を障ふ。病他に依つて解を作し、自悟の門を塞ぐにあり。口舌を資くる時は則ち淺聞に勝るべし、神機を廓するときは則ち終に妙證を極めがたし、故に行解に於て多くⓑ參差を致し、日用見聞尤も隱昧を增す。」

（章江集）

靈源曰く、「學者擧措審かにせざるべからず、言行稽へざるべからず。言寡きものは未だ必ずしも愚ならず、利口の者は未だ必ずしも智ならず、鄙樸の者は未だ必ずしも悖らず、承順の者は未だ必ずしも忠ならず。故に善知識辭を以て人情を盡さず、意を以て學者を選ばず。夫れ湖海の衲子誰れか道を求むることを欲せざらん、中に於て悟明見理の者千百に一もなし。其の間身を修め行を勵まし、學を聚め德を樹つること三十年に非ずんば致すこと能はず。偶々一事過差すれば叢林之を棄てゝ身を終るまで立つべからず。夫れ㋐耀乘の珠も㋑類なきこと能はず、連城の璧も寧ろ瑕なきことを免れんや。凡そ有情にあつて安んぞ咎なきことを得ん。夫子は聖人なり、猶五十にして易を學ばゞ、大なる過なしと云ふを以て言と爲す、契經に則ち曰く、『念の起ることを怕れず、惟だ覺の遲からんことを恐る。』況んや聖賢より以降孰か過失なからんや、善知識曲成に在れば、則ち品物遺さず。故に曰く、巧梓輪桷の用に順ひ、枉直材を廢つることなし。良御險易の宜しきに適し、駑驥性を失ふことなし。物既に此くの如し、人も亦宜しく然るべし。若し進退愛憎の情に隨ひ、離合異同の趣に繫らば、是れ繩墨を捨てゝ曲直を裁し、權衡を棄てゝ重輕を較ぶるが如し、精微と曰ふと雖ども認なきことを能はず」と。

ⓑひとしからざる貌、詩に參差たる荇菜云云。
㋐前後十二乘を輝かす玉。
㋑疵なり。

㋒靈源の曰く、「善く住持するものは、衆人の心を以て心となし、未だ嘗て其の心を私せず。衆人の耳目を以て耳目となして、未だ嘗て其の耳目を私せず。遂に能く衆人の志に通じ、衆人の情を盡す。夫れ衆人の心を用つて心と爲る時は、則ち我が好惡乃ち衆人の好惡なり。故に好者邪ならず、惡者謬らず、又安んぞ私かに腹心に託して、其の諂媚に甘服することを用ひんや。既に衆人の耳目を用つて耳目と爲る時は、則ち衆人の聰明は皆我が聰明なり、故に明鑒みずといふことなく、聰聞かずと云ふことなし。又安んぞ私かに耳目に託して固に其の蔽惑を招くことを用ひんや。夫れ腹心に布き耳目に託すること、惟だ賢達の士は己が過を求めんことを務む、衆と欲を同じうして偏私する所なし、故に衆人心を歸せずと云ふことなし。所以に道德仁義、遐遠に流布することは宜しく其れ然るべし。愚不肖の意は人の過を求むることを務む、衆

㋒此の章は住持の要を明す。

と欲に達して偏私に溺る、故に衆人心を離れざるなし、所以に惡名險行遐遠に傳播する者は、亦宜しく其れ然るべし。是に知んぬ住持の人衆と欲を同じうす、之を賢哲と謂ふ。衆と欲に違す、之を庸流と云ふ。大率腹心を布き、耳目の意に託すること殊あり、而して善惡成敗相返くこと此くの如し。過を求むるの情異なることあつて、人に任ずる道同じからざる者に非ざることを得んや。」

霊源の曰く、㊉「近世長老となつて二種の緣に涉る、多く見る智識明かならず、㋒二風の爲めに觸れられて法體を喪することを。一には逆緣に應じて多く㋓衰風に觸る、二には順緣に應じて多く㋔利風に觸る。既に二風の爲めに觸れらるゝ時は、則ち喜怒の氣心に交はる、鬱勃の色面に浮ぶ、是れ辱しめを法門に取り、賢達に譏り誚らるゝことを致す。唯だ智者善く能く轉じて攝化の方を爲し、美く後來を導く。㋕瑯琊和尚の如きは、蘇州に往いて㋖范希文に看ゆ。因に信施を受くること千餘緡に及ぶ、遂に人を遣はして陰かに在城諸寺の僧數を計つて、皆密かに錢を送る。同日に㋗衆檀の爲めに齋を設く。其れ卽ち預め范公を辭す、是の日早を侵して船を發す、天明に逮んで衆已に去ることを知る、追ふて常州に至つて見ることを得るものあり、法利を受けて廻る。此の老の一擧を觀るに、姑蘇の道俗をして悉く信心を起し、道種を增進せしむ。此れ所謂轉じて攝化の方とするなり。夫の法位を竊んで利養を苟め、一身の謀をする者と實に霄壤なり」と。（與㋙德和尚書）

㊉此の章の大意は、眞人は順逆の境に應じて、教化の善方便となすを明す。

㋒二風。維摩經佛國品に「毀譽不レ動如二須彌一」と。その註に、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八法の風、如來を動ぜず、四風の須彌を吹くが猶しと。卽ち毀譽の二風をいふ也。

㋓衰とは滅なり、凡そ我に滅損ある之を云ふ。

㋔利とは意に可なるもの。

㋕瑯琊。汾陽の法嗣、瑯琊山惠覺廣照禪師、西洛の人なり。

㋖范希文。范仲淹、字は希文といふ。謚して文正公といひ、兵部尚書を贈らる。

㋗大衆檀越。

文正公、瑯琊に謂つて曰く、「去年此に到つて林下の人の語るべき者を得んことを思ふ。嘗て一吏に問ふ、『諸山に好僧ありや否や。』吏、北寺㊈瑞光、希・茂の二僧を稱して『佳し』となす。予曰く、『此の外諸禪律中に別に無しや。』吏對へて曰く、『儒は士行を尊ぶ、僧は德業を論ず。希・茂二人の如きは三十年蹈むこと閫を越えず、衣は惟だ布素なり、聲名利養了に滯るところなし。故に邦人其の操履を高んで之を師敬す、其の登座說法、佛に代つて化を揚げ、機辯自在にして善知識と稱する者の如きは、頑吏の能く曉るにあらず。』暇日に逮んで希・茂の二上人を訪ふ、其の素行を視るに、一へに吏の言の如し。予退いて思ふ、舊蘇秀は好風俗と稱す、今老吏を觀るに尙ほ能く君子小人の優劣を分つ、況んや其の識をや」と。瑯琊が曰く、『若し吏の言ふ所の如きは、誠に高議たり、請ふ之を記して未聞を曉らん』と。」（瑯琊別錄）

㋙德和尚。黃龍霊源惟清禪師の法嗣、濃州欽山の元德禪師なり。

㊈蘇州城内に在り、寺に瑞あり、故に瑞光といふ、一に鍾鼓自ら鳴る、二に寶塔光を放つ、三に聚竹交加、四に白鼠聽法、今の臥佛寺なりと。

靈源曰く、「鐘山の元和尚、平生公卿に交らず、名利を苟めず、卑を以て自ら牧ひ、道を以て自ら樂む。士大夫初め其の應世を勉む、元曰く、『苟も良田あらば何ぞ晩く成ることを憂へん、第恐らくは才具に乏しきのみ』と。荆公之を聞いて曰く、『㋐色のまゝに斯れ舉す、翔つて後に集まる、元公に在つて之を得たり』と。」（寶疣集）

靈源曰く、㋑「先哲の言學道は之を悟るに難しとなす、既に悟らば之を守るを難しとなす、既に守つては之を行ふを難しとなす。今行ふ時に當る、其の難きこと又悟と守とに過ぎたり。蓋し悟と守とは、精進堅卓にして勉むること己が躬に在るのみ。惟だ行は必ず心を等しうして、死誓して以て己を損し他を益するを任となす。若し心等しからず、誓堅からざるときは、則ち損益倒置して便ち墮ちて流俗の阿師となる。是れ宜しく祗み畏るべし。」

靈源曰く、「東山師兄、天資特異にして㋒語默度に中る、尋常㋓語句を出示するに、其の理自ら勝れたり。諸方之に効つて詭俗ならざらんことを欲すれば、則ち淫陋にして終に能く及ぶことなし、古人の中に求むるに亦得べからず。然れども猶ほ謙光して物を導くこと、嘗て曰く、『我れ㋔保寧克勤の諸子無くんば、眞に法門中の罪人なり』と。」

㋐鳥、人の顏色を見て善からざれば則ち飛去り、回翔して警視して後下り止まる、人の機を見て作し、審かに處る所を擇ぶ、亦當に斯くの如し。

㋑此章は學道の究竟は、行つて衆生無邊誓願度に在るを明す。

㋒此の章は語默の道を示す。

㋓僧女離魂の話の如きを指す。

靈源の道學、行義、㋕純誠厚德にして古人の風あり、安重にして言寡し、尤も士大夫の爲めに尊敬せらる。嘗て曰く、「衆人の忽にする所は、聖人の謹むところなり、況んや叢林の主たるをや。佛化を助宣すること行解相應するにあらずんば、詎んぞ之を爲すべき。要すらくは時々に檢責するにあり、聲名利養をして心に萠すことあらしむることなかれ。儻し法分未だ㋖孚あらざる所あれば、衲子未だ服せざる所あり、當に思を退け、德を修め以て方來を待つべし。未だ身正しくして叢林治まらざるものあることを見ず、所謂德人の容を觀れば、人の意をして消せしむ、誠實茲に在り。」（記聞）

靈源、圜悟に謂つて曰く、㋗「衲子見道の資ありと雖も、若し深く蓄へ厚く養はざれば、用を發することを必ず峻暴、特に教門に補なきのみに非ず、將に恐らくは禍福を招くことあることを」と。

㋕潭州開福の道寧禪師。

㋖精一無雜を純といひ、眞實無妄を誠といふ。

㋖諸人之を信ずるを孚といふ。

㋗此の章は聖胎長養の要を示す、悟りて後も山林に隱れて定力を練磨するなり。

圜悟禪師曰く、「學道は信を存す、信を立つること誠にあり、誠を中に存して然して後衆をして惑なからしむ。信を己に存して、以て人をして欺くことなからしむ、惟だ信と誠と失あれば補なし。是に知る誠一ならざるときは、則ち心能く保つことなし、信一ならざるときは、則ち言能く行ふことなし。㊂古人の云く、『衣食は去るべきも誠信は失すべからず。』惟だ善知識は當に人に教ふるに誠信を以てす、且た心既に誠あらず、事既に信ならずして善知識と稱せば可ならんや。故に曰く、『惟だ天下の至誠のみ遂に能く其の性を盡す、能く其の性を盡すときは則ち能く人の性を盡す。』而も自ら既に己を盡すこと能はずして人を盡すことを望まんと欲せば、衆必ず紿つて從はず。自ら既に前に誠あらずして、後に誠あらんといはば、衆必ず疑ふて信せず。所謂髮を割ること宜しく膚に及ぶべし、爪を剪ること宜しく體を侵すべし。良に以みれば誠至らざれば則ち物感あらず、損至らざれば則ち益臻らず。蓋し誠と信と斯須くも己を去るべからざること明かなり。」（與㊁㉑虞察院書）

圜悟の曰く、「人誰れか過なからん、過つて能く改むる、善焉より大なるはなし。從上皆過を改むるを稱して賢となす、過なきを以て美となさず、故に人の己を行ふこと多く過差あり。上智下愚俱に免れざる所なり、惟だ智者は能く過を改めて善に遷る、愚者は多く過を蔵し非を飾る。善に遷るときは則ち其の德日に新なり、是れを君子と稱す。過を飾るときは則ち其の惡彌著はる、斯れを小人と云ふ。是れを以て義を聞いて能く徙るは、常の情の難しとする所なり、善を見て樂しみ從ふは、賢德の尙ぶ所なり。望むらくは㊃公言外に㊄相忘せば可なり。」（與㊁㊄聞主簿）

㊂論語に顏淵子貢政を問ふ云云。

㉑虞察院。宋史列傳にあり。虞策字は經臣、杭州錢塘の人にて、元祐五年召して、監察御史となし、右正言に進む。

圜悟、㊁隆藏主に謂つて曰く、「叢林を理めんと欲して、人の情を得ることを務めざる時は、則ち叢林理むべからず、人の情を得ることを務めて、下に接することを勤めざる時は、則ち人情得べからず。勤むることを務め、下に接して賢不肖を辨せざるときは、則ち下接すべからず。賢不肖を辨ずることを務めて、其の過を言ふことを惡み、其の己に順ふことを悅ばゞ、則ち賢不肖辨ずべからず。惟だ賢達の士は過を言ふことを惡まず、己に順ふことを悅ばず、道を爲せ

㊃聞主簿に與ふの書なれば、公は聞公を指す。

㊄言跡を忘じ、此間に向つて自得すべきを明すなり。

㊁聞主簿。未詳なれど、增留府に、吳の聞見昌は、古瑪の人、宋の咸平に進士に登りたりと、或は此人歟との說あり。主簿とは、宋代に新設せし役目にして、宋の開寶三年、諸縣に令して、千戶に令簿尉をおけりとあり。群書要語に、「主簿は、簿務を司る」とあり、今の監視官なるか。

㊁虎丘紹隆禪師、圜悟の嗣なり。

ば是れ從ふ。所以に人情を得て叢林理まる。」（廣錄）

圜悟曰く、「住持は衆智を以て智となし、衆心を以て心と爲す。恒に恐る一物其の情を盡さず、一事其の理を得ざることを。孜々として訪納ればただ善く是れを求む、當に理の是非を問ふべし、詎んぞ事の大小を論せん。若し理の是ならんには靡費大なりと雖も、之を作さんに何ぞ傷まん。若し事の非ならんには用度小なりと雖も、之を除かんに何ぞ害あらん。蓋し小は大の漸なり、微は著の萌しなり、故に賢者は初めを愼しみ、聖人は戒を存す。涓々遏まざれば終に桑田と變す、炎々除かざれば卒に原野を燎く。流煽既に盛んなれば禍災已に成る、之を救はんと欲すと雖も固に及ぶことなからん。古に云く、『細行を矜まざれば終に大德を累す』とは、此れ之を謂ふなりと。」（與㊐佛智書）

圜悟、㊐元布袋に謂つて曰く、「凡そ長老の職と稱して佛化を助宣せば、常に利濟を以て心と爲すことを思ふ。之を行ふて矜ることなきときは、則ち及ぶ所のもの廣く、濟ふ所のもの衆し。然れども一も己に矜り能を逞しうするの心あれば、則ち僥倖の念起つて不肖の心生ず。」（雙林石刻）

㊐佛智。圜悟勤の法嗣、明州育王の佛智端裕禪師なり。

㊐此庵景元禪師、圜悟の嗣なり。台州臨國に住す。叢林を經歷して、蔣山に圜悟に謁し、久しく會中にあり、一日、二僧の死心錄を閱するに遇ふて、自ら冥契するところあり、遂に可を受く。圜悟嘗て人に語つて曰く、「些子の產あり、元兄が一布袋に盛り將ち去らる」と。叢林、是れより元布袋と稱せりと。

㊐圜悟、妙喜に謂つて曰く、「大凡舉措當に始終を謹むべし、故に善く作す者は必ず善く成す、始を善くする者は必ず終を善くす、終を謹むこと始の如くなるときは則ち敗事なし。古に云く、『惜しいかな衣未だ成らざるに轉じて裳となすことを。』『行くこと百里にして之を九十に半ばす。』斯れ皆始あつて終なきことを嘆ずるなり。故に曰く、『初あらずと云ふことなく、克く終あること鮮し。』昔晦堂老叔曰く、「黃檗勝和尙も亦奇衲子なり、但だ晚年謬るのみ、其の初を觀るに之を賢と謂はざるを得んや』と。」（雲門庵集）

圜悟、佛鑑に謂つて曰く、㊁「白雲師翁、動用擧措必ず往古に稽ふ、嘗て曰く、『事古へに稽へざる、之を不法と謂ふ。』予、多く㊀前言往行を識つて遂に其の志を成す。然れども特に古へを好むに非ず、蓋し今人は法とするに足らざるなり。先師每に言ふ、『師翁古へを執つて時の變を知らず』と。師翁が曰く、『故きを變じ常を易ふ、乃ち今人の大患なり。』予、終に爲さざるなりと。」（蟾和尙日錄）

㊐本章は納子たるもの終始一貫すべきを明す。

傳法
慈明
楊岐―白雲―五祖―圜悟
黃龍
黃檗勝
晦堂

㊁此章徒らに古を除き、新を逐ふことを誡む。

㊀易經曰く、君子以て多く前言往行を識つて、以て其の德を養ふ著ふ。

㊐佛鑑、懃和尚太平より智海に遷る、郡主曾公元禮、問ふ、「孰れか住持を繼ぐべき。」佛鑑、㊟昺首座を擧す。公一たび見んことを得んと欲す。佛鑑曰く、「昺、人となり剛正にして、世に於て邈然たり、嗜好する所なし、之を請ずれども、猶ほ恐らくは從はじ、詎んぞ肯つて自ら來らんや。」公、固く之を邀ふ。昺曰く、「此れ所謂呈身の長老なり」と。竟に㊁司空山に逃る。公顧みて佛鑑に謂つて曰く、「子を知ることは父に若くはなし」と。卽ち諸山に命じて堅く請ず、抑ふるども止むことを得ずして命に應ず。（續侍者日錄）

佛鑑、㊠詢佛燈に謂つて曰く、「高上の士は名位を以て榮と爲さず、達理の人は抑挫の爲めに困せられず。其れ恩を承けて力を効し、利を見て誠を輸すことあるは、皆中人以下の爲るところなり」と。（日錄）

佛鑑、昺首座に謂つて曰く、「凡そ長老と稱せば、須らく一物好むところなきことを要す、一も好むところあるときは、則ち外物に賊せらる。嗜欲を好むときは則ち貪愛の心生す、利養を好むときは則ち奔競の念起る。順從を好むときは則ち阿諛の小人合す、勝負を好むときは則ち人我の山高し、㊡掊刻を好むときは則ち嗟怨の聲作る。總べて之を窮むれば一心を離れず、心若し生ぜざれば萬法自ら泯す、平生の所得斯れを越ゆることなし、汝宜しく旃れを勉めて來學を規正すべし。」（㊢南華石刻）

㊐此章は古德の出世は、止むを得ざるに出づ、自ら衒ふて住持せざるを明す。
㊟昺首座。福州南華の知圓禪師、太平勤禪師の法嗣。
㊁司空山。舒州にあり、卽ち太湖縣の北西百六十餘里にして、祖師來の相傳の地にして、三祖傳衣の地と稱し、山高く峻嶮なり、半腹に洗馬が池あり、古の司空原なり。唐の李白に詩あり、
「卜居司空原。北將三天柱鄰。雲霞萬里月。響開九江春。」
㊠詢佛燈。太平懃の法嗣、安吉州何山佛燈守詢禪師なり。

佛鑑曰く、「先師節儉にして一の㊤鉢囊鞋袋も百綴千補するも、猶ほ棄つるに忍びず、嘗て曰く、『此の二物相從つて關を出づ、僅かに五十年、詎んぞ肯へて中道にして之を棄てん。』南泉の㊦悟上座ありて、㊧褐布裰を送る、自ら言く、『之を海外に得たり』と。冬服すれば則ち溫なり、夏服すれば則ち涼し。先師の曰く、『老僧寒き時は柴炭紙衾あり、熱きときは松風水石あり、此れを蓄へて奚んか爲ん。』終に之を却く。」（日錄）

佛鑑曰く、「先師、眞淨遷化すと聞いて、位を設け供を辨じて、哀哭禮に過ぎたり。嘆じて曰く、『斯の人得難し、道の根柢を見て枝葉に滯らず、惜むらくは其れ早く亡ぶることを。殊に未だ其の道を繼ぐ者あることを聞かず、江西の叢林此れより寂寥ならん』と。」（日錄）

㊤聚斂刻剝、費を無理に節して蓄積するなり。
㊦南華石刻。蘇嶺林子瞻、紹聖元年秋、南華を經由し、銘を作ると、雲臥紀談にあり。
㊧持鉢（食器）を包裝する袋。（佛在世の時、比丘鉢を包まして持ち顚倒して破る、之より袋を以て包むことを制す）
㊨悟上座。泉南の悟とは、高庵善悟禪師なる歟。
㊧火浣布なり。